
王都警備隊

洸海

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王都警備隊

【Nコード】

N5846V

【作者名】

洸海

【あらすじ】

元盗人の少女リーファは、二年前に変わり者の国王に拾われて以来、城に居候の身。一念発起して王都警備隊に入隊志願したものの結果は不合格。ところが王のはからいで、特別に追試が行われることになる。

意気込んで挑むリーファだが、行く手には予想外の事件が待ち受けており……。

王都を舞台にした、城と街の人々が織り成す物語。

サイト掲載作に少し手を入れて、文章を軽量化した版です。（

ストーリー面での変更はありません

一章 不合格だ

一章

ああ、森だ。

そう直感した。

人の歴史よりも古くから存在する、堂々たる巨樹に囲まれた緑の聖域。その静謐が、心に沁みとおる。

樹々の息吹が聞こえたように思った、直後、幻想が揺らいだ。

我に返って目をしばたいたリーファの前に、一人の旅人が立っていた。砂まじりの乾いた風が、汚れた外套の裾を巻き上げて走り去る。

旅人が手を差し出した。

「来るか？」

問いかけた声は、深く広い森の響きがした。リーファは答えず、改めて相手を見つめる。不思議な力を湛えた緑の双眸が、再び心をとらえた。

彼が誰だかは知らない。

問いかけの意味も、

差し出された手の意図も。

だが、彼女はその手を取り、立ち上がった。

二年後、春。

王都シエナを望む城の中庭で、リーファは一人の男を相手に剣を振るっていた。

ガッツ、ギン！

鋼の噛み合う音が、館の石壁に跳ね返り、青空に吸い込まれていく。

「っと……！」

反射的に体を捻り、鋭い突きをかわすと、三つ編みにした焦茶色の髪が背中ではねた。見物人が、わっと声を上げる。

（野郎、今のが当たったら洒落になんねえぞ）

殺す気か、とリーファは怒りを込めて敵を睨んだ。

対戦相手はディナル「イーラ、王都警備隊の隊長である。ちなみに義理の叔父でもあるが、だからと言って仲が良いとは限らない。

顎から汗が滴り落ちる。リーファは息を整えながら間合いを取り、隙を窺った。

悔しいかな、既に勝敗の行方は見えていた。

リーファは十八歳の女としては、身長こそ標準的だが、体格は昔と同じく痩せている。対するディナルは、リーファが心中密かに熊オヤジと呼ぶほどの体躯。ともに打ち合えば、こちらが消耗するだけだ。

（やつぱり、速さしか勝ち目がない）

ヒュッ、と一瞬、息を吸い込む。

刹那、ディナルの余裕が失せるほどの素早さでリーファが斬りかかった。

が、疲労の限界に達していた彼女は思うように動けず、あえなく反撃をくらってよろけ、すてんと尻餅をついた。その眼前に、剣の切っ先が突き付けられる。

「不合格だ」

ディナルが傲然と言い放ち、座り込んだままのリーファは、ぎりと歯がみした。手のひらで地面を叩き、吐き捨てるように唸る。

「きつたねえ……！ 畜生、こんなの不公平だ！」

「なんとも言え。小娘に警備隊員は務まらん事が、よく分かったろっ」

フンとディナルは鼻を鳴らし、練習用の剣を無造作に置き場へ戻した。

リーファは屈辱に唇を噛み、言うことをきかない足を立たせようと叱咤する。と、勝負を見物していた野次馬の中から、一人の青年

が進み出てリーファに手を差し出した。

この地方には稀な漆黒の髪と、鮮やかな夏草色の瞳。目に付く特徴だけでも充分だが、それに加えて身に帯びた強い存在感のゆえに、群集から際立って見える。

青年はリーファを立たせ、ディナルに向き直って言った。

「確かに、体力ではリーに勝ち目はないな。しかしディナル、最後の一撃はおまえも怯んだろう」

低く深みのある声に、面白そうな気配が隠れている。ディナルは渋い顔をした。

「ご自分が拾ってきたもんだから、鼻屑をしたいと思われるのは分かりますがね、陛下。警備隊は子供のごっこ遊びじゃないんですよ。それこそ体力勝負な仕事です」

「そうとばかりも言えんのかな？」

穏やかながらはつきりと言い返され、ディナルのこめかみがぴくりと引きつった。愛想笑いを浮かべたまま、彼は険悪な声で応じる。「いいえ、何はなくとも体力が第一です。そいつみたいな痩せっばちの女に、街の安全を守るわけがありません。国王陛下のお膝下で、悪党をのさばらせるわけには参りませんからな」

彼の言う通り、実際に警備隊の仕事の大半は、酔っ払いの保護や喧嘩の仲裁、スリや置き引きの現行犯逮捕などで、腕力がなければ務まらない。また、足を使う地道な調査には、体力も必要だ。

「そうでなくとも最近、警備隊を侮る輩が増えておるのです。小娘などに制服を与えたらどうなることか！ では失礼、私は仕事に戻らねばなりませんので」

言うだけ言って、彼はまさしく熊のように、のしのしと門の方へ去って行く。その後ろ姿に向かって、リーファはいーっと歯を剥いた。

「くたばれ、クソジジイ」

聞こえないように罵ってから、体勢を変えようとして膝が抜け、おっと、とよろける。それを支えてくれた国王陛下に、リーファは

面目無さそうに礼を言った。

「悪いなシンハ。せつかく場所、貸してくれたのに」
「気にするな」

国王シンハ「レーダは苦笑して、リーファの背中をぽんと軽く叩く。

「疲れたろう。茶を淹れるか」

「うー……その前に水を浴びてくるよ」

片手を挙げて言うと、リーファは館の裏手へ足を向けた。見物人たちが口々に、残念だったなとか、惜しかったのにとか、勝手な感想を投げてくる。今のリーファには、それが小石のように煩わしく痛かった。

汗と憤懣と一緒に洗い流し、新しい麻のチュニツクに着替えたリーファは、少しさっぱりした気分で国王の私室を訪れた。

面倒な拝謁願いだの、取り次ぎだのは無用だ。

元々この国では伝統的に王族が庶民的で、国民の方も他国民が啞然とするほど、王族に対して遠慮がない。それに加えてリーファの場合、かつて盗人だったのをシンハに拾われた、という事情もあって、お互い完全に身内感覚になっている。

もちろん、素性の怪しい小娘を連れ帰った若い国王に、渋い顔をした者は大勢いた。だがこの王の型破りはその程度に留まらないため、ほどなく諦めと共に容認されたのだ。

そんなわけで。

室内ではシンハが紅茶を用意して待っていた。本日のお茶菓子は国王陛下お手製、苺のタルト。今春初の苺菓子である。

甘酸っぱい香りをかいで、リーファは思わず苦笑した。

「まあ仕事さばってお菓子作りかよ。年中何かしら季節ものの茶菓子が食えるのは、オレとしちゃ嬉しいけどさ」

「誰がさばり魔だ、人聞きの悪い」

そんなことを言う奴には分け前をやらんぞ、などとシンハが拗ね

る。しかし彼が頻繁に厨房に立つのは、自分が美食家だからというのでは決してなく、人の喜ぶ顔が見たいからだ。よってリーファが食べ損ねる心配をする必要もなかった。

「いい歳の野郎が拗ねたって可愛くねーぞ」

笑いながら軽くいなして、席につく。三十路の足音が聞こえるシンハは何とも言い返せず、無然としながら茶を注いだ。

いつもならそのまま、いただきまーす、と遠慮なく食いつくリーファなのだが、今日は紅茶とタルトを前にしたまま、ふとうつむいしてしまう。

シンハは何も言わず、向かいに座って自分の紅茶を飲んだ。下手に慰めたり励ましたりはいらないが、一人にしておこうと放置するでもない。リーファはその心遣いを嬉しく思うと同時に、ますます己が情けなくなった。

「……なんか、いつまでも世話になりっぱなしで、本当にごめん」

「俺はたいして世話をしてないさ」

さらりと受け流され、リーファは苦笑した。目をやると、いつもと変わらぬ夏草色の瞳が、穏やかなまなざしを返してくる。それを受け止められず、リーファはまたうつむいた。

（最初は平気だったのになあ）

脳裏に、出会った日の光景がよみがえった。

今いるこの国と、リーファの生まれ故郷との、ちょうど中間にある街でのことだ。

元々盗人一族に生まれ育った彼女は、他に生計の道を知らず、やはりそこでも他人の懐から失敬して己の口を養っていた。しばらく不漁が続いて道端に座り込んでいた時、たまたま通りがかったシンハと目が合ったのだ。

ああ、森だ、と直感した。

（あの時はただ、きれいな……不思議な目だと思っただけだった）
じっと目をそらさなかったリーファに、シンハは援助の手を差し伸べた。俺の目をまともに見返せる奴は少ないからな、と、それだ

けの理由で。

聞いた時には呆れたものだが、じきに納得した。

人並み外れて強く太陽神の加護を受けているという彼は、周囲を圧する存在感をもっている。その緑の双眸に直視された人間は、ほとんども顔を伏せてしまうのだ。

普段は平気なリーファでも、時には己に対する失望のゆえに、耐えられなくなる。ちょうど今のように。知らずため息がこぼれた。

「おまえには貰ってばかりだ。衣食住も、家族も、……まともな暮らしって奴も」

王立図書館司書の養女にしてくれた。この国の言葉を養父から学び、多くの本を読めるように。そして盗むばかりでなく、人の役に立つ喜びを覚えてくれた。いちいち感謝の言葉を口にしたりはしないが、恩の深さを感じてはいる。

「だから、いい加減にちゃんとした職について、ちよつとは恩返しをしようと思ったのにな。慣れない事するもんじゃねえや」

リーファはわざと冗談めかして言い、無理に苦笑した。シンハは片眉を上げて、おどけた表情を見せる。

「おまえが殊勝だと気味が悪いな。いつもの図々しさはどうした？」
「なんだよ。人が真面目に話してるのに」

リーファはムツとしたものの、彼の手ぶりに促されてタルトにフォークを突き刺した。一口食べると爽やかな香りと甘味が広がり、すつと肩から力が抜けて行く。無意識に寄っていた眉間の皺をすっかり消してしまふほどの、優しい安堵。

思わず食べる方に夢中になっていると、独り言のようにシンハがつぶやいた。

「急がなくていい」

「んあ？」

リーファはフォークをくわえたまま顔を上げる。シンハは横を向いて、窓の外を眺めていた。少なくとも、姿勢だけは。

「俺はおまえに何かを恵んでやったわけじゃない。自分がしたいよ

うにただけだ。だからおまえも、望むことをすればいい」

そこまで言うと、彼は照れ隠しのように小さく咳払いして、こちらに向き直った。

「で、おまえの望みが　義理立てじゃなく、自分の希望として王都警備隊に入りたいと言うのなら、俺も出来る範囲で協力するさ」

「七光は要らねえよ」

馬鹿、とリーファはばやいて紅茶を飲む。

「そうでなくても既にオレは、一生かかっても返せないぐらいの借金を抱えてんだぞ。この上さらに負債を増やすんじゃねえや」

「借金？　誰も返せとは……」

「馬鹿野郎、オレの面倒みるのだって税金から賄われてんだろが。」

贅沢はしちゃいけないけど、食費に衣装代、勉強するのに使った羊皮紙やら何やら、いったい総計いくらになるかなんて、あああ考え出すと頭痛が」

思わず頭を抱えたリーファに、シンハは堪えきれず失笑した。

「律義だな」

「元盗人は金勘定に細かいんだよ。まあ、それはともかく……まず体力をつけて、ディナルのおっさんを納得させねえと。でもやっぱり無理かなあ」

あー、とため息。金髪熊オヤジを思い出すと、途端に気分が滅入る。

「おっさん、何がなんでもオレを警備隊に入れたくないみたいだしさ。嫌われてっから」

「柄が悪くて生意気で可愛げがないからな」

にやにやしながらシンハが言い、リーファは口をへの字に曲げた。「へえへえ、どうせオレは可愛くありませんよ。国王陛下にぞんざいな口をきくわ、毎日のように食い物をたかるわ、手癖は悪いわ」

「しかもそのくせ頭がいい」

「見た目も冴えな……は？　何だって？」

自虐的にばやいていたリーファは、数拍遅れてシンハの台詞に反

応じた。からかわれたのかと思ったが、案に相違して彼は真面目だった。

「たった二年でほぼ完全に　上品か下品かはともかく　エフアーン語をものにして、図書館の蔵書を半分以上読破した。機転が利いて、物事を理解するのも、それに対処するのも早い。だからディナルは余計に気に食わないんだろう」

「……おまえ、なんか悪い物でも食ったか？」

気色悪い、とばかりにリーファは顔を歪めた。おいおい、とシンハが苦笑する。

「せっかく人が褒めてやつてるのに、なんだそれは。いや、俺は事実を言ってるんだぞ。俺の知っている限りで言えば、おまえは平均的な司法学院卒の警備隊員より、よほど頭が切れる。この国の慣例や常識にとらわれず、独特の発想をするしな。そういう面で、おまえは役に立つと思うんだが」

彼はそこで言葉を切り、しょうがない、と言うように肩を竦めた。ああなるほど、とリーファも察して納得する。

「おっさんにしてみれば、今まで自分達が築き上げてきたやり方つてのが、素人の思いつきと小手先だけで引つ掻き回されることになりそうで、嫌なんだな」

「そついうことだ。そら、飲み込みが早い」

「そこまで言われりゃ分かるよ。あーあ、参ったなあ」

うんと伸びをして、背もたれに身を預ける。シンハは少し考えている風情だったが、ややあって自分の中で結論を出したらしく、ひとりで小さくうなずいた。

「まあ、ゆっくり納得させるしかないだろうな。折を見て説得するように、他の警備隊員にも話をしておこう。おまえは気にせずに、好きな事をしてろよ」

「言われなくてもそうするさ。おまえの方は、あんまり好き勝手すんじゃないぞ。腐っても国王様なんだからな」

なんとなく嫌な予感がしてそう釘を刺したが、言われた当人は分

かっているのかいないのか、おざなりな了解の返事を寄越しただけだった。

案の定、後日のこと。

国王の私室へ呼ばれたリーファは、何やら企み顔のシンハと不機嫌なディナルの二人に迎えられ、うえ、と顔を歪めた。次いで、室内にある別の物に気が付く。

椅子の背にかけられた^{えんじ}臙脂色のダブレット　警備隊の制服だ。

「シンハ、おまえなあ！」

喜ぶどころか怒声を上げ、リーファはシンハの襟首を締め上げた。

「好き勝手すんなって言っただろ！？　職権濫用してこんな……」
が、シンハは慌てもせずに彼女の手をはがし、短く一言告げた。

「追試だ」

「……は？」

リーファはぽかんとなり、どういう事かとディナルを振り向く。赤ら顔の隊長はその顔をさらに赤くして、いまいまげに唸った。

「別種の試験を課すことになった。体力ではどうしたって、小娘では話にならないのだから。その他の面とやらでおまえが役に立つかどうか、見せてもらう」

「別種の試験、って」

リーファは面喰らって、きょときょと二人を見比べる。シンハは一瞬にやりとし、それから真面目な顔つきになって言った。

「これからおまえには、この制服を着て王都の巡回に出てもらう。街には試験官がいて、おまえが来るのを待っているが、誰が試験官かは秘密だ。おまえが警備隊員にふさわしいと判断したら、試験官がこういう……」

と、彼は一枚の紙切れを取り出した。何か文字が模様らしきもの書いてあるが、途中で切られているので判別できない。

「紙を渡してくれる。その街区での合格証だ。そうして順番に七番隊まで、すべての街区で合格証を手に入れたら、おまえは晴れ

て警備隊に入隊できるというわけだ」

「……はア」

「ちなみに市壁の外を回る八番隊については、今回は除外する。制限時間は一街区につき三日まで」

「んな！？ 制限時間、って……誰が試験官かも分からないのにかよ！」

抗議しようとしたリーファに、ディナルが意地の悪い愉悦に満ちた激励をくれた。

「まあせいぜい頑張って探すことだな。無理なら降参しても構わんぞ」

「うるさい！ 上等だ、受けて立ってやらあ」

いきり立つリーファに、シンハはやれやれと天を仰いだ。

「じゃあ、急いで着替えて来い。試験は今日からだ」

「それを早く言え、この鈍牛！」

即座にリーファは制服をひつつかみ、部屋から飛び出して行く。誰が牛だ、というシンハの文句は、彼女の踵にさえ届かなかった。

二章 お貴族様の事情（１）

二章

一番隊の担当する街区は、城の敷地に隣接する王都の北東部分である。

最北の高台には街の生活用水を賄う貯水塔がそびえ立ち、中央大広場に接する南端には、議会や裁判の場となる市庁舎がある。その間を埋めるのは、主に貴族の屋敷だ。

「でつけえ家だなあ……」

化粧漆喰の白壁がまぶしい。リーファは街路に佇み、しみじみつぶやいた。

「金つてのは、ある所にはほとんど集まるんだよな」

そしてない所には、一向に寄り付かないものなんである。リーファは自分の懐具合を思い出して、一抹の侘しさに遠い目をした。

レズリア国の貴族たちは、普段はそれぞれの領地に暮らしているが、定期的に王都へ上り、国王に伺候しなければならない。忠誠の証を立てるためと、実際の政務の必要上から、である。

貴族の当主がいない間、館は名代として遣わされた者が管理している。たいていは当主にごく近い血縁者だ。

そんなわけで、付近一帯は広々とした敷地に瀟洒な建物、斬新美麗な庭園が続き、街路の隅にゴミが落ちているということもない。絵に描いたような美しい町並みだ。

さて、この区画のどこに試験官がいるのか。

リーファはすれ違う人々を観察しながら、ゆっくりと巡回を始めた。

館の使用人がせわしなく行き交い、時々貴族の誰かを乗せた馬車がガタゴトと通り過ぎて行く。

王都シエナは、城が建つ丘の南の裾野に広がっている。そのため、

城に近い屋敷街はゆるやかな斜面に立地しており、自然と他の街区を見下ろす格好になっている。>Kbr<そんな辺りにも、階級の違いがあらわれているわけだ。

てくてく歩き続けたが、なかなか試験官らしき人物には出くわさない。うららかな春の陽射しとともに、時間だけが進んでいく。

いつしかリーファは目的を忘れて、それぞれの屋敷をじつくりと観察していた。

繊細な装飾があちこちに施されたひとつの館は、庭一面に多種多様な薔薇がこれでもかと植えられており、門扉の上にも蔓薔薇のアーチが出来ていた。

ちょうど花の季節なので、華やかな色彩と甘い香りが一帯にあふれている。

とは言え、リーファが考えたのは別のことだった。

（ふーん、ここは侵入しやすそうだな）

柵には蔓薔薇が這わせてあるが、隙間がないわけではない。忍び返しも控えめだし、多少の引っ掻き傷を覚悟すれば乗り越えられるだろう。

庭に入れば、所狭しと植えられた薔薇が、身を隠す格好の遮蔽物になる。リーファは外から観察して侵入経路を考え、それからふと苦笑した。三つ子の魂百まで、とはよく言ったものだ。

そのまま薔薇屋敷を通り過ぎかけた時、一人の男が庭を眺めているのに気付き、リーファは足を止めた。

（園丁かな？）

それにしても妙な気もする。小柄なのに人目を憚るような猫背で、暗い金髪の頭はぼさぼさだ。服も汚れて継ぎ当てだらけ。屋敷付きの園丁なら、もう少しましな格好をしているだろう。

「おい、そのあんた」

軽い口調で声をかけると、相手はぎょっとして身を竦ませ、きよるきよるした。他の人影がないと分かると、自分の事かと問うように、おずおずとこちらを窺う。

「何やってるんだ？」

リーファがゆっくり歩み寄りながら問うと、男は目をそらし、口ごもった。

「いや、あの……あんまり、見事な薔薇なんで……つい」

「確かにね。もしかして、花が欲しいのかい？」

言いながらリーファが遠慮なく男を観察すると、相手は縮こまって「はあ」とうなずいた。

「花一輪でも勝手に取ってたんじゃ、騒ぎになりかねないだろ。欲しけりや館の誰かに頼んでみなよ。これだけ咲いてるんだから、頼めばケチったりはしないさ」

たぶんね。リーファは内心でそう付け足し、通用門があるのはどつちかな、と左右を見渡した。なんなら一緒に頼んでやろうか、と言うつもりだったのだ。が、

「い、いいんですもう、お構いなく」

慌てて男はそれだけ言い、ばたばたと走り去ってしまった。

「……なんだかね」

内気な花泥棒もいたもんだ、とリーファは首を傾げる。

念のために男が立っていた辺りを観察してみたが、これといって不審な点はなかったのだ、そのまま巡回を続けることにした。少なくとも、あれが試験官だということはないだろう。

次に通りかかった館は、無骨だが落ち着いた雰囲気があった。こちらは主の趣味か、あまり植え込みがないので侵入しにくい。身を隠せないし、樹木や蔭を利用して階上の窓にとりつくことができないからだ。

（んー……ああでも、そうだな、裏なら行けるかもしれない。夜間ならあそこの壁から……）

物騒なことを考えつつ、正面の門に差しかかる。衛兵が二人、リーファの制服を認めて軽く敬礼した。

「ご苦労さん」

リーファも礼を返し、そのまま行き過ぎようとした。が、その時。

「警備隊員に女がいたつてのは聞かないけど……」

門衛の一人が、遠慮がちに声をかけてきた。リーファは足を止め、くるりと向き直る。

「時間が空いてるなら、お嬢様の相談に乗って差し上げてくれないかな」

「そりゃ、構わないけど」これが試験なのかな？「ただオレは、警備隊の制服は着てるけど、その……見習いみたいなもんで、何の権限もないんだよ。それでも良ければ」

用心深く答えたりーファに、門衛は鷹揚な笑みを見せた。

「いや、そんなに大事じゃないんだ。ただどうも、男には話せないそうで」

「……はア」

なんだそりゃ、とリーファは目をぱちくりさせた。

門衛に案内されて館に入ると、召使が来て引き継いでくれた。広いホールを横切り、居間に通される。

立ったまま待っていると、じきに明るい色彩のドレスを着た少女が一人、ぱたぱた小走りにやって来た。貴族の令嬢にしては元気がいい。まだ十一、二歳といったところだろう。

「あなたがリーファ？」

開口一番そう言われ、おや、とリーファは軽く目をみはった。まだ自分はこの館の誰にも名乗っていないはずだ。するとこの少女が試験官の一人ということか。

（子供のお守りは苦手なんだよなあ）

しかしこの際、贅沢は言っていられない。リーファは急ごしらえの見えない礼服を素早く身にまとった。

「そうです。何かご相談があると伺いましたが？」

少女の機嫌を損ねないように、膝を折って視線を合わせる。少女は尊大にソファを指してリーファを座らせ、自分も向かいにぼすんと腰を下ろした。

「さてと。私はミニナリユードよ。頼みたい事っていうのは、つま

りその……ある物を取ってきてほしいの」

さも重大事のように切り出したミナに、リーファは感情をあらわさないまま、小さくうなずいて先を促した。ミナは声をひそめ、ためらいがちに続ける。

「鳥か猫が、屋根の上に持って行ってしまったみたいなの。とても大事な物なんだけど」

「どんな物なんですか」

「絶対に秘密にしてくれる？」

「誓って」

「じゃあね……」

ひそひそ、と打ち明けられた内容に、思わずリーファは笑いかけ、慌てて真顔を取り繕った。そして、お任せ下さい、とうなずく。

ミナはほっとした表情になり、彼女を自室のバルコニーまで連れて行った。

「時々ここから猫が出入りしてるの。この上辺りだと思っただけど、梯子がいるかしら」

「ああ、このぐらいなら大丈夫ですよ」

リーファは答えると、手摺りに足をかけ、片手で庇をつかみ、ひよひよいつと身軽く屋根の上に飛び移った。仕事にかかる前に下を覗き込み、目を丸くしているミナにひらひら手を振って見せる。

「さて、と……うつぶ」

立ち上がった途端に吹き付けてきた風に、リーファは顔をしかめた。屋敷も広ければ屋根も広い。突き出た屋根窓の陰に鳥が巣をかけていたり、日当たりのいい場所で猫がうたた寝していたりと、賑やかだ。

リーファは用心しながら、スレートの隙間や、鳥の巣を覗いて行く。ほどなく目当ての物が見付かった。

屋根窓の棧にひっかかった、きらきら光る小さな瓶。

「あった、あった」

ひよいとつまんで陽にかざす。ミナが言った通り、神殿で売られ

ている恋愛成就のお守りだ。リーファは苦笑をこぼしてから、ベルトにつけた小さな革袋にそれをしまった。

さて戻るか、と体の向きを変えた途端、彼女は目をみはった。

「うつ……わー……」

絶景、という言葉は声にならなかった。ちょうどそこからは、王都がすつきりと一望出来たのだ。

なだらかに下っていく町並みの、屋根、屋根、屋根。南からの風を受けて、館の庭に植えられた木々がざわめき、新緑がきらめく。その風が運ぶ、街の音。人々のおしゃべり、犬や家畜の鳴き声、神殿の鐘。どこかで誰かが歌っている。

無意識に、リーファは腰を下ろしていた。

二人の門衛が小さな玩具のように見える。石畳の白い道が広場へと続き、広場から市門へ、さらに外へと伸びて行く。

壁に囲まれた街の外には、豊かな緑の大地と、悠然たるシャーデイン河の流れ。街道を行く荷馬車が蟻のようだ。

「気持ちいいなー」

うん、と深呼吸。それからふと屋根に手をつき、指先が触れた妙な感触に目をぱちくりさせる。はてな、と見ると、正体はお菓子のかけらだった。

「ふーん……なるほどね」

指についた蜂蜜の匂いを嗅いで、リーファは一人うなずいた。

二章 お貴族様の事情（2）

名残を惜しみつつ立ち上がり、最後にもう一度だけぐるりを見回して、展望台を後にする。屋根から降りると、ミナが心配そうに待っていた。

「見付かった？」

小声で訊かれて、リーファは真面目な顔を保つのに苦心しながら瓶を取り出した。

「はい、これですね」

「ありがとう！」

パツと笑顔になったミナに、リーファもつられて笑みを広げる。ミナはそれに気付くと恥ずかしそうにうつむき、上目遣いになって言った。

「女同士の秘密よ？」

「……っ」危ういところだった。「はい、秘密にします」

辛うじて笑わず言ったりリーファに、ミナは重々しくうなずいた。

それから彼女は小さな筆笥の抽斗に小瓶を隠すと、かわりに何やら布巾で包んだものを出して来た。

（あれ？ 紙切れじゃない？）

てつきり合格证が来るものと思っていたので、リーファは小首を傾げた。だが包みからふわんと甘い香りが漂い、あれかと納得する。「これ、お礼に。本当はとっておきんだけど、あげるわ」

いささか未練がましそうに言っ、ミナは包みを差し出した。リーファはしゃがんで恭しく受け取ると、ちょっと胸に抱くようにしてから、再び少女の手に返す。

「お気持ちだけ頂きます、お嬢様」

「でも……」

「とっておきの秘密の場所で、一番いい眺めを見ながら食べるんでしょう？」

リーファが悪戯っぽく言うと、ミナは驚いて息を飲み、次いで悔しさと羞恥に赤面した。

「どうしてばれたの」

「屋根の上に、それと同じお菓子のかけらがあつたもので」

リーファはおどけて答え、それに、と付け足す。

「梯子がいるかとお尋ねになりましたが、あなた一人では屋根に届くような梯子を、ここまで運んでくるのは無理だ。誰か共犯者がいるんですね？ いつもあなたを屋根に連れて行って、ちゃんと付き添ってくれている大人、そして今回も試験のことを知っている人が」

「……そうよ。あーあ、つまんない」

ミナはぶうつと膨れてお菓子を抽斗に戻し、「でも」続けた。

「お守りの事は本当に内緒よ。お父様にもお母様にも、ゲイルにも言つてないの」

そいつが共犯者か。リーファはそう考えながら、笑いを噛み殺して、はい、とうなずいた。ミナはこほんと咳払いすると、精一杯威厳をかき集めて姿勢を正した。

「それじゃあ、試験はおしまい。門のところにゲイルがいるから、合格証は彼に貰ったらいいわ。ご苦労様」

「わかりました。それでは」

終了の合図にぺこりとお辞儀をすると、やおらリーファはミナの頭に手を伸ばし、くしゃつと撫でた。

「ミナもお疲れさん。面倒な事に協力してくれて、ありがとな」

呆氣に取られていた少女を残して館から出ると、門のところで衛兵のにやけた顔が待っていた。

「あんたがゲイル？」

リーファが問うと、門衛の片割れがおどけた風情でうなずいた。

「屋根に登つてるのが見えたけど、いい眺めだったかい」

「なかなか良かったよ。けどお嬢さんが転がり落ちないように、充分注意してやりなよ」

「ああ、それはもちろん。あんたも気に入ったのなら、時々登りに

くればいい」

冗談なのかなんなのか、ゲイルはそんな事を言った。リーファは胡散臭げに相手を見上げ、鼻を鳴らす。

「いちいちここまで来るぐらいなら、城の塔にでも登るよ」

「あ……そうか、あんたは城に住んでるんだったな。うーん、そうか」

なぜそこに引つ掛かる？ リーファは片眉を上げたが、ゲイルはそれを見ていなかった。一人勝手になにやら唸り、しまったな、などつぶやいている。

きょんとしているリーファの前で、彼は気を取り直すと、懷から紙切れを取り出した。

「まあいいや。それじゃ、これ。お嬢さんから貰った物と交換で渡すよ」

おや、まだ試験が残ってたよ。リーファは無邪気そうに小首を傾げて見せた。

「何も貰ってないよ」

「え？ そんな筈ないだろ、お礼に渡す物を用意してたんだから」

「でも貰わなかったよ。もしオレが警備隊員なら、個人的に謝礼を受け取るのは良くないだろ。上司の許可があつたんならともかくさ」

「……………」

しばし、無言で見つめ合う。リーファはあくまで純朴さの仮面を被ったまま、ぱちぱちと数回瞬きなどして見せた。

と、唐突にゲイルがふきだし、リーファも仮面を捨ててにやりとした。

「やれやれ、お見通しか。少しは慌ててくれたら面白かったのに。ほら、合格证」

「どうも」

紙切れを受け取り、リーファはそれを大事にしまった。

「残りの試験も頑張れよ」

「ありがとう」

励ましに礼を言い、リーファは足取り軽く城へ向かう。とりあえず、合格証を一枚手に入れた報告をしなければ。

思ったより簡単だったな、とリーファは複雑な気分になった。

こんな調子だったら、ひとつの街区に三日もの猶予は必要なくなるに。それとも、実はさらに二重三重の仕掛けがあつて、こちらが気を緩めている間にこつそり評価をつけられているのだろうか。

（シンハの奴も、時々余計なこと、企むからなあ。ディナルのおっさんがこんなやり方に納得してるとも思えないし）

妨害工作でもしてくるかも知れない。まだまだ油断はできないだろう。

リーファは気を引き締め、周囲に注意を払いながら、城へと戻っていった。

その頃には太陽が傾き、立ち並ぶ館の白壁を黄金色に染めていた。

執務室は珍しく扉が閉ざされ、前に一人の青年が立っていた。国王の側近で秘書官を務めるロトだ。手には他人のものらしき剣がある。

「もしかして来客中かい」

リーファが問うと、ロトは軽くうなずいてからノックした。

「陛下、リーが戻ってきましたよ」

「早かったな。ちょうどいい、入れ」

案外気安く許可が下りたので、リーファは目をぱちくりさせながら、ドアを開けた。

客人は白髪まじりの男だった。古風な貴族らしく上品な服を身につけてはいるが、体型は歳に似合わず引き締まり、素手であっても人を警戒させるような鋭さを備えている。

リーファが緊張したのを見て取り、男はおどけたように眉を上げ、髭の生えた口元に笑みを浮かべた。

そんな二人を眺めてシンハは面白そうに言った。

「リーファ、紹介しよう。彼がリユード伯だ」

「リユード伯、って……あ、まさか！」

思わずリーファは素っ頓狂な声を上げ、目を丸くして伯を見つめた。相手は茶目っ気たっぷりに微笑み、小首を傾げて見せたりなどする。

「はじめまして。娘が世話になったようだね」

「あー……いや、まあ、その」

どう答えると？ リーファは口ごもり、視線だけでシンハに助けを求めた。だが相手は、困惑するリーファを眺めて笑いを堪えているばかり。それでも民の庇護者か、と内心で毒づきつつ、リーファはごほんと咳払いして、なけなしの威厳をかき集めた。

「伯爵は試験のことをご存じだったんですか？」

「もちろん、陛下はまず私に相談されたのだよ。それを耳にした娘が名乗りを上げた、というわけだ」

そこまで言って彼はシンハを見やり、まったく何をやらされるか予測が付きませんな、と呆れ口調で付け足した。シンハはおどけて肩を竦め、ごまかすように話題を変える。

「リユード伯の領地は東の辺境でな。あの辺りはまだ草原の民がちよっかいを出してくるし、何より遠いしで、めったに王都までは出て来れないんだ」

「だからって、ここぞとばかり変な頼み事すんじゃないよ」

うつかりいつもの癖で突っ込みを入れてしまい、慌ててリーファは伯爵の顔を窺う。幸い彼は、王に対する無礼を咎めるどころか、しかつめらしく同意してくれた。

「至極もつともな意見ですな、陛下」

「都合よく結託するなよ」

シンハが苦笑いする。そのやりとりを見て、リーファはふと疑問を抱いた。どうやら二人の間には信頼関係があるらしい。ということとは、シンハが忠誠心を確かめるために辺境から呼び出したわけではないだろう。

「……東で何か厄介事でもあったのかい？」

小首を傾げ、声を抑えて問うてみる。男二人は表情を改め、顔を見合わせた。

「ふむ。確かになかなか鋭い」

伯爵が感心したようにつぶやく。図星らしい。だがシンハは、な
あに、と軽い口調でリーファに答えた。

「厄介と言うほどのことじゃない。おまえは試験に専念しろよ。伯爵の名前に反応したってことは、合格証を一枚、手に入れられたんだろう？」

「ああ、うん、だから報告に来ただけ……でも本当にいいのか？ 何か手伝えることがあったら言ってくれよ。オレのことより、おまえの仕事の方が大事なんだからさ」

真顔で言ったリーファに、なぜかシンハは少し困ったような微苦笑を浮かべ、ぽんと軽く彼女の頭を撫でた。

「そうだな、必要になったら頼む。今日は疲れたろう、ゆっくり休め。また明日から試験の続きだぞ」

「ガキじゃねんだぞ」

ぺしつと手を払いのけ、リーファはむっとして見せる。だがシンハはいつものようにからかいはず、微妙な表情のまま手振りで退室を促した。拍子抜けだ。

(……妙だな)

納得はできないが、それ以上食い下がるわけにもいかない。リーファは諦めて踵を返したものの、わざとらしく扉のところで振り返り、仰々しく一礼してやった。

リユード辺境伯か 調べてみた方が良さそうだ。

一人うなずくと、リーファは図書館へ足を向けたのだった。

三章 船着場で二日酔い（１）

三章

東方辺境伯の領地や歴史については図書館でざっと調べられたものの、現在の情報を仕入れるなら、やはり人に聞くのが一番良い。そういう意味では、今日の試験会場は好都合だった。

というのも、二番隊の担当はシャーディン河の船着き場に接する商業区だからだ。各地の商人が、船荷と共にさまざまな情報を携えてやって来る。

リーファは広場に面した大店はとりあえず素通りして、船着き場へ向かった。

湿気を含んだ微風が、船に使われる木材や塗料の匂いを運んでくる。それに伴って、人夫たちの荒っぽい声も耳に届いた。

栈橋に出ると、誰も彼もが忙しく働いていた。船から荷を下ろす者、積み込む者、荷を数えて点検する者。ばやばやしていると突き飛ばされそうだ。

さて、どの船が東から来たものか。

リーファが適当に歩き出した途端、頭上からうるたえた声が降ってきた。

「積み荷の検査かい？」

顔を上げると、近くの船の甲板から若者が一人、こちらを見下ろしていた。リーファの制服を見て、抜き打ち検査だと思ったらしい。彼女は慌てて、違う違う、と手を振った。

「あー、いや。オレはただの見習いでね、今……研修中ってところかな」

研修つてのは試験に受かってからするもんだっけ？ 自問しつつも、まあいいや、と適当な答えを返す。すると若者は露骨にホツとした。おや、とリーファは意地の悪い笑みを浮かべる。

「なんだい、見られちゃ困る物でも積んでるのかい」

「そんなわけないだろ。検査になつたら面倒だからだよ。早いところ積み下ろしをすませて、次の町に行かなくちゃいけないのに……」

「どこから回つて来たんだい？」

何気ない好奇心を装つて、リーファはそう問いかけた。若者は上の空で「イルシュ」とぞんざいに答える。リーファは内心で幸運に感謝した。

「東の方だね。あつちはどんな様子なのかな」

「どんな、って……別に、変わりはないよ。草原の連中も最近は大入しいし、天候もいつも通りで作柄も順調。平穩無事つてところだね。おかげで商売も安定さ。納期が守れたら、だけど」

そう説明して、彼は首を伸ばして街の方を見やった。店の方に行った者の帰りを待っているのだろ。リーファもちよつと背後を振り返り、まだ少し時間があるかと踏んで話を続けた。

「あんたのところは、何を運んでるんだい？ 別に腐っちまう物じゃないんだろ」

「そりゃ、そうだけどさ。うちは……まあ、色々さ。草原の連中から買った羊毛が主だけど。塩を運んだら儲けになるのに、うちの旦那は手を出さないらしくて」

「塩？ 国の専売だろ、たしか」

レズリアは海のない内陸国なので、塩は貴重品だ。売買は国が一切を管理している。

（そういえば、東の边境に岩塩の産地があつたっけ）

ゆえに昔から、東方边境伯は王家と微妙な関係が続けて来たのだ。時には敵対し、時には取引をして。

「運ぶのは認可を受けた業者が請けられるのさ。毎月決まった収入が入るから、いいと思うんだけどなあ……あ、やつと帰つて来た。やれやれ」

若者は言つて、通りの方に手を振った。あとはもう見向きもせず、自分の仕事に戻って行く。忙しそうだと察し、リーファも諦めて踵

を返した。

そして。

(……ん?)

見覚えのある人影を視界の端に捉え、また向き直る。隣に停泊している商船のそばに、一人の男が立っていた。一瞬、目が合ったかどうか。ぱっと顔を背けられたような気がして、リーファは眉を寄せた。

(誰だっけ)

記憶をさらいながらそちらへ歩いて行ったが、既に男はどこかへ姿を消していた。船の中か、それとも街へ戻ったのか。

男が立っていた棧橋の船を見上げた時、リーファの脳裏に昨日の光景が閃いた。

(そうだ、確かあいつ、薔薇屋敷のところにいた……)

花泥棒かどうかは不明だが、庭園を見ていたあの男だったはず。

小柄で痩せた、猫背の男。

(もしかして、あいつも試験の関係者なのかな)

一度目は偶然、二度目は必然。いや待て、三度目の正直まで確かめなければ断定はできないか。しかし偶然と言うには……。

釈然としないまま、商船を観察する。ありふれた型の、やや小さな貨物船だ。年季の入った船であることは、素人のリーファにも分かった。

あちこちに補修や改装の跡が見て取れる。船名を変えるのは縁起が悪いと言われているのに、それさえ何度も書き換えたようだ。

今の船名は『ミサゴ』。リーファは少し考えてから、それが海鳥の名前だと思い出し、つい失笑した。飛ぶどころか水に浮くのもやっと思える老朽船に、鳥の名とは。

(何か験を担いでいるのかね。絶えずどこかいじくつてないと沈む、とか?)

しばらく彼女はそのまま何となしに船を眺めていたが、結局は首を傾げながらも棧橋を後にした。もしあの男が試験の関係者だとし

たら、すべて終わった後に種明かしされるだろう。

次にリーファが足を向けたのは、船着き場の近くにある酒場だった。人夫たちがたむろしている、大衆的な店だ。そこならもう少し東方の情報を仕入れられそうだし、人が大勢集まる場所だから試験官がいる可能性も高い。

そう思ったのだが、まさか向こうから飛び出して来るとは予想していなかった。

「ああ、来た来た！ 早く早く！」

店から出てきて通りの左右を見渡していた中年の女が、リーファの姿を認めて手招きしたのだ。リーファは思わず後ろを振り返ったが、女の声に反応している人物は見られない。ということは、やはり自分が呼ばれたのだ。

慌てて走って行くと、女は興奮した様子でまくしたてた。

「あんたも一応警備隊だろ、何とかしとくれ。喧嘩になっちまって、あたしの店が……」

ガシャーン、と派手な音が語尾に重なる。女将は首を竦め、ああもう、とぼやきながら背後を振り返った。リーファは女の横を擦り抜けて戸口をくぐり、思わず「うへえ」と呻いた。

「大体てめえはこないだも、俺の分までちよろまかしやがって」

「うるせえ！ そっちこそやる事がせこいんだよ！」

大の男が二人、顔を真っ赤にして口汚く罵り合いながら、取っ組み合いの喧嘩を繰り広げている。他の客はそれを取り巻いて、てんではやしたてるばかり。

リーファは壁際に立っていた青年に、こそつと訊いた。

「そもそもの発端は何だい？」

さあね、と冷めた答えが寄越される。どうやら彼は素面らしい。「相手の分の酒まで飲んだとか飲まないとか、そんな事だったみたいだけだな」

馬鹿馬鹿しい。リーファはげんなりと当事者たちを見やった。普通なら警備隊の巡回は二人一組なので、こんな状況でもなんとかな

る。だが今はリーファ一人。

（どうすっかな）

ざっと店内を見回して、リーファは口をへの字に曲げた。援護を頼むか？　しかし頼りになりそうな客は、今し方言葉を交わした青年ひとりぐらいで、あとは下手をすれば一緒になつて乱闘に加わりかねない勢いだ。

（使えそうな道具……）

武器としては剣を佩いているものの、まさか抜くわけにはいかない。喧嘩を止めようとして刃傷沙汰になったら、本末転倒だ。加えて問題なのは興奮した野次馬の方だろう。

少し考えてから、リーファはふと窓に目を留めた。鉄の黒い枠に、貴重なガラスが嵌められている。店を建てる際に奮発したらしい。

（あー……ガラスは高いから駄目だな。窓枠の方でやるか。呼び子を持つてりや良かったな）

頭の中の携帯品一覧に笛を付け加えつつ、おもむろに剣を抜く。

刃のきらめきに、壁際の青年がぎょつとして身構えた。リーファはそれを無視して一番近い窓に歩み寄ると、刃の切っ先を窓枠にあてがい、

「せえの、」

歯を食いしばって、引き下ろした。

キキイイ……ッ、と、歯の浮く甲高い音が響き、喧噪が途絶える。

その隙を逃さず、リーファは出来る限り威厳をもたせた声で「警備隊だ！」と告げた。はっ、と息を飲むように店内の視線が集まる。小娘と思つて侮られることのないよう、リーファはこれ見よがしに抜き身の剣を構え、じろりと一同をねめつけた。小馬鹿にした笑いを口元にのぼせかけた酔漢たちが、一人また一人と、鼻白んでいく。

どうやらうまくいった。店内の空気が一変したのを感じ取り、リーファは剣を鞘に収めて、騒ぎの元凶に歩み寄った。幸い二人とも、本格的に酔っ払っていたわけではないらしい。リーファが片手を腰に当ててじろじろ眺め回すと、二人は居心地悪そうに縮こまってし

まった。

「で、大の男が二人してガキみたいに暴れてたのには、それなりの理由があつてのことなんだろうな？」

皮肉っぽく、しかし傲慢にならないよう冷ややかさを保って問う。男二人は複雑な表情で目配せを交わし、もそもぞ身じろぎした。リーファは片眉を吊り上げ、呆れ顔をする。

「やれやれ。説明できないってんなら、それでもいいさ。そのかわり、もうこんな馬鹿げた事すんじゃないぞ」

そこで戸口に首を振り向け、様子を窺っていた女将を呼んだ。

「女将さん！ こいつらに後片付けさせりやいいかな？」

「ああ、ありがとさん。はい、ちよつとごめんよ」

付近にいた客を押し分け、女将は自分の城に戻ると、惨状を見回して心底情けないとばかりにため息をついた。

「まったく、何だかねえ、男つてのは……。さ、手伝つとくれ！」

こんな事態には慣れているのか、女将はすぐに気を取り直し、しゅんとしている酔漢二人にできばきと指示を出し、奥に避難していた店員を呼んで、ひっくり返った店内を修復にかかった。

リーファも行きがかり上、散乱したマグや皿を拾い集めて協力する。ほどなく店内は元の秩序を取り戻し、客たちは銘々、飲み直しに入った。その様子を眺め、リーファは女将に謝った。

「ごめんな、女将さん。オレ本当はまだ警備隊員じゃないんだ。だから巡回の相棒もいなくて……。さっきの騒ぎで何人か、どさくさ紛れに食い逃げしたかも知れない」

もう一人いれば、外で見張っていて貰えたのだが。しかし女将は気にした風もなく、からからと笑った。

「本職の警備隊員だつて、二人がかりで喧嘩を止めに入って、食い逃げなんか見張ってやしないよ。気にしなくても客の顔は覚えてるから大丈夫さ」

それにね、と女将は悪戯っぽく続けた。

「今日ここに居るのは、常連ばかりなんだよ。つまり、あんたの試

験のためにね」

どう、驚いたかい、と得意げに胸をそらす女将。リーファは悪いとは思いつつも、気の抜けた笑いをこぼした。

「ああ、やっぱり……」

「なんだい、知ってたのかい」

「そうじゃないけど。酔っ払って喧嘩してた割には、二人ともやけにすんなり大人しくなったしさ。客の方も誰ひとり止めに入ったりしないで、気楽に見物してたから、何か雰囲気が違うなと思ったんだ」

そして、ちらりと壁際にいた青年を見やる。その視線を予期していたように、彼はおどけた表情でマグを持ち上げ、乾杯の仕草を見せた。

「あいつはオレが入って来た時はまるきり素面だったし、剣を抜いたオレを止めかけたしね。試験官の一人かな」

「ご名答。実は彼、警備隊員だよ」

参りました、と女将は両手を上げる。それから、さてと、と明るい笑顔になった。

「試験は終わりつてことで、合格証を渡さなくちゃね。でもその前に、何か飲んで行きなさい。奢るから」

「それ、飲んだら失格にされるんじゃないかい？」

リーファは思いきり顔をしかめた。壁際の警備隊員が失笑し、女将もふきだした。

「しない、しない。約束するよ」

大丈夫、と手を振って、リーファをカウンターに招く。本当かな、とリーファはためらったものの、周囲を見回して、結局女将のすすめに従った。

三章 船着場で二日酔い（2）

リーファがなみなみとエールの注がれたマグを受け取ると同時に、警備隊員も壁際を離れて隣にやってきた。

「試験監督、お疲れさん。本当に失格にしないだろうね？」

リーファが念を押すと、彼は苦笑しながら紙切れを差し出した。

「疑り深いな。先に渡しておくから、安心してゆっくり飲めよ」

「そりやどうも」

合格証を受け取ってからやっと、リーファはマグに口をつける。

エールは地下の倉庫から出したばかりらしく、少し冷たくて、生き返る心地がした。

リーファが無言で飲んでいると、隣で青年が勝手にしゃべりだした。

「この『金の葡萄亭』は、船着き場周辺じゃ一番の店でね。女将さんの曾祖父さんの代から続いているんだ。いい感じだろ？」

言われて初めて、リーファはじっくり店内を観察した。

何もかも古いが、よく手入れされている店だ。テーブルもカウンターも椅子も、長年大事に磨かれてきた結果、飴色になって木目が浮き出ている。

テーブル席はほどよい間隔を置いて並べられ、客は誰もがくつろいで楽しげに見えた。足を踏んだとか背中にくっついたとかいう、些細なことで喧嘩騒ぎにならないよう、配慮してあるのだろう。

暖炉には炭火の燐がちらちらと瞬き、香草がいぶされている。食欲の邪魔をしない程度の香りだ。壁際の小さな棚には、笛や弦楽器が置いてある。常連客の中には、にわか樂士が何人かいるに違いない。

天井からぶら下がったランプの覆いには、少し煤がついているものの、埃はきれいに払ってある。カウンター奥の厨房からは、ベーコンや腸詰めを炒めるいい匂いと一緒に、女将の鼻歌が流れてくる。

「うん。確かに、いい店だね」

リーファがそう同意すると同時に、先ほど喧嘩していた二人組が、申し訳なさそうな顔でこちらにやって来た。

「あれ、あんたたち、仲直りしたのかい」

にやにやと意地悪く問うたリーファに、二人は苦笑いで答えた。

「本当に喧嘩する予定じゃなかったんだ。けどこいつが……」

「俺のせいにすんじゃねえよ」

途端にまた、肘で小突き合いを始める。警備隊員が咳払いをする
と、二人は慌てて姿勢を正した。

「とまあ、そんなわけだから、詫びに一曲と思つてな」

「一曲？」

怪訝な顔をしたリーファの前で、喧嘩していたはずの二人は声を揃え、いきなり歌い出した。明るい旋律の陽気な歌だ。歌詞をよく聞くと、酔っ払いが酒を称える内容だった。

二人の声に誘われて、他の客たちもそれに加わった。歌声や手拍子、足拍子。興に乗って皿やマグで即興の伴奏をつける者もいる。

やがて誰かが棚の楽器を取り、いよいよ本格的な宴会の様相になってきた。

最初は呆氣に取られたリーファも、次第にその楽しげな空氣に染まり、氣が付くと笑いながら手を打っていた。歌はどれもリーファの知らないものばかりだったが、そんなことはこの際、関係なかった。

一杯目のエールが空になり、誰かが奢りだと二杯目を差し出す。しまいには飲みながら踊りだす連中まで現れて、先刻とは別の意味で、店内は大騒ぎになった。

ごく自然に宴がお開きになるまで、何時間かかったか。

リーファが店を出た時には、空に一番星が瞬いていた。もう春だとは言つても、日が落ちると空氣は水のようにひんやりする。リーファは天を仰いでぶるつと身震いした。

「大丈夫か？」

警備隊員が後から出て来て、苦笑まじりに訊いた。リーファはのぼせた顔を片手ではたばた扇ぎ、おどけて肩を竦める。

「酔い醒ましには、このくらいがちょうどいいよ。あんたこそ、一緒に騒いじまって良かったのかい？」

「今日は非番だからいいんだよ。でなきゃ試験官なんて引き受けるもんか。リーファってつたよな。無事に合格したら、また店に来いよ。皆でお祝いしてやるから」

青年は気前よく言って、リーファの頭をくしゃくしゃにかき回した。やめろよ、とリーファは頭をかばい、それからふと、好奇心にかられて尋ねる。

「あんたは嫌じゃないのか？ 女が警備隊に入るってのが、さ」

「おまえを女扱いしろって方が難しそうだなあ」

ははは、と失敬な笑い声を立て、それから彼は真顔になって続けた。

「仲間内でも、意見は半々ぐらいだな。俺は楽しみにしてる方だよ。国王陛下のお気に入りにどんなことが出来るのか、って」

「オレの能力にシンハは関係ねえだろ」

ムツとなってリーファは言い返す。青年はにやにやした。

「カリカリしなさんな。おまえが本当に無能で警備隊の役に立たない奴なら、陛下が便宜を図ることもないってことさ。あの人は鼻屑だけで物事を動かしやしない」

「……へえ」

思わずリーファは感心した声を洩らす。何だ、と眉を上げた青年に、リーファはしみじみと言った。

「あんなに好き勝手やってる王様でも、一応は信頼されてんだなあ」
途端に青年が爆笑し、通りをうろついていた野良犬が驚いたように振り返って吠えた。

彼はくすくす笑いながら、結局広場までリーファを送ってくれた。そして、城の方に足を向けた彼女に、水を飲んでから寝ろよ、と忠告してくれたのだった。

「何をやつとるんだおまえは」

「二日酔いの奴を見舞って、開口一番それはないだろ……」

ベッドに突っ伏したままリーファは呻いた。おかしい、そんなに飲んだはずがないのに、何なんだこの頭痛は。誰か毒でも盛ったんじゃないのか。

昨夜の記憶を反芻しては、うーうー唸っているリーファの枕元で、シンハは呆れ顔をしていた。

「警備隊の方から報告を受けた。今日は休みにしてやるから、おとなしく寝てろ」

「あー……」

言われなくてもそうする以外なさそうだ。後で城内の礼拝所にいる神官から、二日酔いに効く薬でも貰って来よう。

そう考えた矢先に、ギツとドアの開閉する音がして、ぷんと苦そうな臭いが鼻をついた。顔をしかめ、重い体を起こしてベッドの上に座る。案の定、ロトが薬湯のマグを持って来たところだった。

リーファは礼を言っ受取り、シンハに向かって顔をしかめる。「王様がこんな所にいるから、秘書官も余計な仕事をしなきゃならないんだぞ」

「身内の見舞いぐらい、さぼってることにはならんだろう」

シンハは言い返したものの、不安そうにロトの顔を窺った。またぞろ雷を落とされるようなら、すぐにも逃げようとはかりに。

「リーが気にすることはないよ」ロトは穏やかに微笑んだ。「どうせ僕の薬を貰いに行くついでだったしね」

いつもの奴さ、と心持ち強調して付け足す。つまり、彼の胃痛を和らげる薬だ。リーファが失笑し、シンハは何とも情けない顔になった。

「分かった、分かった。おとなしく仕事に戻るさ。じゃあな、リー」軽くぽんとリーファの頭を撫でて、シンハは珍しく素直に立ち上がる。彼が出て行くと、ロトはそれまで主君の座っていた椅子に遠

慮なく腰掛けた。リーファは苦い薬湯をちびちびと往生際悪く片付けていく。

「今のところ、試験は順調みたいだね」

黙って見ているのにも飽きたのか、ロトが切り出した。リーファはしかめっ面のまま、お陰さまでね、と応じる。

「あんたにも迷惑かけてるんだろ？ あいつが何か余計な事をやりだすと、しわ寄せは全部あんたのところにいくんだもんね」

ロトは「その通り」とうなずきながらも、愉快げに笑った。

「でも君が警備隊に入ってくれたら、少しは陛下の脱走癖もおさまるんじゃないかな。そのための投資なら、厭わないよ」

お菓子作りのみならず、隙あらば城を抜け出して街を徘徊する困った国王は、即位後まもなく脱走王の異名を取ったほどである。

「オレがどうしようと、あいつの脱走癖は直らないと思うけどな」

リーファは苦笑して首を振った。

「前にそのことで話をした時に、あいつ、民の暮らしを自分の目で確かめて、現実には即したまつりごとをする為だ、とか何とか、もつともらしい理由を言ってたよ。それも嘘じゃないだろうけど、要するに王様業が性に合わないんじゃないのかな」

城にこもって書類の上だけで誰かの人生を左右したり、内外の貴賓相手に陰険な駆け引きをしたり、贅沢な宴を催したり。そんな生活は、行動的で質実を好む彼にとっては苦痛に違いない。

「うん、まあね。陛下のお気持ちも分らないんだ。僕らが毎日この城であれこれ話し合っている間に、足元にある町で、誰かが苦しんでいるかもしれない。自分の手でそれを救うことが出来るのなら、僕だってすぐにもそうしたいよ。その場で結果が出るし、人の喜ぶ顔を見られるんだからね」

「……ああ、なるほど」

リーファは納得してうなずいた。マグの底に残った最後の薬湯を飲み干し、うえ、と顔を歪める。

「その『じかに誰かを助ける仕事』ってのをオレが引き受けて、毎

日成果を報告してやりや、あいつも少しは欲求不満が解消するってことかい」

「それだけじゃない。ディナル隊長も言っていたように、最近は警備隊の威信も揺らいでいるんだ。悪人は常に新しい手法を考え出すのに、今まで通りのやり方を続けていたんじゃ、対抗出来ない。ディナル隊長だってそれなりに有能だけど、なにしろ保守的だからね。君が現状をなんとか打開してくれるんじゃないかと、期待してる」

「そりやどうも……買いかぶられたもんだね」

リーファは曖昧な表情になった。期待されることは嫌ではないが、それに応じる能力があるかどうかは別だ。

そんな内心を見透かしたように、ロトはにこりとして力強く断言した。

「大丈夫。君なら出来る」

「簡単に言っなよ」

リーファは思わずばやいた。が、根拠のない励ましでも、勇気づけられはする。気を取り直して笑みを返した。

「まあ、やるだけはやってみるさ。とりあえず、合格したら、の話だけ」

「その前に、二日酔いから立ち直るのが先だろうね」

ロトは悪戯っぽくそう言って、リーファの手からマグを受け取る。途端に忘れていた頭痛が襲ってきて、リーファは呻きながら頭を抱えたのだった。

四章 おつかいの後で

四章

流石に翌日には完全に復活を果たし、リーファは早朝にベッドから抜け出した。軽く体を動かして、気力体力ともに充実しているのを確かめる。

厨房で出来たての朝食を失敬して、早く試験の続きに戻ろうと、行ってみたらば予想外の人物に出くわした。誰あろう、国王陛下その人である。エプロンを着けて趣味にいそしんでいた彼は、リーファを認めると、ぬけぬけと、ちょうど良かった、などと言い出した。「リユード伯の家まで、使いを頼まれてくれないか？」

「……オレ、試験中なんじゃなかったっけ。それとも、もう一日休みをくれるのかい」

もちろん質問ではなく、ただの皮肉である。シンハは困り顔をしてから、頼む、と繰り返した。

「ミナには会っただろう？ たまたま今回、伯爵と一緒に領地から出て来たんだが…… 何しろ遊び相手がいるでもないし、王都はよそ者の子供が一人でうろつけるほどには安全じゃない。それですっかり退屈しているらしいんだ」

「入隊試験なんてものにまで手を出すぐらいに、ってことかい」

リーファは苦笑して、シンハの後ろにある調理台を覗き込んだ。布巾をかけた手提げ籠から、甘い匂いが漂ってきた。

「だからお菓子で機嫌を直してもらおうってわけか。どうせなら伯爵から手渡した方が、親子喧嘩もしなくてすむんじゃないの？」

「既に喧嘩したそうだ」

真面目くさってシンハが言い、リーファはふきだした。

「わかったよ。んじゃ、三番隊の方に行く前に、ミナに会うことにする」

「ありがたい、助かった」

シンハがホッとした様子で籠を差し出す。それを受け取りながら、リーファはふと不思議に思つて問うた。

「オレがたまたま来なかつたら、どうするつもりだったんだ？」

「そりゃ……」

一瞬シンハは返答に詰まり、それから、言わなくても分かるだろう、とばかりに肩を竦めた。リーファは途端にげっそりした。

「まったく、おまえつて奴は」

はあ、と特大のため息。だが当の脱走王はまるで堪えた気配もなく、とぼけて明後日の方を向いていた。

そんなわけでリーファは当初の予定を変更し、お屋敷街に向かうことになった。

よく晴れた気持ちのいい朝で、お使いがてら散歩というのも悪くない。

屋敷のほとんどは広い敷地を塀で囲っているが、庭園を誇示したいがために、一部を鉄柵に変えたり、門を広く取っている所が多い。だから通りを歩くだけで、ちよつとした展覧会気分を味わえるのだ。先日の薔薇屋敷に至つては、ほぼ全周が鉄柵で、しかも蔓薔薇を這わせているのだからして、壮観の一語に尽きる。リーファは甘く爽やかな香りが漂う道を歩きながら、贅沢な気分を味わっていた。

（まさか今日はあいつ、いないだろうな）

ふと奇妙な男のことを思い出し、リーファは足を止めて周囲を見回した。やはりそれらしい影はない。もしあの男が試験の関係者なら、今日は三番隊の街区、すなわち職人街の方にいるはずだ。

もちろん、単なる偶然だった、つて説もあるけど……。

考えながら首を巡らせ、あれ、とリーファは目をしばたいた。

「ありやりや」

思わが声がこぼれる。庭園の薔薇が、一部妙な具合に刈り取られていたのだ。植え替えでもするのか、きれいさっぱり花がなくなっている。あそこは確か、白い薔薇だった。

「もったいねえなあ」

葬式でもあったかな、とリーファは首を傾げた。根こそぎ献花してしまったとか？ それにしても、もうちょっと後の始末をなんとか考えれば良いものを。これでは通りから丸見えではないか。

（……ん？ 丸見え？）

何かがひっかかった。熱心に庭園を見ていた男。無様に刈り取られた薔薇。

（いや、まさかね）

両者につながりがあるような気がしたが、リーファは頭を振ってそれを追い払った。偶然だろう。時間と気力の無駄遣いはやめて、さっさとリユード伯の館へ向かった。

「おはよう、ゲイル。ミナお嬢さんに会いたいんだけど」

手提げ籠をちよつと持ち上げ、お使いさ、と示す。ゲイルは布巾をちらつとめくつて中身を確認かめ、物欲しそうな顔をしながら、館まで先導してくれた。

「伯爵とお嬢さんが親子喧嘩したって？」

「一方的にお嬢様が拗ねてる、って方が正しいな。お館様も大変だよ」

「あー……なんか、忙しいんだってね」

それとなく探りを入れてみる。だがゲイルは、人の良さそうな丸い顔に、油断のない表情を浮かべた。

「陛下に何か言われて来たのかい」

「え？ 何かって、何が」

リーファが咄嗟にとぼけると、ゲイルは警戒を緩め、にこりとした。

「ああ、聞いてないのなら、いいんだ。あんたには大事な試験があるんだしな」

失敗した。リーファは内心で舌打ちしながら、口では別のことを言った。

「大事な試験だと思ってるんなら、お使いなんか頼まないと思うん

だけだな。シンハの奴も、何を考えてんだか」

「まあ、陛下には陛下のお考えがあるさ」

そこでちょうど館の玄関に着いたので、前と同じくゲイルは門に戻っていった。リーファは召使に案内され、今回は直接ミナの部屋に通される。ドアを開けると、少女は外を眺めているところだった。

「あら、あなたはこの間の……リーファ、だったかしら」

振り返り、ミナは小首を傾げた。リーファは手提げ籠を前に出して見せる。

「はい。今日は国王陛下の使いで参りました。お姫様に、お菓子の差し入れですよ」

ミナは少し明るい表情になって、早速召使に茶の用意を命じた。そしてリーファに向かって、あくまで偉そうに、しかし期待と懇願のあいまった声で問う。

「お茶を飲んで行く時間ぐらい、あるんでしょうね？」

「え……」

いや、と言いかけたのを、辛うじて飲み込む。ここで断ったら、余計に姫君のご機嫌を損ねてしまうだろう。親子和平の使者としては、そんな事態は避けねばなるまい。

というわけで、二人は小さなテーブルを挟んで午前のお茶と洒落込むことになった。シンハが持たせたお菓子は、苺のロールケーキだった。

「お父様の差し金でしょうね」

見え透いてるわ、と言いつつも、ミナはケーキをぱくついている。お菓子は罪はない、ということか。リーファは苦笑しながら茶を飲んだ。

「何かとお忙しいんですよ」

「わかってるわ、お父様がお忙しいのはいつものことだもの。けど、外に出ちゃいけないなんて、今まで言われたことがなかったのに、あんまりだわ。ゲイルが一緒でも駄目だなんて。何のために王都に来たのか、わからないじゃない」

おや。リーファは思わぬ情報源を見付け、目をしばたいた。

「王都で何かお目当てがあったんですか」

「もちろんよ。お城には絶対に行きたいし、買い物だってしたいわ。細工師の店で新しい髪飾りも見たいし」

「どうして駄目だなんて言うんでしょうね」

ミナの口調に合わせて、リーファも不満げな声を出す。ミナは「まったくだわ」と憤慨して、ケーキの最後のひと切れにフォークを突き刺した。

「危ないから、なんて。今まではそんなこと、言わなかったくせに」
「今まではなかった。ということは、今回に限り、伯爵家の者が出歩くのは望ましくないわけだ。つまり、

（東方での厄介事は、王都まで持ち込まれてるってことか）

ミナが何らかの危険に晒される恐れがあるのだろう。一番あり得るのは誘拐だ。人質に取って、伯爵に圧力をかけるために。

リーファはふむと考え、それからミナには別の説明をした。

「きつと、お嬢様が娘らしくきれいになられたから、悪い奴にさらわれるんじゃないかと心配なんですよ」

「そうかしら」

信じられないわ、とばかりにミナはふんと鼻を鳴らしたが、それでもお世辞を言われて悪い気はしなかったらしい。機嫌を直して、小一時間ほどおしゃべりした後、リーファを解放してくれた。

「やれやれ、予想外に時間を取られたな」

制限時間が三日もあって良かった。リーファは職人街の方に急ぎながら、道々あれこれと考えを巡らせた。

辺境伯の領地で起こった厄介事というのは、伯爵本人が王都に出て来なければならないほどに重大であるらしい。なおかつ、それは東方だけで完結することではなく、関係者がこの王都にもいると考えられる。

（ってことは、草原の連中とのゴタゴタじゃないな）

レズリアの東側は丘陵地帯で、遊牧民の勢力範囲だ。伯爵家が尚

武の気風なのは、彼らとの攻防の歴史による。しかし今は船着き場で聞いたように友好的な関係が保たれているようだし、今回は草原絡みのことではないだろう。

（貴族同士の問題はオレには分かんねーけど……もしそうなら、シンハがあんな悠長なわけないだろうし。もしかして、東で厄介事を起こした奴が、王都に逃げて来るとか？）

それが危険な人物だとしたら。ならば、ミナが外出を禁じられるのも理解できる。

（あー、可能性がいろいろあり過ぎて絞れねえや）

参った、とリーファは天を仰ぐ。こちらの苦悩など知らぬげに、すつきりと晴れ渡った青空が広がっていた。

しばし空を見上げた後、リーファは気を取り直してうんと伸びをした。そして、歩調を速めて先を急ぐ。

中央大広場を通り抜け、雑多な工房や店が立ち並ぶ界限へと踏み込むと、独特の臭気が漂って来た。焼けた金属、薬品、削りたての木材、その他もろもろの臭いだ。

三番隊の受け持ちは通称『職人街』と呼ばれる区画で、金銀細工師や鍛冶屋、仕立て屋に家具職人、靴屋に鋳物屋等さまざまな職人の店が軒を連ねている。そのため常に活気に満ちて騒々しい。槌音、鉋や鋸、ヤスリの音。徒弟を怒鳴りつける親方の声。

「いつ来てもやかましい所だなあ」

リーファは独りごち、苦笑した。

（お貴族様の気まま、喧嘩の仲裁。さてお次は何だ？）

わくわくしながら通りを歩き、賑やかな職人街を観察する。独特な刺激臭を漂わせる工房も少なくない。最初はあっちの店先やこっちの作業場を覗き込んで興味津々だったリーファも、しまいには辟易して、どこか少し空気のきれいな所を探し始めた。

ようやくのこと、やや閑散とした地区に入ると、ホッとして建物の壁によりかかる。その一画は閉鎖した工房や火避けの空き地が多く、幾分か呼吸が楽になった。

「やれやれ……」

ふう、とため息をつき、鈍痛の響くこめかみを押さえる。その時だった。

「くそつたれ！」

押し殺した小声の悪態に続き、ガスツと何かを蹴飛ばす音が聞こえた。リーファは反射的に周囲を見回したが、正面の視界には誰もいない。足音を立てずに移動し、曲がり角で聞き耳を立てると、路地の奥からガタガタ物音が聞こえた。

（お仲間さんかな）

もちろん、前の職業の、である。真つ昼間だが、これだけ建て込んだ場所で騒音に囲まれているのなら、空き巣狙いも仕事やしやすkarou。

そつと路地を覗くと、男が一人、戸締まりされた家の前で、扉を相手に悪戦苦闘しているところだった。遠目に見る限り風体は一般人らしく、あからさまな怪しさはない。

リーファはするりと猫のように路地へ滑り込むと、相手に気取られぬ内にいくらか距離を詰めた。

男が振り返る。目が合った瞬間、

（逃げられる！）

察知したリーファが反射的に駆け出すと同時に、男も身を翻す。だが最初の反応でまず差がついており、さらに足の速さではリーファの方がはるかに上だった。

「待ちやがれッ！」

怒鳴ると同時に体当たりを食らわす。まともに食らった男がもんどり打って倒れた。彼が身を起こすより早く、リーファは一回転して立ち上がり、身構えた。相手が立ち直っていないと見ると、素早く片腕を捕らえ、ぐいつと後ろ手に捻り上げる。そのまま男の肩を壁に押し付け、他方の腕もつかんで背中へ回した。

「いててて、参った参った！ 降参だ、ちよつと緩めてくれ」

男が悲鳴を上げたが、リーファは手加減しなかった。両腕を押さ

えたまま、ひかがみを蹴ってひざまずかせる。

「さて、何をしていたのか聞かせて貰おうか」

厳しく問いながら、リーファは路地の左右にさつと視線を走らせた。仲間はいないようだ。男はしかめっ面に苦笑を浮かべ、顔色を窺うように少しだけ振り向いた。

「いやはや、お見事。実のところ、私も警備隊員なんだよ」

妙に気取った物言いだった。盗っ人ではなさそうだが、警備隊員だというのはもっと怪しい。リーファは眉を吊り上げ、「はア？」と疑いの声を上げた。

「何番隊何班の誰だよ」

「三番隊一班のラヴァスィディータ……ついてて！ そろそろ離してくれないか、このままだと合格証を渡せない」

試験のことを知っている。ということは本物の試験官なのか？

それにしては、不審すぎるが……。

リーファはまず片腕だけを離し、相手が逃げ出しそうにないとかめてから、残る片腕も離れた。ラヴァスは腕をさすりながら向き直り、値踏みするようにじろじろ眺め回した。

「さすがに足は速いな。それに反応も機敏だ。うん、まあ、その点は認める」

偉そうに評して、彼は懷から一枚の紙片を取り出した。リーファにそれを手渡すと、そのまま「それじゃあ」と踵を返す。だが、「待てよ」

リーファがその腕を再び捕らえた。ラヴァスは平静を装って「何かな？」と振り返ったが、顔には焦りがくつきり表れていた。

「この紙、前に貰った二枚とまるきり質が違うぜ」

リーファは半眼になって、ひらひらと合格証を振って見せる。

「いや……その……」

「誰から試験のことを聞いたか知らねえけど、騙すんならもつと上手くやれよ。そら、警備隊の詰所まで仲良くお散歩だ」

ぐいっと腕をねじ上げる。今度はラヴァスもなすがままにはなら

なかった。素早く身を捻り、リーファの手を逃れる。だが自由も束の間、すぐに剣の冷たい切っ先を突き付けられて、両手を挙げるはめになっていた。

「あー、なあ、悪かった、確かに騙そうとしたよ。だが警備隊員というのは本当だ。君の試験のこと警備隊の情報で知ったんだし、私のこの行動も班長の許可は得ている」

「どうだかな。盗っ人にしちゃ小綺麗だけど、警備隊員だったのは信用できないね」

リーファはその剣同様に鋭いまなざしをひたと据え、不吉な口調で言う。ラヴァスは諦めてため息をついた。

「そんなに言うなら、おとなしく一班の詰め所までお供するよ。仲間が身の証を立ててくれるさ」

「だいいいな。そら行くぞ」

五章 空き家のオバケ（１）

五章

驚いたことに、ラヴアスは本当に警備隊員だった。呆れた話だが、班長公認で試験の妨害工作が行われていたのだ。偽の合格証を受け取ったら、それはすなわち『不合格通知』ということになる。

泥棒の真似をしてまで女を入れたくないのかよ、とリーファは唸ったが、ラヴアスは鼻で笑い、焦点のずれた答えを寄越した。

「あそこは空き家だよ」

「空き家？」

「主が行方不明で、所有者が分からなくなっていてね。そこへ浮浪者でも入り込んだのか、近所の子供が夜中にお化けを見たらしい。詰所まで来て、泥棒だお化けだとしつこく騒ぐもんで、調査に出向いたってわけだ」

そこを邪魔されたわけだけどね、と厭味っぽく言われ、リーファは渋々、未来の同僚かもしれない相手に一步譲ることにした。

「そりゃ悪かった。手伝うよ」

というわけで、不本意ながらリーファはラヴアスと共に先刻の路地まで戻るはめになった。

近くで見ると、なるほど件の家は人が住まなくなつて長いらしく、鎧戸の蝶番は錆びつき、全体に荒れた雰囲気が漂っていた。

リーファが建物を観察している間に、

「せえの、よっ！」

掛け声と共にラヴアスが玄関扉を蹴破った。げっ、とリーファは呻く。

「何考えてんだ！ 鍵穴を先に調べないと……」

「とつくに調べたよ。開けられなかったから、こうしたんじゃないか」

馬鹿だな君は、と言わんばかりの声音だった。そのままラヴアス
は、ずかずか中に踏み込んでいく。リーファは十まで数えて、なん
とか怒りを抑えた。

敷居の手前でため息をついて、足元に目を落とす。以前は何かの
店舗に使っていたらしく、ちゃんとした板張りの床だった。

リーファは用心深く、何らかの痕跡を探して一步一步室内を調べ
ていった。と、いきなり頭上でガタガタボタンと派手な物音がして、
誰かの足音が響いた。ぎょっとして顔を上げると同時に、ラヴアス
が階上から梯子を降りてきた。

「誰もいないな。食べかすもゴミも落ちてないし、服や毛布もない
……つまり生活していた跡がない。子供の見間違いだろう。夢で
も見たのさ」

以上終わり、と彼は両手を広げた。リーファは片方の眉を上げ、
疑わしげな顔をする。

「その子供がお化けを見たのは、二階だったってことか？」

「でなきゃ何のために上に行くんだ」

いちいち厭味な男である。何とか言ってやりたくなかったが、リー
ファはぐつと堪え、黙って梯子を上がった。

階上は明るかった。ラヴアスが錠戸を開けたらしい。リーファは
窓際に寄り、辺りを見回した。近くの家に目をやった時、二階の窓
からこちらを見ている少年と目が合った。

少年は手を振り、何か身振りで伝えようとして諦め、こちらを
指さしてからバタバタと姿を消した。

（あれが目撃者の子かな）

ふむ、と考えながら室内を振り返り、
「うん？」

リーファは目をぱちくりさせた。何か、キラキラと光を反射する
ものが床に散らばっている。ごく少量の、白く細かい結晶。

「塩……？」

指先を押し付けてそれを拾い、リーファは眉を寄せた。見たとこ

るは、確かに塩だ。あるいは砂糖か。なめてみれば分かるが、万一外見のよく似た毒物だったりしたら困る。

さてどうしよう、と迷ってから、リーファは結局それを床に落として手を払った。

（こういうものを拾って入れておく道具がいるな）

小瓶とか、小さな袋でもいい。

（フィアナなら適当な物を知ってるだろうから、帰りに寄ってみよう）

魔法学院に在籍している義従妹　つまりディナル隊長の娘を思い出す。魔法学院では医薬や毒物などの研究も行われているため、そうしたものを扱う便利な実験器具があるはずだ。

リーファは改めて二階を見回し、ほかには目立った痕跡がないことを確かめてから、梯子を降りた。

下ではちょうど先刻の少年が、ラヴァスと押し問答しているところだった。見たんだって、と言い張る少年に、ラヴァスが「私も見たよ、何もなかった、ってね」とうんざりした調子で答えている。

リーファはラヴァスを押しのけ、少年の前に出ると、屈んで目線を合わせた。

「お化けはいなかったよ。ほらほら、もう帰りな」

言いながら目配せして少年の腕を取り、表通りへと引きずって行く。少年は心得たもので、じたばたしながら、見たって言うてんだる唐変木、などと罵り続けた。

角を曲がってからリーファは手を離し、「それで」と少年に向き直る。

「何を見たって？」

「悪者だよ」

やっと自分の話を聞いて貰える、とばかり、少年は勢い込んでしゃべりだした。

「本当に見たんだ、一昨日の晩、二階の窓から明かりが漏れてたんだよ。それで僕、昨日は気になって、あの家の近くに行ってみたん

だけど……変なおじさんが玄関前にずっと座ってたんだ。ひなたぼっこしながら昼寝してるふりをしてたけど、でも起きてたよ。僕が前を通ったら、なんていうか……」

「警戒？」

「そう、警戒してるのがわかったもん。夕方にはいなくなってたけど」

「そっか。ありがとな、役に立ったよ」

リーファがにこりとして頭を撫でてやると、少年は嬉しそうににっこりした。

「姉ちゃん、悪者つかまえたら、絶対話を聞かせてよ！」

「ああ、約束するよ。ほらもう本当に帰りな」

指先で少年の額をちゃんと突く。少年はこっくりうなずいて、大きく手を振りながら家の方へと走り去った。

リーファが空き家の前に戻ると、ラヴァスが呆れ顔で待っていた。

「子供なんか懐柔したって、役に立たないよ」

「そうでもないさ。もうあんたの調べ物は終わったんだろ、オレは試験の続きに戻らせて貰うよ」

素っ気なくリーファは言い、肩を竦める。と、ラヴァスは不意に憫笑を浮かべ、やれやれとため息をついた。

「まったく、何を肩肘張ってるんだろうね、君は」

「……なに？」

「オレだの何だの、男の真似をしてまで警備隊に入ろうなんて、見ていて哀れだね。所詮女なんだから、せいぜい子供のお守りでもしていればいいんだ。男と張り合ってるつもりだろうけど、はっきり言って滑稽だよ。いい加減、見るに堪えないね」

「……！」

怒りのあまり、咄嗟に言葉が出て来なかった。今にも横つ面を殴りつけそうになった右手を、辛うじて体の横に押し付ける。握り締めた拳の内側で、爪がてのひらに食い込んだ。

（我慢だ、我慢しろ）

自分に言い聞かせたものの、どうにか言い返した声は震えていた。
「オレの柄が悪いのは元からだ、ほっといてくれ」

「へえ、君のお養父さんは敬語を教えてくれなかったのかい」

ラヴァスはいまや憫笑ではなく、嘲笑を浮かべていた。

「君は西方の生まれで、二年前はエファーン語は話せなかったと聞いているけどね」

「敬語だつて使おうと思えば使える。あんたに対して使う気になれないだけだ」

堪え切れずにリーファは毒を吐いた。だがラヴァスは、一層にやつただけだつた。

「ほら、強がつてる強がつてる」

「何が可笑的い！」

悔しさを堪えきれず怒鳴つたリーファに、ラヴァスは醜い声を立てて笑つた。リーファに対する答えはない。

（駄目だ、こいつは端から人に向き合うつもりなんかないんだ）

話を通じない、それ以前に話にならない。彼はただ、目の前の餌食を嘲笑いたただけなのだ。この手合いには何を言つても無駄だし、と言つてぶん殴つてやつたらやつたで、なおいつそう泥沼化するだろう。取るべき手はひとつ。

（無視！）

リーファはそう決めると、鋭く踵を返した。立ち去りかけた背中に、挑発が浴びせられる。

「何の実力もないくせに、自分が認められると信じてるわけだ。大した自信家だね、どうせなら国王陛下に媚を売って玉の輿でも狙えば良かったのに。今だつて陛下に飼われてるようなものたる、居候の身分で何もせずにくくぬくと暮らしているんだから」

足が止まつた。無視、無視、と呪文のように心の中で繰り返す。そうしていないと、衝動的に振り返つて相手を蹴り倒しそうだった。あるいは走つて逃げ出し、さらに相手を面白がらせる結果に終わるか。

リーファが反応したので、ラヴァスの声はさらに意地の悪い響きを帯びた。

「君みたいなのを養女に押し付けられて、親御さんも気の毒にな」
スウツ、と自分が冷たくなった気がした。

動揺も震えも衝動も、一瞬にして消え去った。後に残ったのは、氷のように白く冷え切った、純粹な怒りだけ。

リーファはゆっくり振り返ると、ひたと相手の目を見据えた。さすがにラヴァスもたじろぎ、顔をひきつらせる。それを見ても、リーファの胸には感情のさざ波ひとつ立たなかった。

「うちの親父は下衆に憐れまれるほど、落ちぶれちゃいねえよ」

極めて冷静に、断固とした口調でそれだけ言うつと、リーファは今度こそ完全に相手を見殺して、その場を立ち去った。

五章 空き家のオバケ（２）

（くそつたれ！）

歩くうちに凍った怒りが溶けだし、悔し涙となって溢れそうになった。懸命にそれを堪え、走るような勢いで大股に歩いて行く。

すれ違う通行人が驚いて振り返るのを視界の端で捉えながら、リーファは王都をまっすぐ斜めに突っ切る形で歩き、王立魔法学院に飛び込んだ。何度か訪れたことがあるので、義従妹の研究室は知っている。

室内にいたフィアナは、リーファの姿を認めると、優しい鳶色の瞳を丸く見開いた。そして、何も言わずに駆け寄り、ぎゅっと強く抱き締める。

リーファは波打つ金髪に顔を埋めて、声を立てずに泣き出した。しばらくしてからフィアナはリーファを隣室にいざない、椅子に座らせてくれた。ぼつぼつとリーファが事情を話す間に、熱い紅茶を用意する。すべてを聞き終えると、フィアナは大きなため息をひとつ、ゆっくりと吐き出した。

「なんて酷い……最低の輩もいたものね。姉さん、そういう奴を呼ぶのにふさわしい言葉を教えてあげるわ。『人非人』よ」

「人でなし、ってことかい」

リーファは最後の涙を拭って、そっと用心深くカップを手にとった。フィアナは向かいに座り、「そう」とうなずいた。

「人の姿をしていながら人でない、そんな奴は人間扱いしてやるに値しないわ」

声に含まれる不吉な響きに、リーファは眉をひそめた。まさか、何ぞ過激な行動に出るのではなからうか。いや、自分とて蹴りや拳を見舞ってやりたいとは思うが、フィアナの場合は、もっと陰湿な何かをやらかしそうで恐ろしい。

リーファのそんな心情を読み取り、フィアナはおどけた仕草で肩

を竦めた。

「心配しないで。姉さんに迷惑はかけないわよ」

「いや、そうじゃなくて……」

言いかけて、思わず苦笑がこぼれた。泡が弾けたように、温かいものが胸に広がる。

「……ありがとな。なんか、味方がいるってだけで、すごく……楽になった」

フィアナの方はそれが不満だったらしい。洗面を作り、やれやれと頭を振った。

「ああもう、姉さんったら……まったく、人が好いんだから。そんな奴、容赦してやる必要なんかないのに」

「オレだってあいつは嫌いだよ。でもまあ、居候は事実だしな。試験に合格したら、見返してやるさ」

その時は奴も文句はないだろ、とリーファは言い、紅茶を飲む。

フィアナはじっと考え深い様子で黙っていたが、ややあつて悔しそうに言った。

「私は姉さんがこの国に来てから、どれだけ努力してきたか、この目で見て知ってる。言葉の壁や常識の違いに苦労して、認められずに悔しい思いもして、それでも陛下やセス伯父様のために、誠実に生きようと努めてきたじゃない。人には目に見える成果や肩書とは別の、大切なものがあるわ」

「そんなに大した事はしてねーよ」

さすがに面映ゆくなつて、リーファはちよつと頭を掻く。

「ラヴァスの弁護をする気はないけど、生い立ちや苦労は皆、それなりに色々あるもんだろ。オレは自分なりになんとかやってきただけだよ」

「そんな風に簡単に言うけれど、それって結構、難しいことよ？

『なんとかやって』行くことを放棄して、墮落する人間が多いんだから。それにね、姉さんが警備隊員になった時、仮にそいつが認識を改めたとしても、結局のところ姉さん自身を侮辱していることに

変わりはないわよ」

「……なんか難しい怒り方をするんだな、フィアナは」

思わず感心してしまう。フィアナは毒気を抜かれた顔になった。

「他人事みたいに言わないでよ」

「ごめん、ごめん。オレ、そこまで考えなかったからさ。愚痴つてごめん、もうあんな奴のことはどうでもいいよ。用事があつて来たんだ」

立ち直りの早さに呆れたのか、それともまた「お人好し」と言いたいのか、フィアナは曖昧な表情で肩を落とした。

「用事って？」

「実はさ、そいつと調べに入った空き家で、塩みたいなものを見付けたんだけど」

リーファが本来の用件を話すと、フィアナはすぐに「それならとうなずいた。

「薬包紙がいいんじゃないかしら。小さな瓶もあるにはあるけど、高い上に割れやすいから。紙なら多少形の不規則なものでも挟んでおけるし……」

言いながら席を立ち、実験台の抽斗から薄い紙を出してきた。正方形で、リーファのてのひらより一回り大きい。

「これよ。本来はこうして、粉薬を一回分ずつ包むためのものだったんだけど、実験に使う少量の薬品を取り分けるのにも使われているわ」

こんな風に、とフィアナは台の上で包み方を指南してくれた。リーファは一回でそれを覚え、きれいな包みを作る。自分の作品を満足げに眺め、リーファはにこりとした。

「へえ、便利だな。これなら中身もこぼれにくいし、使えそうだな。とりあえずちよつとだけ、分けてくれないかい？ もつと必要になりそうだったら、まとめて買うよ」

「もちろんいいわよ、遠慮しないで。……でもそれ、本当に塩かしら？」

「わからない。だから舐めるのはやめたんだ。どっちにしる埃が……」

リーファはあの部屋の状態を思い出し、眉を寄せた。陽光を受けてきらめいた結晶。その一粒を拾い上げた時、確か……

「埃……は、そんなに積もってなかったけど……」

空き家にしては、きれいだった。部屋の隅の方には埃が白く積もっていたような気がするが、中央付近は足跡がつかなかったほどだ。頻繁に誰かがあの部屋を使っているのだろう。箒や雑巾は見当たらなかったから、何かを置いたり引きずったりして、そうと意識せずに掃除している、ということか。

（玄関前で見張りをしていた怪しい男……そいつは、二階に運び込んだ『何か』の番をしていたんだ）

もし、それが塩だったら？

「密売……？」

小さくつぶやいた声を、フィアナが聞き咎めた。

「塩の密売は重罪よ。五十年ほど前の東方辺境伯が爵位を剥奪されて、今のリード家に変わったのも、その罪を犯したから。それ以前にもちらほらと、個人で密輸・密売を行って吊るし首になった人がいるって話よ」

「はーん、なるほどね」

リーファは納得してうなずいた。もし今回また、この王都で誰ぞが良からぬ商いを始めたのであれば、そして辺境伯がそれに気付いたのなら。

「それで伯爵御自らおいでになったわけか」

「姉さん、何の事？ 入隊試験の話じゃなかったの」

フィアナが不審げに問うたので、リーファは「いやあ」ととぼけた。

「ちょっとした好奇心。何でもないよ。どっちみちオレの出る幕じやないみたいだから、明日からまた試験に専念するよ。あ、でも、この紙は貰ってくな」

んじゃ、と言っただけ言っで、リーファは席を立つ。フィアナの不満顔に苦笑で別れを告げ、彼女は急ぎ足に城へ帰った。

五章 空き家のオバケ(3)

自分の部屋にも戻らずシンハの私室を訪ったリーファは、ちょうど部屋を出ようとした当人と正面衝突しそうになった。

二人して「おっと」とのけぞり、続いて同時に何か言いかけ、互いに先を譲って口をつぐむ。見ていたロトが「何を遊んでいるんですか」と笑いを含んだ声で呆れた。図らずも鏡像を演じた二人は、顔を見合わせて苦笑するしかなかった。

「ちょうど良かった。おまえに渡すものがあるんだ」

その場でシンハが、ほら、と差し出したのは、入隊試験の合格証だった。リーファは目をぱちくりさせ、胡散臭げにシンハと紙片とを交互に眺めた。無言の問いかけに、シンハは肩を竦めて答える。

「三番隊の隊長からだ。一班の連中が馬鹿なことをしたようだ、迷惑をかけた、と。本来の試験は別のものを用意してあったが、今回の件についての報告を受け、必要ないと判断した……ということだ」「『不合格証』を受け取らなかったから、合格ってことかい？」

腑に落ちない顔をしながらも、リーファはそれを受け取った。

「明日また、職人街に行こうと思ってたんだけどな」

何気ない風に言い、シンハの顔を窺う。案の定、微かにたじろいだ気配が浮かんだ。

「やっぱりな」

ふーん、と合格証をひらひらさせ、リーファはじろりとシンハを睨みつけた。

「何が『やっぱり』なんだ？」

シンハはとぼけようとしたが、あまり上手くいっていなかった。リーファはため息をつく。

「オレを職人街から遠ざけようって魂胆だな？ おまえの方じゃ、どこまで把握してるんだい。例の……」

塩のことは、と、ささやきよりも小さな声で締めくくる。シンハ

は緑の目を天に向け、お手上げの仕草をした。

「参ったな。どうやらおまえは予想以上に観察力があるらしい。まあ入って掛けるよ」

「へえ、じゃあ本当にあれは塩だったのか」

確かめる手間が省けたよ、と言いながらリーファは部屋に入り、遠慮なく椅子に座る。シンハは愕然として彼女を見つめ、次いで片手で顔を覆って呻いた。

「……おまえな……ああくそ、今後はおまえが相手でも気が抜けないわけか」

「隠し事をするからさ」

楽しげに言つて、リーファはこれ見よがしにそっくり返つて足を組む。シンハは洪面で向かいに座り、諦めた風情で話し出した。

「白状すると、まだほとんど霧の中だ。ロトに調査を進めて貰つてはいるんだがな。伯爵の領内にある岩塩の採掘場で、実際には報告以上の量が運び出されていることが分かったのが、二ヶ月前。巡察官が気付いた時には、既に関与した者は逃亡した後だった」

「つてつまり、現場監督とかが、つてことかい？」

「そうだ。名簿にない人夫を使って、密売用の塩を掘らせていたらしい。巡察官が行く前に監督は病気を理由に退職、そのままどこぞに行方をくらませた。持ち出された塩の行方を追う内に、どうやら王都に流されているらしい、というところまでは見当がついた。それも一人二人のこそ泥の仕業じゃない」

「だろうね」

リーファは相槌を打った。採掘場からこつそり幾許かの塩を持ち出して近隣で売るだけなら、人夫ひとりでも可能だろう。しかし大量に、それも王都で売りさばくとなると、輸送から売買の交渉まで人手が必要になる。

「で、取引に使われてるのがあの空き家だつてことは、いつ分かったんだい」

「恥ずかしながら、今日だ」

「今日？ まさかラヴァスの奴が調べてたんじゃないよな」

あれを調べていたと言うならば、だが。リーファがあまりに信じ難いという顔をしたので、シンハは苦笑して「もちろん違う」と首を振った。

「あの空き家には別筋から行き当たったんだ。おまえが帰った後で、隊長が改めて一班に調査を命じた。まあもつとも、以前から職人街か、新市街の一部が怪しいと睨んではいたがな。だが慎重に調べを進めないと、トカゲの尻尾だけを捕えても意味がない」

「ふーん……でかい本体があると睨んでるわけだ」

「どの程度でかいかはともかく、可能性はいくつか浮かんでいる。俺やリユード伯の方でも探りを入れているんだが」

そこまで言い、曖昧に言葉を濁したまま沈黙する。どうやらこの先は、立ち入り禁止らしい。リーファは口をへの字に曲げた。

「そんな状況だってのに、オレは呑気に試験なんか受けてていいのかよ。猫の手だって借りたいんじゃないのか？」

「先延ばしにしたところで、また別の厄介事が持ち上がるかも知れん。早くおまえに警備隊員としての権限を得て貰う方が、俺も助かるんだ」

しらつと応じるシンハ。しかし、どうにも嘘臭い。リーファはしつこく相手を見つめ続け、無言の圧力をかけた。ややあつて根負けし、シンハは曖昧な顔で頭を掻いた。

「……あのな。たまには、俺の事じゃなくて自分の事を考えてくれ」「はあ？」

リーファは呆れ、次いで怒りをおぼえた。

「何回言わせるんだよ、オレは自分がしたいようにしてるんだ、つて！ そりゃ確かに、恩返しって気分もあるけど……何より、おまえの役に立ちたいんだよ」

勢いで言ってしまったから赤面する。だが、いつもならこんな台詞には照れる筈のシンハは、先日と同じ、困ったような苦笑を浮かべているだけ。リーファは急に不安になった。

「それが迷惑だ、って言いたいのか？」

きゅっと胸が締め付けられ、子供のように泣き喚きたい衝動が込み上げる。

「そうじゃない」

シンハは穏やかに否定し、考えを整理するように沈黙した。リーファは息を詰めて続きを待つ。出てきたのは、予想外の言葉だった。「俺はおまえと対等の立場でいたいんだ」

「……は？」

そんなわけあるか、という台詞が喉まで出かかった。相手は国王で、こちらはどこそ馬の骨である。対等の立場になどなり得ないいくらぞんざいな物言いや無礼な態度が許されるとしても、だ。

そんな彼女の内心を察してか、シンハは苦笑した。

「私人として、ということだ。おまえは意識していないだろうが、おまえがただ身近にいてくれるだけで、俺は随分助けられている。だから、おまえはおまえ自身の事を優先させてくれ」

「オレは……」

言いかけて言葉に詰まる。顔が真っ赤に火照っているのが自覚できた。

「オレは、何にもしてない。おまえの助けになるような事は、何もしてないじゃないか！ タダ飯食って、好きな事ばかりして……」

昼間ラヴァスに投げつけられた侮辱が、生々しく脳裏によみがえる。感情が昂って、これ以上言いたくはないのに、口が勝手にまくしたてた。

「そうだよ、オレはよそ者のくせに態度がでかくて、邪魔者で役に立たなくて、女のくせに生意気だよ！ おまえこそ何だよ、オレに貸しばかり押し付けて、何が対等だよ！」

「貸しは返して貰っているさ。おまえは俺の援助に見合うだけの努力とその成果を、常に見せてくれている。自分が水をやった苗木がまっすぐに育ってくれば、こっちも励まされるんだ。まっとうな人間が身近にいるというのは、おまえが考える以上に大切なことな

んだよ。特に俺のような立場にいと、な」

「な……ん、だよ、それ。ずるいぞ、そんなの……」

反論する声が震え、かすれた。熱い滴が頬を伝い、テーブルの上にぼたりと落ちる。

（オレが苗木だってんなら、おまえがくれたのは水だけじゃない）
それこそ太陽の光そのものだ。そして、悪意に満ちた嘲笑の嵐で打ち倒された身体を、優しく立て直してくれる誠実な手。その温もりが感じられて、涙が次々に溢れだす。

氣遣われたり慰められたりしたくなくて、リーファは乱暴に袖口で涙を拭った。悲しくて泣いているのではないから。

「ちつくしよ……」

なかなか嗚咽が止まらなくて、リーファは齒の間から唸った。

「リー？ 大丈夫か」

流石に心配そうに、シンハが席を立ててこちらに回ってくる。

（うわ、こっち来んな馬鹿！）

リーファは腕で顔を隠そうとしたが、シンハがそばまで来た途端、自分でも予想外の衝動的な行動に出た。いきなり椅子を蹴倒す勢いで立ち上がり、思いきりシンハに抱きついたのだ。

「っ！？」

ぎよっとなってシンハが立ち竦む。その広い胸に顔を押し付け、背中に回した手にぎゅっと力を込める。温かい。

「ちくしよ……」

もう一度、同じ言葉をつぶやいた。今度は苦笑と共に。そして、きゅっと唇を引き結ぶと、腕をほどき、一步離れて顔を上げた。

「大好きだよ！」

ほかに相応しい言葉があったらうか。ありがとうとか、嬉しいとか。だがどれも、それだけではとても足りない気がして。

驚きに目を丸くしているシンハに向かって、リーファは拳を振り上げて見せた。

「ああもっ、この野郎、見てろよ！ 泥棒だろうが密売人だろうが、

なんだってオレがとっ捕まえてやつから、待ってるこん畜生！」

「え？ あ、おい！？」

唐突な宣言にシンハはついて行けず、当惑したまま立ち尽くす。リーファの方は言うだけ言って、では早速、とばかり部屋から飛び出して行った。後ろの方で、

「こら待て、少しは人の話を聞けー！」

……とか叫ぶ声がしたようだが、もちろん頓着しない。リーファは高揚した気分のまま、浮き立つ足取りで自室に戻った。

惜しみなく光を注いでくれるというのなら、こちらは根を張り、枝を伸ばして葉を茂らせよう。それに見合っただけの大樹になって見せよう。

（だから、待っててくれよ）

必ず豊かな実りをもって報いるから。

第六章 まず情報は情報整理

第六章

とは言ったものの、一夜明けて興奮がおさまると、さすがにリーファも行く手の困難に気付かざるを得なかった。

「一人じゃ無理だな……」

服を着替えながら、つぶやきを洩らす。

密売人をとつ捕まえてやる、とは言ったものの、それにかまけて試験に落ちでもしたら、本末転倒だ。しかし試験を優先するなら、一人ではろくな調査ができない。

もちろん、独力で成果を上げられたら素晴らしいのに、とは思う。だが、それが無理なら意地や見栄を張っても仕方がない。既に調査を進めているというロトやシン八本人から、必要な情報を得て効率よく動く方がいい。

よし、と決めると同時に、ノックの音が響いた。毎朝、食事を持つて来てくれる女中だ。住み込みの使用人たちは専用の食堂ですませるのが普通だが、リーファの養父は図書館司書というそれなりの地位にあり、なおかつあまり体が丈夫でないため、自室まで運ばせている。リーファもそれに相伴しているわけだ。

ドアを開けると、いつもの女中が一礼した。ワゴンを押して室内に入り、慣れた手つきで皿や鉢を並べる。それから彼女は、いつものように出て行く……かと思いきや、ふとリーファを見つめて微笑んだ。

「どうかしたかい？」

リーファはきょとんとして首を傾げる。顔に枕のしわでもついているとか、髪に妙な寝癖がついているとか？　だが女中は「いいえ」とくすくす笑いながら首を振り、

「頑張つて下さいね。料理長から、苺のおまけです」

などにこやかに言って、訝るリーファを置き去りに退室した。
何なのだ。入隊試験の激励か？ 確かにテーブルには、つややかな赤い苺を盛った小鉢が置いてある。いつもなら、果物があるとしてもこんなにたっぷりはない。

「まあ、くれるもんは貰つとくけど……」

釈然としないまま、苺をひとつ取って口に入れる。色に負けない、深い甘味だった。

朝食後、リーファはまずロトを訪ねることにした。国王の政務を補佐する必要がなく、脱走した国王を捕獲しに走り回っているのではない時は、自室にいるはずだ。つまり実質的には滅多に部屋にいないわけだが。

廊下を歩いていても、すれ違う召使たちが、妙にこちらを見ている気がする。リーファは落ち着かない気分で、意味もなく髪をいじったり、袖口や裾を引っ張ったりした。

目指す部屋に着くと、リーファはあまり期待せずにノックした。するとありがたいことに、「どうぞ」と当人の声が返ってきた。

「邪魔するよ」

リーファが入ると、ロトは机に向き合ったままちらり視線をくれ、「やあ」と短い挨拶をした。心なしが態度がよそよそしい。リーファは用件を切り出そうとしていた口を一旦つぐみ、「あのさ」と問うた。

「オレ何か、変な事したかな？ 今朝から顔を合わせると皆が妙に笑うし、あんたは何だか……素っ気ないし」

「僕はただ疲れてるだけだよ」

ロトは言い、億劫そうにソファを示した。リーファがおずおずと座ると、ロトは顔をこすってから向かいに座り、ため息をつく。

「ただでさえ忙しいのに、昨日の夕方からこっち、皆が君と陛下の仲について、ありもしない話を僕から聞きたがるんだからね」

「……は？」

何だそれは。リーファは顔をしかめ、首を捻る。ロトはそんな彼

女の表情を胡乱な目つきで眺め、うんざりと言った。

「君が陛下に求婚したって噂になってるよ」

「なッ!? 何だよそれ!」

「持参金代わりに、王都の悪党を一網打尽にしてやると言った、とか」

あくまでロトは淡々と述べる。リーファはすっかり動転してしまった。

「なんでそんな話になってるんだよー!」

「そりゃ、あんな大声で好きだの何だの言えば、噂になるさ。聞きに來た人たちには、否定しておいたけどね。効果のほどは怪しいな」

「あああああああ」

リーファは頭を抱えてしまった。違う、そんな意味で言ったのではないのだ。しかし表面だけ見れば、誤解されても仕方のない台詞ではあったわけで。

(つて、ちよつと待て! まさか)

はっと我に返り、リーファは顔を上げた。

「その……シンハは、何て言ってる?」

よもやまさか。いや彼に限って誤解していることはあるまいが。びくびくしながら返事を待つ。と、ロトは不意にニヤリとした。

「『人の話を聞かない奴が多くて困る』だってさ」

「はは……は……そうか、ならいいんだ」

「良くないよ」ロトが苦笑した。「そのせいで陛下は朝っぱらから先王陛下に呼び出されて、母后様から家令まで総出のお説教をみっちり頂いたんだからね。陛下も最初は誤解を正そうとしておられたんだけど、あんまり話を聞いて貰えないもんだから、最後には旅に出るぞなんて脅しをかけて黙らせてたよ」

「うわぁ……」

リーファは苦笑いで嘆息した。つまり側近であるロトも、お説教大会に付き合わされたわけだ。不機嫌なものやむなしである。

「ごめん、迷惑かけちゃって」

「気にしてないよ。あの方々の心配も、わからなくはないしね。確かに君と陛下の仲の良さは、僕でさえ時々不安になるぐらいだ。二人一緒にいるところを見ると、このまま歴代国王の肖像画の列に、夫婦の肖像としておさまってしまいやしないか、なんてあらぬ想像をしてしまう」

ロトは軽い口調で言っ て肩を竦めたが、あまり冗談にはならない雰囲気だった。リーファは慌てて首を振ってそれを否定する。

「あんたまでそんなこと考えるのは、止してくれよ」

「君にその気がないのなら、僕も一安心だけだね」

ロトの返事には、分かつてるよ、大丈夫、という響きが添えられていた。リーファはそれだけを受け取り、陰に隠れているもう少し微妙な含みには気付かないまま、自分の話を続けた。

「心配する方がどうかしてるよ。たとえオレにその気があったとしても、実現するわけないだろ？　しょっちゅう一緒にいるのは、何もそんな……」

言いかけてふと、昨日のやりとりを思い出す。

「何もそんな、浮かれた事情からじゃない。と思う」

不意に彼女の口調が沈んだので、ロトは怪訝そうに小首を傾げた。リーファは考えを整理してから、訥々とそれを口に出した。

「まっとうな人間がそばにいることが、大事なんだって言ってた。特にあいつみたいな立場だと……って。なあロト、やっぱりあいつ、王様なんて辞めたいんじゃないのかな。本当は嫌で嫌でしょうがないから、誰かを枷にして、自分を玉座に縛り付けてるんじゃないのかな」

「それは違う」

即答したロトの口調は、思いのほか強かった。リーファが怯んだので、彼はもう一度、今度は穏やかに「違うよ」と言い直した。

「シン八様は、王を務めることに喜びも感じておいでだよ。ただ、人に望みが持てなければ、苦しみばかり勝ってしまう。だから君のような人をそばに置きたがるんだ」

「望み……？」

「そう。考えてごらんよ、日々接するのがことごとく性根の腐った人間ばかりだったら、この国に愛情なんて持てるかい？ 公金を出せば浪費するか横領する、仕事を与えたら手を抜くか不平ばかり言う。いくら法令を制定しても、抜け道や盲点を探し出して、人を騙し食い物にしようとする。この世にはそんな人間ばかりだ、と失望してしまつたら？」

誰がそんな人々を守るために戦うだろう。誰がそんな人々のために心を砕き、より良い生活を、より安全な国を、と考えるだろう。

（自分が水をやった苗木が、まっすぐに育ってくれたら　　）

シンハの言葉が脳裏によみがえる。あれは、リーファ一人を指していたのではなかったのだ。街によく行くのも、人々の中に望みがあると、自分のした事が無駄ではなかったと、その目で確かめたいからなのだろう。

とは言え、むろん街には悪人もいる。だからこそ身近には、希望を思い出させてくれる者を置きたがるのだ。枷ではなく、杖としてスがるために。

「あの人はどうも口下手だから」

苦笑まじりのロトの声が、リーファの物思いを破った。顔を上げると、優しい光を湛えた青い瞳がこちらを見つめていた。

「君を安心させるつもりで、かえって自分が重荷だと思わせてしまったみたいけど、そんな理由だから。だから君は、気にせずここにいていいんだよ」

「うん……ありがとう」

リーファは素直に礼を言う。ロトは幾分ぎこちない仕草で、彼女の頭を軽く撫でた。

「さて、それで、と。何か用があつて来たんだろう？……と、訊くまでもないけどね」

ロトは照れ臭いのをごまかすように咳払いすると、立ち上がって机の上から何枚かの紙を取って来た。そして、本題に入る前にちら

りと皮肉っぱいまなざしをくれる。

「試験の方は大丈夫なんだろうね？」

「それは、まあ、なんとか。もう合格証は三枚手に入れたわけだし、残りもこの調子なら楽勝だよ」

「だといいいけど。あまり無理しないで、何か気が付いたら僕の方に知らせてくれるだけでもいい。それで充分役に立つんだから」

そう前置きして、ロトは塩の密売について現在判明していることを教えてくれた。大方は昨日シンハから聞いた通りだったが、それに付け加える事がいくつかあった。

まず、塩はどうやら一度、シャーディン河の上流にある街のどこかに隠されているらしい、という事。それを小分けにして船で王都へ運んでいるため、通常の積み荷検査では見付かりにくいらしい。

東方で事態が発覚するまでに、王都でも何回か少量の塩が押収されていたが、どれもその船の乗員が単独で仕組んだ事とされ、罰金で放免されている。当然ながら、彼らは二度と王都へは戻って来ず、追跡調査しようにも足取りがつかめない。

「検査を厳しくしてからは、彼らのやりようも巧妙になってね。怪しいと睨んだ船はすぐに売られて改装されたり、船名まで変えられてしまったりする。どうせ仲間内での形式的な転売だろうけどね。そんなわけで、近頃はさっぱり見付からないんだ」

ロトは洪面で唸った。すべての船荷を解いて逐一調べていたら、王都の流通が麻痺してしまうため、検査にも限度がある。あるいは既に、船以外の方法に切り替えているのかもしれない。

「それから、取引に使われる場所なんだけど、これも複数あるようなんだ」

それらしい空き家や、貧民街の古物商　実態は故買屋　などを調べても、そこが定期的に使われていたという様子がない。塩のかけらが落ちていることもあれば、怪しい風体の男が出入りするのを見た、という証言もあるが、それが『しょっちゅう』ではないのだ。

「毎回場所を変えてるんだな」用心深いな、とリーファも唸った。
「てことは、王都の地理に詳しい奴が場所を確保して、取引相手に知らせてるわけか」

「そういうこと。どうやって連絡を取り合っているのかが分かれば、後手に回らずにすむんだけどね。何か思いつかないかい、元盗っ人さん」

ロトが疑問符代わりに眉を上げる。リーファは渋面を見せてから、真面目に答えた。

「うーん……オレたちが使ってたのは、口笛で鳥の鳴き声を真似たりして、逃げるタイミングや落ち合う場所を知らせてたぐらいだしな。あとは……えーと、仕草に別な意味をつけておいて、すれ違わざまに次の獲物を相談したりしてた」

こんな風に、とリーファは軽く鼻に触れたり、頭を掻くふりで微妙な指の動きをして見せたりした。ロトは天を仰ぎ、お手上げの仕草をする。

「それじゃよほど運が良くないと、見付けられないな」

「そりゃそうさ、見付からねえようにしてるんだから」

リーファは思わず失笑する。ロトは、笑い事じゃない、とばかりにじろりと睨んだが、すぐに彼もふきだしてしまった。

「ごもつとも。君ならそういうやり取りには詳しそうだし、今回の連中が君の知らない方法を利用しているとしても、なんとなく気付きそうだね」

「絶対確実とは言えないけど、お仲間ならピンと来ると思うよ」

リーファが請け合うと、ロトも「よし」とうなずいた。

「君は試験を続けながら、同時にそうした怪しい連中がいらないか、目を光らせておいてくれないか。うまく尾行できそうなら、彼らの居場所や行き先を確認しておいてほしい。ただし」

「悟られるな、無理は禁物。……だろ？」

分かってるって、とリーファは苦笑した。ロトは疑わしげな視線をくれ、ごほんと咳払いする。

「相手が今回の件に関係なさそうなら、とりあえず泳がせておいても構わない。あまり派手に捕り物をして、本命に警戒されたら困るからね」

「了解しました」

リーファはおどけて言う、わざと仰々しく敬礼する。ロトが嫌な顔をしたのを確かめてから、笑って部屋を後にした。

七章 夢を抱く街（1）

七章

城を出たリーファは、とりあえず試験会場である四番隊の受け持ち街区、通称劇場街へ向かった。

先代国王の治世初期に完成した大劇場をはじめ、昔ながらの小さな野外劇場がいくつもあり、劇場関係者が住人の大半を占める。残りは、彼ら相手に衣食住を商う人々だ。

それ以外に往来する者はいえ、派手派手しく飾り立てた幌馬車に一切合財を詰め込んだ集団があった。横木に吊るされた鍋がガラランガラン騒ぐ一方で、鳥籠の鶏が鳴き、御者台では男が声を張り上げて客引きの口上を述べている。

リーファは道の脇に避け、荷台の子供たちに手を振ってやった。

「旅芸人か」

どこも同じだな、とほろ苦い笑みを浮かべる。国にも街にも属さず、旅を続ける根無し草。大概は地方の小さな村や街でささやかな娯楽を提供しているが、たまに都を訪れ、それなりの劇場で公演する一座もあるのだ。

口上の声が遠ざかり、通りの喧噪が戻って来る。リーファは周囲を見回して考えた。

（陰でこそ何かするには、やりやすい場所かもな）

よそ者が多く、人の入れ替わりも激しい街。こっそり入り込んで用だけ済ませて立ち去れば、誰にも気付かれない。

（とは言っても、どこから手をつけたらいいやら）

漠然と歩いていた足を止め、効率を考え直して広場に戻った。中央広場から放射状に伸びる大通りを歩きながら、横道を一本ずつ当たって行けば、二度手間が省けるだろう。

さて、とリーファが南に向かう大通りに足を向けた時、

「ちょいとすみませんがねえ」

囁れた声がそれを引き留めた。振り返ると、腰の曲がった白髪の老人がひとり、杖を頼りに近寄って来るところだった。

すわ試験官かと身構えたものの、それにしては少々お年を召されているようだ。足取りがなんともおぼつかない。それに、何が入っているのかパンパンに膨れた鞆を肩に提げている。旅行者か、あるいはその鞆だけが全財産の浮浪者か、どちらかだろう。

「お嬢さん、警備隊の人ですか。実は、家を探しとるんですがのう」

「家……ですか？」

リーファは訝しげな顔になった。自宅を探しているわけはなからうから、売り物件ということだろう。目をぱちくりさせたリーファに、老人はふがふがと何度もうなずいた。

「家というか、人というか……そのう、昔の知り合いを訪ねて来たんですがの、道順やら何やらを、忘れてしまいましたな」

「ああ、なるほど」

納得したのも束の間、嫌な予感にぎくりとたじろぐ。案の定、老人は人の良さそうな顔に皺を寄せて、懇願の表情を作った。

「すみませんが、一緒に探して貰えませんかのお」

「もちろん、手伝います」

臍脂色の制服にかけて、否とは言えない。リーファは精一杯愛想良く微笑んだ。

「何か覚えている事はありませんか？　どこの近くとか、通りの名前とか」

「それがさっぱりでしてなあ……見ればわかるんですが。一度は行った事がありますでな、そのう、建物の見た目やら通りの景色やは、覚えとるんですが」

「……そうですか」

初っ端からなんとも意気阻喪させられる話である。リーファは肩を落とした。

「どんな建物でした？ 何か特徴があれば、この界限に詳しい人に訊けば分かるかも」

「そうですね、その……ほら、あれですわ。こう……それ、その」老人はもどかしげに何か示すような手つきをしたが、アレやらソレやらでは、流石にリーファも想像がつかない。しばらく彼はもぐもぐ言った後で、がつくりうなだれた。

「ああもう、すっかり耄碌しておるわい。情けないのう。頭には浮かんどんですよ、くつきりとね。それがどうも、その、言葉にするとなると……うーむ」

「わかりました。いいですよ、じゃあ通りをひとつずつ当たって行きましょう。何か思い出したり、ここは見覚えがあると思ったりしたら、教えて下さいね」

リーファは根気よく言つて、歩きだした。が、しかし、数歩進んで立ち止まる。老人の歩みは亀といい勝負だったのだ。

「すみませんのお」

ふがふが、と彼はまた謝罪する。リーファは慌てて首を振った。

「いえ、こちらこそ、せっかちですみません。焦ることはありませんから、ゆっくり行きましょう」

試験の制限時間は充分に余裕がある。どのみち通りを順に調べるつもりだったし、この老人の足に合わせていれば、見落とすものなど何もないに違いない。

（うつかり慌てさせて、じいさんがコケたりしたら、大変だしな）
気をつけよう。リーファは今にもつまずきそうな老人をちらりと横目に見やり、不安げに眉をひそめた。

こうして忍耐を要する作業が始まった。

老人はしょっちゅう立ち止まり、何かを思い出そうとするように、左右の建物を見上げたり路地の奥を覗き込んだりした。リーファもその度に足を止め、一緒になって周囲を観察する。不審な人物はいないか、怪しげな荷物が置かれていないか。

こういう事は、それこそ警備隊員が総出で引き網式に捜査すれば

良いのだろぅが、あいにく今は、そんな大々的なことをして魚を取り逃がすわけにはいかないと来る。

早々と地道な作業に飽きが来て、リーファはこっそりため息をついた。と、まるでそれが聞こえたかのように、

「お嬢さん」

唐突に老人が呼んだ。リーファはどきりとしたものの、何食わぬ顔で振り返った。老人は数歩離れたところにいて、小首を傾げたままこちらを眺めている。

「どうかしましたか？」

リーファが戻りかけると、老人は手でそれを制した。そして、ふむむと何やら納得する。リーファが訝っていると、彼は不意にくしゃりと笑い崩れた。

「なかなか絵になる光景ですなあ」

がく、とリーファは脱力し、路面に懷きそうになった。そんな彼女にはお構いなく、老人は一人ご満悦である。

「勇ましいいでたちの乙女が、細い通りで悪漢どもと渡り合う。芝居に出てきそうではありませんかのお」

ほっほっ、と彼は笑い、ご覧なさいと言うように、ぐるりを手で指し示した。リーファは半ば呆れつつも、その手につられて首を巡らせる。

「はあ……なるほど」

そして、不覚にも納得してしまった。

微妙に曲がりくねった、石畳の道。両脇に迫る建物の壁。横道は近づくまで見えず、もちろんそこに誰かが潜んでいても分からない。悪漢どもに追われた主人公が、機転をきかせて一人ずつ待ち伏せし、倒して行く場面が目につかぶ。

「確かにここは、隠れんぼがしたくなりますね」

リーファがにやつとすると、老人は我が意を得たりとうなずいた。そして、懐かしそうな優しいまなざしで、ふたたび周囲を眺める。リーファは小首を傾げた。

「この場所に覚えが？」

「いやあ、全然ありませんがのお。昔に見た芝居を、思い出しましてなあ」

「……………」

このジジイ。唸りたいのを辛うじて堪え、リーファは眉間を押さえた。果たして、自分の忍耐力は最後までもつだろうか。

「うちのばあさんと、一緒に見たんですわ。その頃は二人とも若かつたんですね」

嬉しそくに老人はのろけだす。村で一、二を争う美人だったという妻のこと。結婚して出来た娘の可愛らしかったこと、息子がやんちゃで手を焼いたこと。

年寄りの昔話に、リーファはひたすら辛抱強く付き合っていた。とはいえ、

（何やってんだ、オレ……）

一抹の空しさが胸をよぎるのは、どうしようもなくて。そんな時には、自分でも気付かぬまま上の空になっていた。

七章 夢を抱く街（2）

次に老人が立ち止まったのは、小川にかかる橋の上だった。

小川、と言つても、正確には用水路である。シャーディン河の上流から引き入れられた水は、貯水塔から縦横に張り巡らされた水道を通して市民に提供されているが、一部は小川となつて町中を流れているのだ。ちよつとした洗い物や消火用水にも使えるし、火避け地にもなる。もちろん、日向ぼっこにも最適の場所というわけだ。

「ちよつくら休みますかの」

老人は不意にそう言つて、リーファの返事も待たず、川岸に置かれたベンチの方によちよち歩いて行く。どつこらしよ、と彼が腰を落ち着けてしまったので、リーファも仕方なく、隣に並んで座つた。

「すみませんなあ、お疲れでしょう」

老人に言われ、リーファは本音を隠しきれずに苦笑した。

「いえ、疲れたわけじゃ……ただ、なかなか見付からないなあ、と思つて。そちらこそ、お疲れでしょう。何か買つてきましようか」

言つて、リーファはもう早速と立ち上がった。川沿いにはよく屋台が出ていて、薄荷入りの紅茶や、安い菓子などを売っているのだ。

「お茶でも飲んで、ゆつくりしましょう」

いいですなあ、と老人の賛成を取り付けると、リーファは屋台の並びへ走つて行つた。

爽やかな香りのする紅茶を二人分買つて戻ると、老人は既にうつらうつらしていた。

「ありや……」

陶器のマグを二つ持ったまま、リーファは呆然とした。それから、ため息まじりに苦笑する。まあ、年寄りなんだから仕方がない。かなり歩いたし。

起こさないようそつと腰を下ろし、マグから紅茶をすすする。瑞々しい緑の葉が、琥珀色の海で揺れた。値段の割には良い味だ。

南からの暖かい風が、川面にさざ波を立てる。岸边に植えられた木々が順番に梢を揺らす音。やがて、ザアツ、と頭上の枝を揺らし、頬を撫でて、風は北へと駆け抜けて行く。どこからか飛ばされた白い花びらが、川面に華やかな彩りを添えていた。

賑やかな劇場街の中で、ここだけは喧噪も遠のき、穏やかな別の時間を刻んでいた。河原でセキレイが尾を揺らしながら、ぴよんぴよんと跳ねるように歩き回っている。

リーファはマグを両手で持ったまま、くつろいだ気分でその風景を眺めていた。向こう岸のベンチでは、誰かが昼寝をしているようだ。この陽気ではさぞかし気持ちが良いだろう。

つられて眠気を催し、リーファは大欠伸をした。と同時に、老人がむにやむにや言って身じろぎし、はてな、と不思議がるような風情で顔を上げた。

「おや……寝てしまいましたかのお」

「少しの間だけです。良かったら、お茶、どうぞ。まだ温かいですよ」

「や、どうもすみませんな。あんまり気持ちがいいもんで」

老人はマグを受け取ると、目を細めて川面を見渡した。リーファもその視線を追い、そうですね、とうなずく。

「王都にこんな場所があるなんて、知りませんでした」

そうしてしばらくそこのんびりしてから、二人はまた歩きだした。

今度はリーファも、老人ののろくさい歩みや見当外れの発言に、苛立つことはなかった。老人が指さし、あるいは立ち止まるのは、洒落た構えの店や、誰かが壁に殴り書きした詩の一節、古い大道具を利用したと思しき看板など、劇場街に独特の味わいをもつものばかり。そうと気付くと、まるで一緒に観光でもしているようで、焦るのが馬鹿らしくなったのだ。

ようやく目当ての家に辿り着いたのは、太陽が西に傾いて、家々を蜂蜜色の光にとっぷりと浸らせる頃だった。

「おお、ここじゃ、ここですじゃよ！」

老人が顔を輝かせ、一軒の下宿屋を見上げる。古ぼけた漆喰塗りの壁も、そこを這う蔦も、周囲の似たような建物に埋没してしまいそうな、こぢんまりとした家だ。誰かが豎琴を練習しているのが、辛うじて特徴と言えば特徴か。

老人は感に堪えず声を震わせ、それきり無言で立ち尽くした。深い思い入れのある場所らしい。リーファはほっと一息つく、物思いを邪魔せず、数歩離れてその様子を見守っていた。

長い沈黙の後、老人は深く静かな息を吐き出し、晴れ晴れとした表情で振り向いた。

「本当に見付かるとは、思っておりませなんだ。ありがとうでございます」

「え……？ でも、誰かを訪ねて来られたのでは？」

リーファは小首を傾げ、目をしばたかせた。老人は「さよう」とうなずき、ふたたび建物に目を転じる。

「ここは、ずっと昔にわしと友人が住んでおった下宿屋でしてな。わしらがまだ、田舎から出てきたばかりの無名の貧乏青年だった頃ですじゃ。その後、わしは何とか舞台で身を立てたものの、友人の方はそうはならず……しまいに病気になって、田舎に帰ってしもうたんですわ。それきり長らく、会えませんでしたな」

同じ夢を抱いて来て、片方だけがそれを諦めざるを得なくなったのだ。たとえそれが友人でも、否、友人だからこそ、どうして気楽に会うことができるのか。

「わしも、もう長らく彼のことは忘れておりました。この界限に近付くこともなくなって……ですが先日、彼が亡くなったと知らせが届きましてな。それで無性に、彼に会いとうなっただんですわ。今さらですがね」

「……そうだったんですか」

リーファは何とも答えられず、曖昧につぶやいた。ご愁傷様です、と言うのもなんだかそぐわない気がして。

老人は振り向くと、気まずそうなリーファを安心させるように、にこりとした。

「お嬢さんには、すっかりお世話になりましたなあ。結局一日中、年寄りの昔話に付き合わせてしもうて。ほかに用事もありでしように、まったく申し訳ないことをしました」

「いえ、いいんです。おかげさまで、色々の良いものを見せて頂きました」

「ほう、そう言って貰えると、わしも気が楽ですわい」

老人は目を細め、満足げにうなずいた。そして、不意に何かを思い出したように、ぽんと手を打った。

「そうそう、お礼をしなければなりません」

言いながらもうこそこそと、鞆の中を漁りはじめる。慌ててリーファは断った。

「お礼なんて、気にしないで下さい」

これも仕事ですから、と言いかけ、まだ自分は正規の隊員ではないのだと思いついて言葉を一ひっこめる。しかし老人は気にも留めず、いやいや、と片手を振った。

「渡しておかんと、わしの気が済みませんでな。ええと、あれはどこへやったかな……ああ、あつたあつた。これじゃ、これ」

ほら、と老人が出してきたのは、一枚の紙切れだった。リーファはあんぐり口を開け、ぽかんとその場に立ち尽くす。老人は悪戯っぽくにやにやし、紙片をひらひらさせた。曲がっていた腰がしゃんと伸び、しゃぼついていた目がすつきりと冴えた光を宿す。

「要らんとは言わんだらうね？」

そう訊いた声は、いきなり十歳ほど若返ったように聞こえた。

「もちろんです」

慌ててリーファは手を出し、合格証を受け取った。ためつすがめつ眺めてみたが、間違いなく本物だ。

と、ちょうどその時、下宿屋の窓からひょこっと一人の青年が顔を出した。

「声がすると思ったら、やっぱり座長だ！ お疲れさまです、例の試験とやらは終わったんですね？」

「座長？」

リーファはしかめっ面を作り、老人を軽く睨む。彼はほとんど咳払いをすると、青年に向かって言った。

「そうじゃなかったらどうするつもりだ、このボンクラめ！」

言葉は悪いが、温かい声音だった。青年はおどけて首を竦め、そそくさと頭を引っ込める。老人は鼻を鳴らし、改めてリーファに手を差し出した。

「お疲れさま。劇場街の試験はこれで終了だよ」

「ありがとうございます」

リーファが手を握ると、老人はおどけて片眉を上げた。

「わしの演技も、まだ捨てたもんではないでしょうな？」

堪え切れずリーファは笑いだし、ええ、とうなずいた。

「すっかり騙されましたよ。でも、お友達の話は本当ですね」

「さて、どうかな」

老人はとぼけて応じ、それじゃ、と軽く手を振ると、杖をひよいと肩に担いですたすた歩きだした。リーファはそれを見送ってから、参った、と苦笑する。

「元気なじーさんだなあ……」

ともあれ、これで四枚目。半分は達成したわけだ。

「よし、残りもぱぱと片付けちまうか！」

気分を切り替え、疲れた足を励まして帰路につく。通りを歩いてみると、朝すれ違ったのとは別の旅芸人一座と出くわした。こちらは既に一日の仕事を終えたのか、悄然として活気がない。去って行くのは、市門の方向。町中では高くて宿がとれないため、野宿するのだろうか。

それを見送っていたリーファは、視界の端に見覚えのある姿を捉えてハッとなった。

大通りを挟んで向こう側。今しも細い路地の向こうに消えようと

しているのは、試験が始まってから二回、リーファと鉢合わせしたあの男だったのだ。

「ちよつと待てよ！」

反射的にリーファは声を上げ、追いかける。男は一瞬ぎくりとしたかと思えるや否や、振り返りもせず猛然と逃げ出した。

リーファも精一杯走ったが、男がいた場所に着いた時には、既に影も形もなかった。入り組んだ路地のどこへ逃げて行ったのか、見当もつかない。

肩で息をしながら、その場に立って周囲を見回す。

「三度目の正直、か。でもそれにしちゃ、何か妙だな」

つぶやいてみたものの、それに対する応えはなく、黄昏を迎えて慌ただしく夕餉の支度をする物音だけが、微かに路地を流れていた。

八章 謎は解けるか(1)

八章

城に戻ったリーファは、まっすぐ国王の執務室へ向かった。あの男の正体を確かめないことには、どうにも落ち着かない。

廊下を歩いて行くと、微かに話し声が聞こえてきた。執務室の扉は大抵いつも、開け放たれているからだ。

「では、これで取引は成立ですな」

知らない男の声が、愛想よく言う。商人かな、とリーファは眉を寄せた。

「結構。約を違えることのないようにな」

応じるシンハの声は、淡々として感情がない。ということは、不機嫌なのか警戒しているのか、どちらかだ。リーファは執務室が見える所まで来ると、壁際に寄って待機した。じきに、太った初老の男がお供を連れて部屋から出てきた。

リーファは優秀な召使たちがよくやるように、壁の一部になってそれをやり過ごす。男は彼女に一瞥もくれなかった。古めかしい宝飾品や随身の様子からして、商人ではなく貴族らしい。

重い足音が遠ざかると、リーファはぱっと壁から離れた。執務室のドアをノックし、立ったままの国王陛下がむっとりした顔で振り向くのを見て、にやりとする。

「嫌な客の後で可愛いお嬢さんが訪ねて来たんだ、ちょっとは嬉しそうな顔をしろよ」

「その娘を紹介してくれたらな。どこにいるんだ？」

シンハは憎まれ口を返したものの、表情を緩めて苦笑した。リーファはそれを許可のしるしと取り、中に入って机の端に腰を下ろす。

「今の、誰だい。貴族みたいだったけど、取引って？」

「聞いていたのか……ファロス男爵だ。リユード伯の隣人で、今回

はまあ……なんというか、金の無心だな」

「金持ちに見えたけど？」

「貴族の見かけは台所事情を反映するとは限らないのさ。春の納税が規定額に満たない分を、直轄地に小作人を提供することで埋め合わせてくれと言ってきた」

やれやれ、とシンハはため息をついて、不愉快な会見の痕跡を消すかのように、机上を片付け始める。リーファは難しそうな顔になった。

「それって、領民にとっちゃいい迷惑じゃねえの？ 税が規定に足りないってことは、皆の生活だって苦しいはずじゃないか」

この国の納税は基本的に秋に一回だが、一部の税に関しては調整のため、春にも分けて行われる。補完的な春の納税は概ね小額で、普通なら規定額に満たないことはない。突然の災害に見舞われたとか、税額の算定に手違いがあつたとかいうのでない限りは。

「なのに直轄地まで耕せって言われたって……」

「別の方法として、身に着けている宝石を置いて行けばどうかと提案はしたんだが」

シンハは辛辣な笑みを浮かべて言ったが、すぐに小さく首を振った。

「足りない税金を取り立てるか、算定をやり直すのなら、徴税吏を派遣して監査を行えばすむ。だがどうも、奴の狙いは別にあるような気がするな」

「それであえて取引したってわけだ。でも……何が狙いだって？」

「奴の提案した直轄地は、ちょうどリード伯の領地との境界だ。ずっと昔に緩衝地帯として定められた地域で、ここに国王軍以外の兵士を置くことは禁じられている」

事もなげにシンハが言ったので、リーファがその意味するところを察するまで、しばしの間を要した。

「……って、ちょっと待てよ！ 男爵の私兵が鋤を持って駐屯するかも、ってのか？」

「可能性はある。ファロス男爵は以前から何かと、欲の皮の突っ張ったところを見せているからな。リユード伯と確執があるわけじゃないが、近隣の領主相手にせこい小競り合いを起こして、結果、協定に持ち込んでいい土地をせしめてきた男だ」

シンハの声にはもう、嫌悪の情がありありとあらわれていた。

「先に手を打っておかないとな。やれやれ、塩の件だけでも頭が痛いのに」

「あ、そうだ、その事だけだ」

本来の用件を思い出し、リーファはぽんと手を打った。

「あのさ、オレに監視つてつけてるか？」

「……何の話だ？」

「つまり、試験官とは別に、誰かを監督としてつけてるのか、ってこと。なんかやたらと鉢合わせする奴がいるんだけど」

「少なくとも、俺は知らない」

シンハは怪訝そうだ。さもおりなん、とリーファは頭を掻いた。

「そうか。いや、どうもそいつ、挙動不審だね。塩の件と関係あるかどうかはわからないけど、ただ、ちよつと気になるんだ。呼び止めたら逃げ出したし……」

「何か後ろ暗いところがあるんだろう。あまり深追いするなよ、おまえはまだ警備隊員じゃないんだからな」

釘を刺され、リーファは苦笑した。

「口トにも言われたよ。援護がないから、ってんだろ？ そんなに心配しなくても、逃げ足には自信があるから大丈夫だよ」

「その点に関しては、異論はない」

シンハは真面目くさつてうなずく。リーファは、いいだ、と齒を剥いて机から降りた。

「それじゃお墨付きの通り、さつさと退散しますよ」

しかし部屋から出かけたところで、「ああ、リーファ」と、何やら遠慮がちに呼び止められた。彼女が振り向くと、シンハは曖昧な顔で小首を傾げて齒切れ悪く続けた。

「昨日のことだが……」

そうだった。リーファは思い出すと同時に、堪えきれず失笑した。
「ああ、あれね。ごめんな、朝っぱらから呼び出しくらって説教されたって？」

それが軽い口調だったのでほっとしたように、シンハも笑みをこぼした。

「それは別にいいんだが。この機会に訊いておくが、結婚する気はないのか？」

「誰が」きよんとするリーファ。

「おまえだ、ほかに誰がいる」

「誰と？」

「俺が知るか」

どうも話が噛み合わない。シンハはやりにくそうに、ちょっと頭を掻いた。リーファも何となく気詰まりで、視線をそらす。しばらくどちらも相手の出方を窺っていたが、ややあってリーファの方がため息をついた。

「じゃあ訊くけどな、オレに家庭の主婦がつとまると思うか？ 縫い物も糸紡ぎも料理もできない、その上、警備隊員になろうって女を、どこの誰が嫁にするんだよ」

「世の中には物好きもいるさ。おまえの意志を訊いているんだ」

「今、さらつと失敬なこと言いやがったなこの野郎。オレ自身としちゃ、結婚なんか考えたこともねえよ。城から追い出されたら別だけどな」

「そうか」

安堵と納得の返事に、心なしか残念そうな気配がまじる。リーファはおどけて、おや、と目を丸くして見せた。

「もしかして、本当に嫁さんにしてくれるつもりだったかい？」

「馬鹿」

即答された。それはそれで多少傷つく。ぶすつとしたリーファに、シンハは苦笑した。

「ちょっと別の事を考えていただけだ。おまえにその意志がないのなら、それでいい。追い出したりしないから、安心して居座つてろよ」

「そりゃどうも」

皮肉っぽく応じ、話は終わりがと問うように小首を傾げる。ちょうどその時、特徴的な速足の靴音が近付いてきた。案の定、ロトである。

「陛下！ リーもいたのか、ちょうど良かった。例の件で少し進展がありましたよ」

忙しなく言つて、ロトは小脇に抱えた書類挟みの中から、メモを一枚引つ張り出す。

「警備隊員が、検印のついていない塩を見付けたそうです。無認可の小売商で、店主は知らなかったと言い張っているそうですが、少なくともそれを持つて来た男の人相風体を聞き出すことはできたと。それによると、塩を売りに来たのは小柄で痩せた、三十代後半から四十代と思しき男、髪は暗い金髪で目は灰色」

その特徴を聞く内に、リーファの脳裏にある男の姿が浮かび上がった。

「もしかしてそいつ、猫背で鼻がとがつてるんじゃないか？」

「知ってるのかい？ 今まさにそう言おうとしたところだよ」

驚いてロトが目をしばたたかせる。シンハも険しい表情になった。「先刻言っていた男か？」

「多分。あいつが塩の取引を実際に行っているんだとしたら、絶対に黒幕がいるね。見るからに貧乏そうだし、怯えた目をしてた。自分で密売を計画して金儲けしてる奴だとは思えない」

「今までにその男を見かけた場所は？」

シンハに問われて、リーファもその意味するところを察する。

「持ち主は知らないけど、薔薇がやたら咲きまくっている屋敷の前だよ。それに船着き場と劇場街。この二箇所はたぶん、塩の受け渡しのために行ったんだと思う。船の名前は確か鳥の名前……そう、

『ミサゴ』だ。やたら補修の跡があつて、年季の入った船だなと思つただけで、偽装のせいだったんだな」

「ミサゴ、か。分かった、下流の街に停泊していないか調べさせよう。そうすると、恐らく屋敷の主が黒幕だろうな」

「薔薇を植えている屋敷は多いですが、咲きまくっている、となると……やはりファロス男爵の館ですね」

ロトがささやくように言った。リーファとシンハは顔を見合わせ、うなづく。

つながった。

「男爵の次の狙いはリユード伯の領地だな。そのために兵を雇う金が必要で、塩に目をつけたんだろう。他人の領地で採った塩から得た金で、その土地を奪い取ろうとは、どこまでも厚かましい奴だ」

シンハは軽蔑を込めて小さく舌打ちし、続けた。

「王都での売買に使われたのが、リーファの言う猫背の男だろうな」

「じゃ、まずそいつから網にかけるかい？ それとも、もうしばらく泳がせて、でかい魚がかかるまで待つかい」

袖まくりせんばかりの勢いでリーファが言うと、シンハは珍しく好戦的な笑みを浮かべて応じた。

「そりゃ、魚はでかい方がいいだろう。調理のし甲斐がある」

「活きのいい内に俎に載せられるように頑張るよ。えーと、オレはとりあえず薔薇屋敷の見張りでもすればいいかな」

「いや、おまえは試験の続きに戻ってるよ」

「おい！」

そりやないだろう、と抗議しかけたリーファに、シンハはおどけて付け足した。

「ただし、たまたま何かが網にかかれば、それはおまえの獲物だ」

「そうは言っても、あと残ってるのは司法学院のある五番隊の街区と、新市街、それに神殿と魔法学院の辺りだろ。新市街はともかく……」

新市街、と言えば聞こえはいいが、要するに旧市壁からはみ出し

て広がった町並みだ。今は新しい市壁の内側になっているが、区画整備はされておらず、治安も良くない。

「だがおまえは、無関係に思われるような場所から、思いがけない手掛かりを拾ってきたじゃないか。今度も何を嗅ぎ当てるか分からないだろう」

「人を犬みたいに言うなよ。……分かってるよ。正規の警備隊員でもないのにしゃしゃり出ちゃ、また王様の身贔屓が、ってな顔されちまうんだろ」

「そういうことだ」

すまん、とシンハが苦笑する。リーファは肩を竦めた。二番隊の試験官が言ったように、警備隊の中でも意見は割れているのだろう。現にラヴアスのような男にも出くわしたのだ。自分が迂闊なことをすれば、シンハの方に抗議が雨あられと降り注ぐに違いない。

「仕方ないな。捕り物と手柄は、合格してからのお楽しみにしておくよ。今は正規の隊員に譲るさ。その代わり、後でオレにも何か美味いもの作ってくれよ」

リーファが聞き分けの良いところを見せると、シンハは嬉しそうな顔をし、ロトは渋面になったのだった。

八章 謎は解けるか(2)

とは言つたものの、正直、翌日は試験にあまり身が入らなかった。五番隊の受け持ちは警備隊本部の裏側、王都の西側の一画だ。目立つた建物としては司法学院があるだけだが、その敷地は広大である。学生や教官相手の店や下宿が多いため、街の雰囲気もどこかしら学院色に染まっている。

だから余計に気が進まない、というのがリーファの本音だった。勉強自体は嫌いではないが、学校という場所には無縁だったもので、胡散臭く感じられて仕方ない。

(不気味だ……)

街を歩きながら、リーファは早くもげんがりしていた。まず、お揃いの紺のケープが気に入らない。年齢的に弾けんばかりの生気に満ちた少年少女たちが、同じ格好をしてぞろぞろたむろしているだけで、一種異様な空気が醸し出される。

(こんな所で、誰がどんな試験問題を用意してくれているのやら)リーファは頭痛をおぼえた。警備隊の入隊試験には法規関係の試験もあり、リーファも王都シエナの都市法はきっちり勉強しているが、司法学院では過去の膨大な法令を集めた大法典も学ぶと言うし、そんなところから問題を捻り出されたらお手上げだ。

難しい顔で歩いていると、いつの間にか司法学院の正門前に差し加かつていた。

「あ、ちよつと、その君」

不意に呼び止められ、リーファは足を止めた。見ると、守衛らしき太った男が何やら手招きしている。早速おいでなすつたか、と気合を入れて駆け寄ると、相手はいきなり紙片を差し出した。

「え？ これ……」

「あんたに渡すように頼まれたんだ。近日中に通るかかるだろう、つてね」

はて、どうということか。リーファは折り畳まれた紙片を用心しながら受け取り、すぐにそれが合格証ではないと気付いた。紙の質も大きさもまったく違う。もどかしげに開いて見ると、それは短い手紙だった。

「『私の居所まで辿り着けたら合格だ。まずは第一の鍵を見付けたまえ。在処は番犬の餌入れの下』……なんだ？　つまり謎掛けのことか。へえ、面白い」

こういうのなら歓迎だ、とリーファは笑顔になる。守衛はどうやら事情を聞かされているらしく、秘密を隠してとぼけ顔を作っている。

「ええっと。オレ、中に入ってもいいのかな」

リーファが門の内を漠然と指して問うと、守衛は奇妙な表情でうなずいた。答えがばれるのを警戒してか、無言だ。リーファはその表情に引っかかるものを感じながらも、まずは門を通り抜けた。

「番犬、ねえ」

学院で犬を飼っているとは思えないが……、と訝りながら周囲を見回すと、なんと、門のすぐ近くに犬小屋があった。守衛の助手なのだろう。大きな黒犬が小屋から半分体を出したまま、眠っているのが見えた。そして、小屋のそばには水の器と、空の餌入れが。

「……まさかなあ」

半信半疑ながら、慎重に小屋へ近付く。犬はピクツと耳を動かし、むくりと頭を持ち上げた。リーファは何げない素振りです歩き、犬など見えていないかのように、餌入れのそばにしゃがむ。

そこまでは何も問題がなかったのだが、リーファが餌入れに手をかけた途端、犬が大きく一声、吠えた。

「わっ！」

リーファは驚いて尻餅をつきそうになり、慌てて体勢を立て直す。咄嗟に餌入れをつかみ、裏にくっついていた紙片を素早くむしり取って立ち上がる。大腿に後ずさって犬から遠ざかると、リーファはやれやれと紙片を開いた。そこには一言。

『失望させるな、馬鹿』

リーファが紙片を握り潰すと同時に守衛が笑いだし、犬をなだめに来てくれた。リーファはいまいましげにそれを横目で睨む。

「本気でここだと思ったわけじゃない」

負け惜しみに聞こえると承知でリーファが言うつと、守衛は「そうだろうとも」と理解を示してくれた。腹の立つにやにや笑いもおまけについていたが。

リーファは口をへの字にしてから、今度は守衛の番小屋にずかずか入って行った。番犬と言ったら、何も本物の犬には限らない。しかし、となると餌入れが何かが問題だ。

茶が入ったままのカップを持ち上げてみたり、棚を漁って食べ物の入った容器はないかと探したりして、最終的に皿の裏に貼り付けられた紙片を見付けた。ペリ、とはがして、また侮辱の言葉が書いてあるのではないかと身構えつつ開くと。

『惜しい』

「……人をからかってやがるな」

くそ、と舌打ちし、小屋の外に出る。守衛は肩を竦めた。

「俺が知っているのは、ここのふたつが外れてことだけだよ。当たりがどこにあるかまでは、聞いてないからな」

「教えて貰えるなんて期待しちやいないよ」

リーファはぞんざいに言い返し、さて、と腕組みして考え込んだ。学院の門で渡されたからここに気を取られたが、五番隊の受け持ちは学院だけではない。また、あの言葉からして『番犬』は本物の犬ではないだろう。

（となると、あとは犬の彫像とか……あるいは）

この街区にあるものを思い出していると、不意に閃きが降ってきた。

（警備隊本部！）

法と正義の番犬、警備隊。その本部もこの街区にある。厳密には五番隊の受け持ちではないが、一般人がそこまで気にするとは思え

ない。

リーファは守衛に挨拶もせず、踵を返して走りだした。本部に飛び込むと、中にいた隊員たちがぎよっとなって振り返った。

「失礼、ちよつと探し物をさせて貰います」

リーファは適当な敬礼をして、呆気に取られている隊員たちの目を無視し、家捜しにとりかかった。

（餌、餌、餌……）

食べ物にかかわりそうなもの。また皿だろうか。誰かのカップ？あまりしよつちゅう動かされる物は、はがれてしまっただろうから不可。残りは何がある？

ポットや食器を一通り調べたが、収穫はなし。リーファは嫌な予感がして、ちらりと奥の部屋に続く扉を見やった。

「……ひとつ訊きたいんですが」

リーファは近くにいた隊員に向かって渋々と問うた。

「給料の管理はどうなっているんです？ ああ奥で誰かが金庫番をしてるんですか」

「え？ ああ、給料ね。あんまり大きな声では言えないけど、お察しの通り、奥だよ」

試験の一環だと気付いたらしく、隊員は途端に面白そうな顔になった。

「何だい、隊長から金庫を奪って来いって？」

「いいえ。でも、それに近いかも」

やっぱりか。リーファは深いため息をついた。出来れば熊オヤジとは顔を合わせたくないのだが。しかもよりによって、金庫を見せしてくれ、などと頼まねばならないとは。

リーファは嫌々ながら奥の扉をノックし、待ちかねていたような「入れ」の声を耳にして眉間に皺を寄せた。

「失礼します」

開けてみれば案の定、ディナル警備隊長がご満悦の体で椅子にふ

んぞりかえっていた。リーファはどんよりした目でそれを見やり、ため息ひとつの後で、ぴしつと姿勢を正して言った。

「入隊試験のため、隊員の給料を保管している金庫を拝見したく、許可を頂きに参りました」

焦らしているのか何なのか、ディナルはしばらく返事をしなかった。ややあつてフンと鼻を鳴らすや、ずいと小さな紙片を突き出す。「持つて行け」

はいとも言えず、リーファは胡散臭げにそれを受け取った。疑いのまなざしに対し、ディナルは軽侮もあらわに応じた。

「貴様はまだ部外者だ。金の置き場を見せてやるわけにはいかん。答えが分かったのならそれで充分だ。とつと失せろ」

しっしっ、と手を振られ、リーファは渋面になったものの、文句は言わずに退散した。余計な厭味まで頂戴したくはない。本部を出てから紙を開くと、今度は短く『ティトス見聞録、二六頁三行目』とだけ記されていた。

「何だこりや？ 見聞録……頁と行ってことは、本の題名なんだろうなあ。つたく、行ったり来たりさせやがって」

ぶつぶつばやきつつ、リーファは来た道をまた戻って行く。守衛に片手を挙げて挨拶し、今度は学院の建物に入ると、受付で場所を訪ねて図書館に向かった。

扉を開けた途端、ずらりと並んだ書架に圧倒される。リーファは一目見るなり、自力で探すことは諦めた。

「すみません、ちょっと調べ物をしたいんですが」

司書らしき中年の女に、小声で話しかける。女はリーファの制服を見ると「ああ」と笑みを浮かべた。

「話は聞いていますよ。どれ、ちよつと拝見」

司書が手を差し出したので、リーファは謎の書かれた紙片を渡した。どうやら彼女も、出題者から協力を頼まれているらしい。

「はいはい、ティトスの見聞録ね。こちらです」

ついて来て、と司書はすぐに歩きだす。リーファは流石に驚きを

隠せなかった。

「まさか、ここの蔵書全部を覚えているんですか？」

「完璧に、とはいかないけれど、大体はね。蔵書票を調べるのは面倒だし、もし蔵書票が紛失したりすれば、記憶だけが頼りだもの」

司書の口調はさも当然とばかり、あっけらかんとしている。リーファは「はあ」と間の抜けた相槌を打つのがせいぜいだった。

歩きながらリーファは、感嘆とともに館内を見回した。書見台や机には学生のみならず教官の姿もあり、手首を痛めそうな分厚い書物を繰っている。

「すごい数ですね」

リーファが言うと、司書は誇らしげに笑みを広げた。

「年月をかけて少しずつ集められてきたものですからね。法令集や判例集は毎年増えて行くのが当たり前としても、それ以外に様々な書物を購入していますから」

話すうちに、彼女の表情は真剣なものに変わっていた。

「この学院の卒業生は、各地の都市警備隊、あるいは裁判官や書記、巡察官など、様々な職業に就いて、世間を渡って行くことになりました。そんな時、頭に法令を詰め込んだだけの、歩く大典典のような人間では困りますからね。そうでなくとも学院は閉ざされた場所で、そこに身を置く者は、ともすれば学院の外にこそ世界があるという事を、忘れがちです。ですから学長は、学生たちに少しでも広い視野を持つて貰おうと……」

そこで彼女は足を止め、書架のひとつを示した。

「教養となる古典はもちろん、小説や紀行文なども収めているわけです。お探しの見聞録も、そうした書物のひとつなんですよ」

はいどうぞ、と差し出された書物は、まだ新しかった。リーファはそれを受け取り、礼を言っ頭を下げる。司書は「どうぞ致しまして」と応じ、用が済んだら元の場所に戻しておくように、とだけ言っつてその場を立ち去った。

八章 謎は解けるか(3)

控えめな足音が小さくなつて消えると、リーファは本を開く前に書架をざつと眺めてみた。なるほど確かに、あまり司法の世界とは関係がなさそうな、碎けた題名が並んでいる。『東方美味礼讃』だの『銘酒百選』だのまであるのには、失笑してしまった。

その声が静かな館内に思ひのほか反響し、リーファは慌てて口をつぐむ。必要もないのに小さな咳払いをしてごまかし、『見聞録』の指定された頁をめくつた。見付かつたのは、ごく短い一文。

『そこでは誰もが自由に飲み食いすることを許されていた。』

「……は？」

何のことやら。リーファは本を片手に、しばし茫然と立ち尽くした。

(自由に飲み食い、つて……この界隈の食い物屋を全部当たれつてのか？ いや待て、店だったら『自由に』とは言わないか。となると教会の施しみみたいなもんか？)

生まれ育つた街の光景を思い出し、リーファは眉を寄せた。浮浪者や孤児たちに、不味くて薄いスープを配る教会の尼僧たち。残飯をぶちまける料理係と、群がる飢えた獣のような貧民たち。すえた臭いが不意に鼻をついた気がして、リーファは頭を激しく振つた。

(あんな光景は……この街じゃ見たことないぞ)

リーファは本を棚に戻し、図書館を出た。嫌な記憶に追いつがられているようで、自然と速足になる。受付まで戻ってきた所で、ふと、鼻をくすぐる本物の匂いに気が付いた。何かをコトコト煮込んでいるような、温かくほんのり甘い匂い。途端に、腹の虫が目覚まして鳴き出した。

リーファが思わず辺りを見回すと、受付の女と目が合った。

「そつえば、そろそろお昼時ね」彼女は笑つて言った。「食堂なら、そのまま真つすぐ行つて、突き当たりを右よ」

「どうも」

リーファは照れ隠しに苦笑し、言われた通りに歩きだした。財布に小銭は入っているし、学院の食堂なら安くで何か食べられるだろう。

着いてみると、食堂はがらんとしていた。上級生や教師の姿がちらほら見えるだけだ。どうやらまだ、授業中らしい。

（混雑する前に、さっさと食って退散しよう）

リーファは急いで配膳口に向かい、「すみません」と声をかけた。あいよ、と威勢よく答えて応対に来た小男は、リーファの格好を見て目をぱちくりさせた。

「なんだ、あんた学校の人じゃないね。その制服は警備隊かい？」

「ああ、えーと、まだ見習いみたいなもんですけど。食事、できますか」

「うーん、本当は駄目なんだがねえ。まあ、警備隊ならしょうがねえか。その盆を一枚取りなよ」

人の話を聞いているのかいないのか、男は顎をしゃくって何百枚と重ねられた四角い盆を示す。リーファが一枚取って来ると、瞬く間に手際よく、パンとシチューと黒豆入りヨーグルトが並べられた。「量はそんでいいかね？ パンとシチューなら追加できるよ」

「ありがとうございます。これでいくらですか」

財布を引っ張り出しながら問う。だが男は「要らん要らん」と手を振った。リーファが怪訝な顔を見ると、男は齒の欠けた口でにかつと笑った。

「この食堂はタダだよ。献立は選べんがね。だから本当は外のもんには出なくなって言われてんだけどよ、でもま、そんな決まり、あつてないようなもんだからね。いいから、食いなよ。ああ、ほんで、終わったら食器と盆はそちに返してくんな」

ほらほら急いで、とばかりに手で促され、リーファは曖昧にぺこりと会釈してから、隅のテーブルに席をとって食べ始めた。格別美味くもないが、決して不味くはない、よくある家庭の味だ。無料と

は気前のいい話だが、国の補助金をたつぷり貰っているからだろう。（授業料がいくらかかるのか知らないけど、少なくとも食うものと寝る所の心配はしなくていいってことか。貧乏人でも頭が良けりや、なんとかなるって寸法かね）

むろん受験勉強ができる程度には生活に余裕がないと無理な話だが、それでも一部の金持ちだけが司法の世界を占領してしまうのを防ぐことは出来る。

（あいつらしいや）

シンハの顔を思い出して、リーファはそつと微笑んだ。それから彼女は、生徒たちが押し寄せる前に食べ終えることに集中した。あまり熱心に食べていたもので、ちぎったパンの中から紙片がいきなり出て来たのには、心底ぎょっとさせられた。

「あつ……！」

小さな声を上げ、反射的に配膳口を振り返る。歯欠けの男はわくわくしながら様子を見ていたらしく、顔をくしゃくしゃにして大喜びした。

「食っちゃまわなかっただろうね？」

「なんとかね」

リーファは苦笑で応じ、紙片を振って見せた。どうやら、パンに切り目を入れて押し込んだらしい。まったく、この試験官は何人の関係者を巻き込めば気が済むのだから。

紙片を汚さないよう脇に避けて、急いで食事を片付ける。言われた通りに食器を返してから、リーファは中庭に日当たりの良い芝生を見付けて腰を下ろし、紙を開いた。

『学び舎の古老の冠の中』

「……勘弁してくれ」

まだ続くのか、とリーファはその場にひっくり返ってしまった。さすがにそろそろ疲れてきた。警備隊本部、図書館、食堂。次はどこだ？ 学び舎と言うからには、学院の敷地内だろうが、古老とは誰だ。教師の最高齢者だろうか。それとも、建物の中で一番古い部

分のことか。

「これだけ学院の職員に顔がきくんだから、出題者は学長なんだろうけどなあ」

ぼそりと独りごち、紙片を恨めしげに睨む。学長室に乗り込んで、すべての謎を解いていなければ、合格証は貰えないだろう。あるいは『私の居所まで辿り着けたら』と言っているからには、どこかに雲隠れしているかもしれない。

リーファはしばらくあれこれと頭を捻っていたが、最終的に出てきた結論は、ひとつだけだった。

食事の後で暖かな芝生に寝転がって、考え事などするものではないと。

目が覚めた時には、夕焼け空にカラスが飛んでいたのである。

九章 探し物発見（1）

九章

翌日になつて出直したリーファは、正門で守衛に呼び止められた。昨日とは打って変わつて深刻な顔つきで、開口一番、彼は告げた。

「学長がいないんだ。昨日から」

「どういう事だい？ 詳しく説明してくれよ」

「学長はこの敷地内の離れに住んでらっしゃるんですが、ゆうべはお歸りにならなかったらしいんだ。奥さんが心配して、警備隊に探してくれと頼みに行つたんだが、何か向こうも忙しいらしくてな。一晩ぐらい、図書館で徹夜でもしたんじゃないのか、って具合で、手が空いたら人を寄越すとは言つたが、いつになるか」

リーファはちよつと考え、それからふと思ひ当たつて言つた。

「あのさ、オレの試験官つて学長だろ？」

守衛は明かすべきか否か躊躇したが、それも一呼吸の間だけで、すぐにうなずいた。

「何か心当たりがあるのか？」

「あるような、ないような……。最初の問題に『私の居所まで辿り着けたら』って書いてあつたら？ だから学長は、万一自分だとばれた時のために、学長室じゃなくてどこかに隠れてるんじゃないかと思つたんだけど」

そこまで言つてから、我ながらその仮説が馬鹿らしくなつた。

「でも、晩メシ抜きで隠れんば続行なんて、あり得ないよな。むしろ隠れ場所では何か困つたはめになつてんのかも知れない。ほかに手掛かりもないし、急いで試験問題を解いちまおう。あんたも手伝つてくれ」

リーファは昨日の紙片を取り出し、書かれた文章を読み上げた。
「『学び舎の古老の冠の中』。あんたには何のことか、分かるかい」

紙片を受け取り、守衛は「ああ」とうなずいた。

「古老つてのは、榆の木だ。学院が建つ前から、この土地に生えてたって話でな。ほら、そこだ」

彼が指さした先に、巨大な木の梢が建物の屋根を越えて広がっているのが見えた。

「わかった、ありがとう」

リーファは礼も言い終えぬ内に走りだす。守衛が大声でそれを止めた。

「待ってくれ、俺も行く！」

「あんたは仕事があるだろ！」

リーファは足を止めずに怒鳴り返し、そのまま巨木を目指した。堂々たる榆の木は、確かに古老と呼ぶに相応しい威容を誇っていた。そこだけは異なる時間が流れているように、森閑としている。しかし残念ながら今は、見とれていられる状況ではない。リーファは首をのけぞらせて巨木を仰ぎ、口をぽかんと開けた。

「冠……って、あれか？」

遙か高みに、ヤドリギなのか鳥の巣なのか、もさつとした塊が見える。

「あそこまで登れ、つてのかよ……」

眩暈がした。が、ことは単なる試験にとどまらなくなっている。場合によっては人命にかかわるかも知れない。リーファは渋る手足を叱咤し、気合を入れてよじ登り始めた。

枝はもちろん、節やうろをも利用して、慎重に、しかし急いで手足を動かす。

やがて、いい具合に枝が広がった場所に出ると、リーファはほつと一息ついた。ここからなら、『冠』にも手が届く。足元に注意しつつ腕を伸ばして古い鳥の巣の中を探ると、カサリと大きめの紙片が指に触れた。

「やれやれ、ふう……まったく人騒がせな学長さんだよ。シンハの奴といい、リユード伯といい、座長のじいさんと言い……こんなふ

ざけたお偉いさんばかりで、この国は大丈夫なのかね」

太い枝をまたいで座ったはずみに下を見てしまい、地面の遠さに目くらみそうになる。慌てて枝にしがみつき、目をそらした。

「うへえ……こんなとこまで学長も登ったのかよ。とんでもねえじーさんだな」

呆れて独りごち、落とさないように用心しながら紙片を開く。そこには一言。

『横を見る』

「あ？ 横？」

端的な命令に従い、首を回す。右でも左でも、この高さで水平方向の視界に入るのは、学院の一番高い塔だけだった。そのてっぺんの部屋の窓に、何か動く影がある。

「あそこか」

リーファは紙片を口にくわえ、大急ぎで降り始めた。途端に、

「うわ！」

焦ったせいで足を踏み外し、一瞬、ふわりと体が宙に浮く。口から落ちた紙片がどこかへ飛ばされて行くのを妙に鮮明に捉えた直後、衝撃が全身に襲いかかった。

小枝が折れ、葉が舞い散る。ガサガサバキバキと滝のような音の中を落ちながら、とにかくどこかに掴まらなければ、と必死でもがいた。体のどこに何がぶつかったのか、感じる余裕さえない。

ガスツ、とひととき大きな衝撃がきて、やっと落下が止まった。と思う間もなく視界が暗くなっていく。

「リー！」

馴染んだ声が名を呼ぶのを聞いた気がしたが、もはや自分が落ちているのか浮いているのかも分からなかった。

ふんわりと暖かい春風に包まれる感覚がして、気が付くと薄目を開けていた。

「あー……花畑が見えた……」

ぼんやりそうつぶやくと、途端に「馬鹿」と叱られた。この声は誰だっけ、と考える間もなく、額にコツンと相手の額がくつつけられる。黒髪が視界を遮り、やっとリーファは状況を理解した。

「シンハ？　なんでこんなところに」

徐々に体の感覚が戻ってくる。シンハが小さな吐息をもらし、そつと額を離れた。ようやく彼の顔に焦点を合わせ、リーファは思わず口を滑らせた。

「泣いてんのか？」

返事代わりに、べちんと平手で目隠しをされた。リーファはその手をひっぺがし、慌てて起き上がる。シンハに抱きかかえられているのが分かり、恥ずかしくなったのだ。

が、いきなり立とうとしたのは無茶だった。ガクンと膝が抜け、支えを求めて手が宙を泳ぐ。結局リーファはまたシンハに支えられ、ぺたんと座り込んでしまった。

「なんて無謀な真似をするんですか」

静かだが厳しい男の声が降ってきた。見上げると、銀髪に縁取られた優美な顔立ちが目に入る。魔法学院の学院長、セラムⅡフラナンド。リーファは改めてぐるりを見回し、その顔触れに気圧された。シンハとセラムだけでなく、ディナルもいる。それに、臙脂色の制服姿の警備隊員が五、六人。

「いったい、何が」

困惑するリーファに、シンハが説明した。

「例の猫背の男を、この近くで見かけたという情報が入ってな。探していたら学長が行方不明だと知らされて、もしやと思って駆けつけたところだった」

そこまで言い、彼はもう一度、今度は深い吐息をついた。

「死ぬかと思っただぞ、まったく……」

その深刻な声に、リーファは返事に困ってうろつろと視線をさまよわせた。茶化してごまかせる雰囲気ではないのだが、あつという間のことで怖がり損ねてしまったのだ。結局、曖昧な口調で謝るし

かなかった。

「ごめん、ちょっと焦り過ぎた。今度から気をつけるよ」

「出来れば危険を冒す前に、誰かに相談して貰いたいものですね」

手厳しく言ったのは、セラムだった。リーファは命の恩人相手に反論もできず、ごもつとも、と身を縮こまらせる。冷静に考えていれば、年配の学長が自力で木登りをしたわけはなく、何らかの安全な手段を用いたのだと気付いた筈だ。とんでもない爺さんだ、などと呆れていた己が迂闊だったのである。リーファはひとまず反省した後で、セラムがここにいる理由を察して顔を上げた。

「そうか、学長は自分で登ったんじゃないかと、あんたの魔術でなんとかしてもらったわけだな？　それであんたがここにいるのか。学長の行方を調べるために」

もう気分を切り替えてしまったリーファに、セラムは眉を寄せたが、小言を追加するのは諦めて補足説明した。

「ええ。あなたの試験問題を隠すのを手伝いましたのでね。何か手掛かりになるのではないかと、取りに来たんです」

「それならもう見付けたよ。どっかに飛んでつまったけど、あの塔を示してた。窓に何かが動くのが見えたから、あそこにいるんだと思う」

リーファは木の上から見た塔を指さし、窓があるのを確かめた。

シンハがうなずき、ディナルが部下を連れて走りだす。リーファも立ち上がるうとしたが、

「あなたはまだ休んでいなさい」

セラムの言葉で押さえつけられてしまった。

「肩は外れていたし、足も骨にヒビが入っていたんですよ。首と背骨が無事だったのは、運が良かっただけです。いくらあなたが身輕でも……」

「分かった、悪かったよ、ごめん謝るスミマセンもうしません」

小言を遮って言い、リーファは降参のしるしに両手を上げた。シンハが背後で失笑する。リーファはそれを振り返り、おどけて眉を

上げた。

「国王陛下を椅子代わりにしちまって、悪いね」

「構わんさ。セLEMが治療はしてくれたが、しばらく安静にしていた方がいい。治療術は体に負担がかかるからな」

「……それってつまり、治ってんのか、治ってないのか、どっちだい」

リーファが素朴な疑問を口にする、シンハは声を立てて笑いだし、魔術の権威であらせられる御方は渋い顔になった。セLEMはその表情をごまかすように塔を振り仰ぎ、事態の行方を見守っている風情を装う。リーファも彼の視線を追い、それからふと不安になってシンハを見た。

「あの猫背の男を捕まえちまっていいのかい？ 泳がせて本体を捕まえるって言うてたのに、こんな派手に捕り物したら、親玉にもバレルだろ」

「いいや」シンハはにやつとした。「俺たちは、学長を探しに来ただけだからな」

含みのある声が終わるか終わらぬか。塔の窓が開かれ、警備隊員が顔を出した。

「学長を見付けましたよ、陛下！」

「他に誰かいたか？」

シンハが大声で問うと、いいえ、との返事。それを聞いてシンハは満足げにうなずき、ゆっくり立ち上がった。

「よし、じゃあ俺たちも行くか」

腕を支えられながら、リーファは目をぱちくりさせて、よたよた歩きだす。自分の足でなくなったように、うまく動かない。心配になってセLEMを見ると、相手は苦笑した。

「じきに元通りになりますよ。少しの間だけです」

「そうか、良かった。仮にも学院長が失敗したんならヤバイだろ、と思ってたんだ」

九章 探し物発見(2)

塔のてっぺんに辿り着く頃には、リーファの足はちゃんと自身を支えられるようになっていた。狭い階段を上り詰めた先にある部屋は、埃っぽいガラクタ置き場になっている。

臙脂色の制服に囲まれて、学長らしき初老の男が腰をさすっており、猫背の男は床に組み伏せられていた。あの大声でのやりとりは、仲間の耳を用心しての演技だったわけだ。

「いやはや。年甲斐もなく、隠れんぼなどするものではありませんな」

学長が苦笑しながら言うのが耳に入り、リーファはそちらを振り向く。と、まともに目が合ってしまった。灰緑の目が数回瞬きし、それから柔らかく細められる。

「なるほど。君が隊長の姪御さんだね」

「義理の、ですが」

リーファは白けた口調で応じ、伯父に一瞥をくれた。あちらさんも苦々しい顔だが、お互い様だ。学長は面白そうな表情をしたが、賢明にもそれ以上は言及しなかった。

「見付けて貰えて助かったよ。昨日、君が問題に取りかかったの知らせを受けて、小生がここに来てみたら……この男がいてね。出て行くように言ったが聞き入れられないもので、それならと、守衛を呼ぼうとしたのが間違いだった。背中を向けた途端に突き倒されて、後は真っ暗さ。いやまったく、おかげで久々にたっぷり眠れたよ」

皮肉っぽく言った学長の視線の先で、猫背の男が顔を床に押し付けられている。リーファは眉を寄せ、拘束している隊員に「なあ」と声をかけた。

「そこまで手荒にする必要ないだろ？ 少し緩めてやれよ」

「ほう、お仲間には優しいんだな」

即座にディナルが厭味をくれる。リーファは辛抱強く冷静な口調

を作った。

「顔に痣がついていたら、無事に警備隊の手を逃れたってことにはならないでしょう。仲間に連絡を取らせるのなら、見た目に分かる痕を残すのはまずいと思いますが」

ディナルがぐつと詰まり、シンハが微かに笑みを浮かべる。ディナルが舌打ちして手を振ると、隊員は拘束の手を緩め、男を引き起こして床に座らせた。男はおどおどした目を一同の上に見せ、リーファのところでそれを止めた。

「やっぱりあんた、本物の警備隊員だったんだな。女がいるわけないと思ったのに……」

「あー、今はまだ本物じゃないんだ。試験中でね」

リーファは肩を竦め、相手の前にしゃがんだ。不可解な顔をした男と向き合い、リーファは上の方から漂う本職たちの不機嫌な気配を感じつつ、話を続ける。

「実はオレ、昔はコソ泥だったんでね。心を入れ替えたつてのに信じて貰えなくて、試されてるってところかな。あ、そうそう、オレはリーファ。あんたは？」

「……トニス」

なんとなく流されるままに名乗り、彼、トニスはさらに身を縮こまらせた。リーファは相手の怯えた様子を見て取り、ちよつと考えながらシンハを振り返った。

「なあ、シンハ、こいつが協力してくれたら、いっちょ気前よく恩赦でも出してやってくれねえかな？ たまには王様らしい事するのも、悪くないだろ」

リーファの台詞にトニスがぎょつとなり、シンハは苦虫を噛み潰した。何人かが失笑し、ごまかすように身じろぎする。

「人聞きの悪い事を言うな」シンハが唸った。「ついでに教えておいてやるが、恩赦というのは罪の確定した者に対して出すものだ」
「へえ、勉強になったよ」

リーファはおどけて言い、「だってさ」とトニスを振り返る。話

の流れが見えずに困惑しているトニスに、リーファは噛み砕いて説明した。

「つまり、あんたについてはまだ何も、罪とか罰とか決まってない、ってことさ。あんたの態度次第によっちゃ見逃してもいい、っていうありがたーい仰せだよ」

トニスが目を丸くしてシンハを見上げる。後ろからディナルが棘々しく言った。

「陛下。警備隊の仕事を邪魔せんで頂きたいものですな。このような小悪党に甘い顔をする必要などありませんぞ」

「出来れば俺も邪魔したくはないさ。しかし今回は塩だけでなく、背後に男爵の不穏な動きもある。この街だけの問題じゃない。ちょっとばかり獲物が大きすぎたな」

シンハはいかにもまっとうな意見のように装った皮肉を返し、俺のせいじゃない、と言わんばかりに肩を竦めた。それから彼はトニスに向かって、いつもの調子で話しかけた。

「ファロス男爵に義理立てする理由がないのなら、こちらに協力した方が得だぞ。どうする？ まあ、実質的にはほとんど選択の余地はないがな」

「……………な」

答えかけたトニスの声が裏返った。彼は口をパクパクさせ、奥深い緑の眸から逃れようとしてうつむき、次いで上目遣いにリーファを見る。視線で縋りつかれたリーファは、同情的な苦笑を返した。怖がる必要はない、と言ってやりたかったが、それが何の慰めにもならないことは、彼女にもよく分かっていた。

シンハがその身にまとうている特有の空気は、己の悪事や卑小さを意識している者にとっては、容赦ない威力を持つのだ。彼の前に出ると、すべてを暴かれるように感じられる。それゆえ、胸を張って見せられる己の姿がどこにも見付けられない時、人は彼のまなざしに耐えかねてうつむくのだ。

（ま、こいつにも罪悪感がちゃんとあるって証拠だよな）

この様子なら、裏切られる心配はないだろう。リーファはトニスの肩をぽんと叩き、元氣付けるように言った。

「あんたも、今までどのぐらい密売にかかわってきたのか知らないけどさ、ちゃんと清算して、きれいな体で表通りを歩きたいだろ？」

その言葉は、まさに今トニスを支配している望みを言い当てたようだった。トニスは激しく首を縦に振り、餓^{かう}えたように「何をすればいいんで？」と身を乗り出した。

リーファはにっこりしてシンハとディナルを振り返った。ディナルはむっとりしたままシンハに向かって、どうぞ、と渋々うなずく。シンハはちらつとおどけた笑みを閃かせてから、トニスに向き直った。

「よし、次の取引の予定は？」

「い、今のところは何も……」途端にトニスは小声になる。

「取引の日時や場所は誰が決めるんだ？」

「知らねえ、です。その、多分、偉いさんだと思いやすけど、薔薇の手入れが合図になって。あつしはそれを見るまで、なんにも知らされねえから」

ぼそぼそとトニスが説明したところによると、ファロス男爵邸の薔薇園は、どこを手入れするかによって塩の取引を合図しているのだと言う。白薔薇のところは園丁がいたら、塩が入るというし、初めてリーファがトニスを見た時がそうだった。トニスはそれを見て、実質的に密売を取り仕切るディコンという男に伝える。そしてディコンの指示に従って荷を受け取りに行ったり、取引の場所を探したり、余計な者が近付かぬよう見張ったりしていたらしい。

「要するに一番捕まる危険が高い仕事を、肝心のところは何も知らされずにやらされてたって事じゃないか。いいように使われて、危ねえなあ、おい」

リーファが呆れる。トニスはしゅんとうなだれ、言い返さなかった。

船着き場へは塩を受け取りに来ていたのだが、リーファの姿を見

て露見したと早合点し、船をそのまま出発させた。そして下流の町で塩を下ろし、密かに王都へ戻って職人街の空き家へ運び込んだ後、小売商に卸したわけである。

「じゃあ、劇場街にいたのは？」

リーファが問うと、トニスはぽかんとし、なんだ、とばかり横柄な態度になった。

「あつしを尾けてたんじゃなかったのかい。てつきりバレたもんだと思ったのに」

「偶然だよ。けどま、悪いこた出来ないって証拠だと思いな。で、なんでだい？」

「上から連絡があつてよ……警備隊の目が厳しいってんで、今回の荷は半分ぐらい、他の街で売ることになったんだ。それで、旅芸人の一座に売人が何人か潜り込んで、塩を運び出したのさ」

「それは確か、二日前だな」シンハがつぶやいた。「売った金はどうしているんだ？ 誰かに渡すんだろっ」

「へえ、さようで」

またトニスは縮こまる。忙しいことだ。

「あつしの扱った分は、もうアイコンが持つてつちまいやした。けど、外に出た連中が戻ってきたら、回収することになってやす」

「いつ？」とシンハ。

「分かりやせん。けど、今までの感じから言えば、明後日ぐれえには合図が出ると思いやす。あの……あつしは、どうすればよろしいんで？」

早く解放されたいらしく、トニスは結論を急かした。シンハとデイナルは小声でひそひそと相談を始める。シンハの注視から逃れられただけで、トニスはほっと息をついた。

その間に、学長がリーファの傍らにやってきた。

「リーファ君」

君、などと呼びかけられたのは初めてで、リーファは咄嗟に自分のことだと分ならず、目をぱちくりさせた。一拍置いて気付き、慌

てて立ち上がる。姿勢を正した彼女に、学長は一枚の紙を差し出した。

「よくここを見付けてくれたね。おめでとう、合格だ」

リーファは中途半端な表情でそれを受け取り、広げて中身を確認めた。彼女があまり喜ばないので、学長は首を傾げた。

「どうかしたかね？」

「いえ、その……本当のところ、セラムがいなかったら、ここまで来られなかったんです。木のてっぺんから落ちてしまったんで」

きまり悪げな告白に、学長はぽかんとし、次いで驚きに目をむいた。

「大丈夫なのかね？」

「はい、治療はして貰いましたから。でも……だから、本当はこれを貰う資格はないんです。焦って無茶をして、下手したら死んでいたかもしれません」

「その可能性は低いだろう」

口を挟んだのは、ディナルと話していたはずのシンハだった。リーファは即座に抗議すべく振り返った。あれだけ目撃者がいる前での失態にもかかわらず、それを国王の言葉ひとつで、なかった事にしようなどとは、横車を通すにもほどがある。

だがシンハは手ぶりで彼女を黙らせ、真顔で続けた。

「学院の守衛が俺たちより先にお前の転落に気付いて、助けを呼びに行こうとしていた。あの状況なら、相当運が悪くない限り命は助かるさ」

「死ななきゃいいって問題じゃねえだろ？」リーは言い返した。「オレだって合格証は欲しいよ、でも不正をしてまで警備隊の肩書が欲しいわけじゃない」

「心配するな」

そう言っただけでシンハは、にこりともにやりともつかない、微妙な笑みを浮かべた。

「合格の条件は、『試験官が警備隊員に相応しいと認めること』だ。

失敗したかしくなかったかは、必ずしも問題じゃない。本職の警備隊員だってしくじる時はあるんだ」

「そりゃ、そうだけどさ……」

リーファはもぐもぐ言い、どうしたものか決めかねて、手の中の合格証を見下ろした。学長がその肩をぽんと叩く。

「とっておきたまえ。君のその公明正大な態度は、警備隊員たるに相応しい。いや、いつそ学院に来てはどうかね？」

途端にディナルが、聞こえよがしに鼻を鳴らす。リーファはそれを無視し、苦笑して答えた。

「やめときます。今から山ほど法令だの判例だのを覚える自信はありませんし、何より、早く……一人前になりたいので」

「そつかい、残念だな」

社交辞令でなく惜しんでいるのが分かる口調だけに、リーファは照れ臭いやら申し訳ないやらでどぎまぎした。そして、話題をそらせようとわざとらしく周囲を見回す。

「そう言えば、この部屋は何なんですか？」

「よくぞ訊いてくれた」途端に学長は得意げに胸を反らせた。「この部屋は学院創立以来の数々の誉れが収められているのだよ。歴代の王から賜った褒賞、表彰の類に、学院の卒業生が授与された勲章も、いくつか遺贈されている。それだけでなく、裁判官として高名であった教授に寄せられた感謝の手紙などもね」

得々と語っていた学長は、そこでふと、肩を落とした。

「もつとも、今では小生が年に数回見に来るぐらいで、誰もこの薄暗い部屋に見向きはせんのだが」

その言葉に誰かがふきだした。皆が意外そうに声の主を見る。トニスは注目を集めてばつが悪そうに、しかし笑いたいのを隠し切れない表情で言った。

「あつしらはねぐらにしてやすがね。ここは夏は涼しいし、冬でもそこそこのぎやすい。その上、滅多に人も来ねえしで、ありがたいんださあ」

「む……君、そもそもどこから、この学院に入り込んだのかね」

学長は厳しい表情になったが、トニスは首を竦めて答えない。シンハが苦笑した。

「学生たちでさえ、しょっちゅう抜け出しては酒場や菓子屋にたむろしているんだ。こういう類の人間ならたやすく入れるさ。まあ、その辺はいずれ詳しく聞かせて貰うんだな。今はひとまず、自分の家に帰って貰おう」

十章 下町の小火騒ぎ

十章

しばらく後、トニスは新市街にある彼のねぐらに帰された。何食わぬ顔で今まで通りに指示を受け、その内容を警備隊の方に流せ、と言い含められて。

もちろん、それで放免されたわけではない。とぼとぼ歩く彼の後ろから、フードつきの外套で顔を隠した人物がついて行く。臙脂のダブレットを脱ぎ、みすばらしい古着に着替えたリーファだ。すりきれて脂じみた襟から漂う悪臭に、顔をしかめている。垢や汚れのしみついたぼろ着も、足に合わない靴も、かつて馴染んだものだとは言え、二年も離れていた後で旧交を温めたい相手ではない。

「お目付役も楽しやねえや……」

ぼそりと独りごち、リーファはため息をついた。

最初はディナルが、警備隊の誰かを付ける、と言い張ったのだ。しかしあいにく、職業を悟られず目立たぬよう尾行の出来る隊員はおらず、やむなくリーファが任命されたのである。セラムが加護の術をかけてくれたが、それ以外には何も特別な装備があるでなし。

（用心、用心）

自分に言い聞かせながら、リーファは昔の勘を呼び戻しつつ歩き続けた。

新市街は、王都の人口が増えて旧市壁の内側に住まいを得られなくなった人々が、勝手気ままに建てた家々から成っている。元の街道 今は大通り に近い場所は、比較的裕福な者が住み、生業も旧市街の市民と大差ないが、そこから離れてシャーディン河に近付くほどに、建物はみすばらしく、流れる空気も不穏なものに変わって行く。

とは言え、トニスが住んでいるのは、荒れた地区ではなかった。

貧しい者が多いのは確かだが、つましいながらもまっとうな暮らしが営まれている。猥雑な下町といった雰囲気だ。

「よう、トニス。お帰り」

笑顔で声をかける者もいる。リーファはなるべく人目につかないよう、この界限を知り尽くした浮浪者を装って、ゆっくり歩き続けた。

そうこうする内に辿り着いたトニスの家は、こぢんまりとした漆喰塗りの建物だった。元は下宿屋か商店だったようだが、今はすっかり傷んでいる。トニス以外にも多くの住民が、ささやかな屋根を分かち合っているようだった。

子供たちの騒がしい声、母親が叱る声、酔っ払いの下手な歌。トニスが建て付けの悪い木戸をくぐると、甲高い少女の声がそれを出迎えた。

「あつ、父ちゃん、お帰りい」

「帰ったかい、宿六が」女の声が続く。「まったく、どこほついてたんだい。ちゃんと稼いで来たんだろうね？」

怒った口調ではあったが、ほんのりと情愛を感じさせる声だ。リーファは少しむず痒い気分になって、家の裏手の路地に入った。壁に背中をつけて座り込み、浮浪者らしく影と一体化する。

トニスは元々商店の雑役夫だったのだが、店の経営が思わしくなくなった折に解雇され、その後様々な職を転々としたという。伝言配達から蠟燭売り、柁担ぎに船着き場の荷運び、何もなければ物乞いもした。そうしてたまたまディコンという中継役と出会い、悪事の片棒を担ぐはめになったのだ。本人は、神に誓って、初めは何をやらされているのか分からなかった、と言っている。

家族には、金持ちの旦那の使い走りをしている、と説明してあるらしい。妻も子供たちも、彼の仕事にさして興味があるようではなかった。

壁越しに家族の会話を聞きながら、リーファは無意識に親指の爪を噛んでいた。

（旅芸人に紛れた売人が外に出たのが一昨日。トニスは多分あの後すぐに、オレから逃げようとして学院に隠れたんだろうから、丸二日行方をくらましたことになる。もしトニスが重要な駒と思われるなら、上の連中も、変だと気付いてるかも知れない）

とすれば、この家が見張られている可能性もある。歩いてきた限りでは、それらしい人影には気付かなかったが、近隣の家から監視されていたらリーファにも分からない。

と、不意にひんやりした風が足元に流れ込み、リーファは身震いして起き上がった。頭上を仰ぐと、いつの間にか空は灰色の雲に閉ざされている。まずいな、と眉を寄せると同時に、ぽつりと小さな滴が頬に当たった。

「うわ、最悪」

ひとつ、ふたつと地面に丸い染みがつき、瞬く間にその数が増え、世界の色を暗く変えて行く。あちこちで慌てて鎧戸を閉める音が響いた。路地の左右の家からは、わずかばかり庇が出ているが、ほとんど役には立たない。リーファは少しでも濡れないように、立ち上がって壁にへばりついた。

「……やれやれ」

今頃ディナル隊長は、姪っ子の難儀を思って笑み崩れていることだろう。自分はちゃんとした屋根の下で、温かい紅茶でも飲みながら。

自分で思い浮かべた図に腹が立ち、リーファは「くそ」と小声で罵った。同時に、誰かが小さく舌打ちする音が聞こえた気がして、リーファはきよきよとした。すぐ近くに、人がいる。壁の向こうからではないし、ましてや反対側の建物の中からでもない。

（近くに潜んでる奴が、ほかにもいるのか……？）

神経を研ぎ澄まし、気配を探る。だがちょうどその時、木戸の開く音がして、家から人が出てきた。慌ててリーファは素知らぬふりをしたが、何のことはない、トニスだった。

「おい、あんた」

声をかけられ、リーファは愕然として振り返った。何考えてんだ、と言おうとして口を開けたが、相手の親切そうな顔を見ると罵声を投げつけられず、そのまま口をつぐむ。

「そんなとこじゃ、雨宿りになんねえだろ。入んなよ」

「……………」

断るのもかえって怪しい。リーファはこちらを窺う視線を意識しつつ、小声でぼそぼそ礼を言って、浮浪者らしく疑り深い様子でトニスの後についていった。

家の中は乾いて暖かく、リーファはほっと息をついた。

「誰だい、そいつは」

女が剣呑な声を寄越す。リーファがフードの下からちらりと見ると、大きな腹をした赤毛の女だった。トニスが苦笑して肩を竦めると、帰って来る時に、その路地に転がってるのを見つけたんだ。雨に濡れてあそこにくたばられちゃ、たまんねえからよ」

「そりゃ、そうだけどさ」

女は不満そうに応じ、やれやれとため息をついて、リーファに向き直った。

「言つとくけど、雨がやんだらすぐ出てってもらうよ。食べ物も寝床も、うちには余分なんかないからね！」

きつい口調で言い渡され、リーファは黙っておどおどとうなずく。そして、邪魔にならないように隅の壁際でうずくまった。

幼い少女が、古着で作った人形を手に、一人でままごとをしている。もう少し年長の少女は母親の手ほどきを受けながら糸車を回し、階上からは何やらどたばた暴れる音が響く。

騒々しいが、しかし、平和な世界だ。リーファの生まれ育った環境も、過密状態と騒音とは似ていたが、しかしその質は全く異なり、怒声と罵詈雑言、暴力と狂気が渦巻いていた。

リーファはなんとなくいたたまれず、夕食の用意をする一家に背を向けて寝転がった。

そうして、どうやら束の間、まどろんでしまったらしい。誰かが

近付く気配で目を覚ますと同時に、コトン、と何かが頭のそばに置かれた。

「……？」

身を起こすと、スープの皿だった。リーファが見上げると、トニスの妻が口をへの字にして立っていた。

「残りもんだよ。捨てるのももったいないからね」

それだけ言ってくるりと背を向ける。リーファはもそもそと起き上がり、皿を取った。まだ温かい。リーファは女の後ろ姿に向かつて礼を言くと、豆のスープをかきこんだ。

その声で、女はぎよっとしたように振り返った。リーファは慌てて顔を伏せ、スープに没頭しているふりをする。が、無駄だった。女はリーファの頭を両手で挟み、顔を上げさせてまじまじと見つめた。

「あんた、女じゃないか！　なんてこった」

リーファは女の手を振り払い、顔を背けて内心己を呪った。予期せぬ親切に出会って演技を忘れ、普段の声を出してしまうとは。

「ちよいと、どういうわけがあるんだか知らないけど、あんたみたいな娘つこがそんな生活してちゃ駄目だよ。神殿にお行き、そうすりゃ少なくとも保護してもらえるんだからね。いいかい、あんたのためだよ。言うことをお聞き」

女は真剣だ。リーファのことを、家出娘だとも思ったのだろう。浮浪者なら雨の日は神殿に行けば良いことぐらい、知っていて当然だからだ。あえて行かないのは、家畜の群れのように扱われることを嫌う者が、身元を知られたくない家出人や犯罪者だけ。

「あんたが今まで無事だったとしても、それはたまたま、幸運だったただけだよ。分かったね？　今夜は泊めたげるけど、明日になったら絶対に神殿に行くんだよ」

しつこく言われて、リーファは黙ってうなずいた。嫌々ながら、という風情を装うのは忘れなかったが。それでも女は一応ほっとしたらしく、ふうっと息をついた。

「あたしもねえ、親が早くにおつ死んじまつてね。着の身着のまま
で放り出されちまつたクチさ。だけどありがたいよね、この国じゃ、
ちゃんと神殿が面倒みてくれる。お情けにすぎるのは嫌かも知れな
いけど、そんなこと言ってられるのも、若くて病氣してない内だけ
だよ」

リーファはまた、無言でうなずいた。女はその沈黙に不服そうな
表情を見せたが、それ以上は説教せず、「皿は桶に入れとくんだよ」
とだけ言って背を向けた。

その夜は寝付けなかった。堅い床に毛布一枚敷かず横たわって
いるせい、ではない。そこかしこから聞こえるいびきや歯ぎしり、
ネズミの足音のせいでもない。

神経が妙に張りつめていた。気配のひとつひとつ、微かな物音に
も敏感になっている。

（あれは何だったんだ……？）

トニスに呼ばれて正体をつかみ損ねた、誰かの気配。それが不安
をかきたてていた。外出した後で、戸締まりや火の始末をきちんと
確かめて来なかった、と思い出した時のようだ。引き返したい、時
間を巻き戻して確認したい、という焦燥。

うなじの産毛がチリチリと焼けるような感覚に、リーファは我慢
出来ず起き上がった。その瞬間、不安の正体を悟った。

（きな臭い！？）

はつきりと煙たいほどではない。だが、誰かが火を起こそうとし
ている匂いだ。湿気でうまく着火しない時の、微かだが明らかな匂
い。

リーファは素早く静かに立ち上がり、物音に耳を澄ませた。戸口
も窓もしっかりつかい棒がしてある。屋内に侵入者があつたはず
はない。じつと息を殺していると、裏口の方で微かに異質な物音が
聞こえた。リーファは猫のようにそつと一步、踏み出す。

（この格好で、かえって良かったな）

剣や剣帯の金具はもちろん、飾りボタンも音を立てる。ぼろをまとった今なら、ずっと静かに動くことができた。

リーファは抜き足差し足で台所に入ったが、そこで、灰をかぶせたかまどのそばで眠る誰かにつまずきそうになった。何しろ初めて入る家の中で、しかも明かりはないのである。きわどいところで避けると、悟られなかったかと緊張して、再び気配を探る。じきに外でせわしなく火打ち石を鳴らす音が聞こえ、ホッとした。次いで、
(安心して場合じゃねえ！)

リーファはぎくりと身を硬くする。火打ち石の音。それにこの匂い。誰かがこの家に火をつけようとしているのだ。

悠長に様子を窺っている時ではなかった。リーファは木戸に駆け寄り、つかい棒を乱暴に外して飛び出した。直後、目の前に炎が立ち上がり、光に目を射られて立ち竦む。

怯んだのは一瞬だけだったが、手遅れになるには充分だった。リーファを驚かせた松明が、持っていた人間の手を離れ、台所に投げ込まれる。

「火事だッ！」

大声で叫びながら、リーファは放火魔に飛びかかった。相手が上げた罵りの声で男だと判ったが、顔を確かめる余裕もない。振りほどこうとする腕に、思い切り噛み付く。男がギャツと叫び、もう一方の手をさつと腰にやった。

反射的にリーファは男を離し、飛びすさる。ナイフのきらめきが空を切った。男が身を翻す。リーファは素早く後ろ襟を捕え、引き戻した。

再び刃が舞う。リーファは身を沈めてかわし、さつと手を伸ばして男の顔に爪を立て、ガリツと引っ掻いた。だが、そこまでだった。三度目に攻撃をかわした時には数歩の距離を空けられており、逃げる男を捕えるには、もう間に合わなかった。

濡れた路面に炎が映っている。リーファは追跡を諦め、トニスの家に駆け戻った。その時にはもう住人が起き出しており、上を下へ

の大騒動になっていた。

「水だ、水ッ！　ぐずぐずすんじゃねえッ！」

「早く外へ出るんだよ！　早く、そろこっち！」

すぐに近隣の家々も窓や戸口が開き、ぞろぞろと人が出てくる。

リーファが驚いている間に、状況を見て取った彼らは、いつせいに動き出した。瞬く間に、桶を持った人々が集まってくる。井戸や貯水槽から人の列がつながり、桶が手から手へと渡されていく。子供たちは外で母親にしがみつき、トニスがその頭を数えて無事を確認していた。

まるで訓練された軍隊のようなその動きに、リーファはただぼかんとしているしかなかった。幸い発見が早かったおかげもあり、火が消し止められるまでに時間はかからなかった。被害も、台所が少し焼けたものの、死人も怪我人もなし。

火の粉ひとつ残さず始末したと確かめられると、今度は消火に当たった人々がわいわいと口々に話し出した。やれ、今度はここか、この間はいつだったか、火事場泥棒はいなかったか、なんでここが狙われたんだか。

助けてくれた人々に、トニスと妻が頭を下げているのを見付け、リーファはそちらへ駆け寄った。

「トニス！」

名前を呼び、腕を掴む。もう他人の振りをしても無駄だ。

「どうやらあんたは見切りをつけられたらしいな。オレは本部に戻って報告してから、あの男を探すよ」

「えっ……おい、行くのか？」

途端にトニスは心細げな顔をした。赤毛の女が訝る目を向けたが、リーファはそれには答えず、トニスの肩を叩いた。

「ああ。どっちにしろ今のオレは丸腰だし、この格好じゃこそこそすることは出来ても、立ち回りには不利だからね。誰か代わりを寄越してもらっよ。心配しなくても、ちよつとの間さ。それに、今はこれだけ人が集まってるんだ。奴らも無茶は出来ないよ」

な、と言ひ聞かせる。横から女が「ちよつと」と口を挟んだ。

「どういつこつたい？　うちの人が何だつて言つのだ」

「ごめん、世話になつて悪いけど、詳しい話はまだ出来ないんだ」

リーファは片手で拝む仕草をして詫びる。まだ女が食つてかかりそんな気配を見せたので、慌ててリーファは話を逸らせた。

「だけどすごいな、あつと言う間に皆が集まつてさ。こんなに素早く火消しが出来るなんて、驚いたよ」

「当たり前だろ」女は呆れつつも、得意げな声で応じた。「この辺はごみごみしてつからね。火が出たら大事だよ。水道もないし、のんびり火消しが来るのを待つてなんかいられやしない。そうでなくとも宿無しがそこから勝手に火を焚くんだからさ。自分らの街は、自分らの手で守らなきゃね」

なるほど、とリーファは感心して、ぐるりを見回す。そろそろぼつぼつと、にわか消防士たちが家に戻り始めていた。寝直すつもりだろう、大欠伸をしている者もいる。

「頼もしいね」

リーファはそう褒めると、じゃ、と適当にごまかして、女にそれ以上追及されない内に逃げ出した。

十一章 犯人逮捕（１）

十一章

警備隊本部に駆け込むと、夜番の隊員が何事かと驚いた顔を上げた。

「人の手配を頼みます」

息を切らせ、リーファはまずそう言った。すぐに隊員の一人が事情を聞こうと近寄り、もう一人が奥へ入る。じきにディナルが寝起きの顔で荒々しく扉を開けて、のしのしと姿を現した。

「逃げられたのか」

そらみる、と言わんばかりのいまいましげな口調。リーファは「はい」と応じ、息を整えてから説明した。

「トニスの家が放火されました。その犯人に逃げられたので、市中に手配をお願いします。暗くて顔は見えませんでした、男で身長はこのぐらい」

と、自分の頭の少し上を手で示す。

「利き腕でない方の腕 多分左だったと思いますが、そつちに噛みついたので、歯型があるはずです。それから顔にも引つ掻き傷が」
言いながらリーファはその仕草をして見せる。隊員の一人が顔をしかめたので、リーファは明かりの下で自分の手を見て、初めて爪に血がついているのに気付いた。うげつ、と思いはしたものの、洗いに行くのは後回しだ。リーファはてきばきと報告を続けた。

「ナイフを持っていました。かなり強く噛み付いたので、ねぐらに帰るか、医者に駆け込んでいる可能性もあります。仲間はいないようでしたが、念のためトニスにも武装した護衛をつけて下さい」

ディナルはむつつりと不機嫌にそれを聞いていたが、話が終わるとすぐに「分かった」とうなずいて、部下たちに指示を出した。流石は腐つても警備隊長である。

必要な指示を出すと、ディナルはリーファに向き直り、石臼で挽くように歯の間から言葉を押し出した。

「貴様はさつさとその格好をなんとかしろ。予備の制服と武器は奥の部屋にある」

リーファは目を丸くしたが、余計な事は言わず、素早く敬礼した。奥の備品室に入って、体に合いそうな制服を引つ張り出し、古着を脱ぎ捨てて着替えだす。ちょうどそこへ隊員の一人が扉を開け、わっ、とうろたえた声を上げて引つ込んだ。リーファは手を止めずに声をかけた。

「気にせず用を済ませて下さい。別に素っ裸ってんじゃないんだから」

もちろん、一般的に言つて女の肌着姿は他人に見せられるものではない。外で隊員が困っているようなので、リーファはやれやれと天を仰いだ。

「本人がいいって言つてんだろ、さつさとしろよ！ つまんねえ事に構つてる場合じゃねえだろが」

ベルトを締めながら彼女が怒鳴ると、やっと決心がついたらしく、隊員が入ってきた。棚から呼び子を取り、リーファ用にもひとつ、机の上に置く。その間も彼は、リーファを視界に入れないよう、不自然な方を向いたままだった。そして結局一言もしゃべらず、そそくさと部屋を出て行く。リーファは口をへの字に曲げ、ひとり肩を竦めた。

なるほど、こういう場面もあると考えれば、女が警備隊に入るのを嫌がられても仕方がない。一部屋余分に用意しなければならぬわけだし、現場を変えとなると、何かと面倒なのだろう。

「要するにためえの腰が重いだけじゃねえか」

けっ、とリーファは小さく毒づいた。憎き熊オヤジの顔を思い浮かべながらきつく靴紐を結び、剣を佩いて外に出ると、当人が待っていた。

「貴様はこつちだ」

顎で呼び付けられ、リーファはしょっぱい顔になったものの、黙って従った。他に十人ばかり隊員がいるところからして、一番手強い場所、つまり総元締め of 屋敷に乗り込むつもりだろう。そこに加えて貰えたことを、評価の証と思わねば。

「どう言つて中に入るつもりですか」

屋敷街を歩きながらリーファが小声で問うと、ディナルはじろりと疎ましげな目をくれたが、それでも渋々返事をした。

「放火犯が付近に逃げ込んだという情報があった、と言えはいい。無理に押し入らんでも、圧力をかけておけば動きがあるはずだ」

ふむ、とリーファはうなずいた。いくら警備隊と言つても、貴族の屋敷に問答無用で立ち入る権限はない。門を閉ざされたらそれまでだ。だが目をつけられたと相手に悟らせてやれば、焦って尻尾を出すだろうから、そこを押さえるつもりらしい。

「じゃあ、この人数は威圧のためでわけだから、一人抜けても大差ありませんね？」

リーファはあれこれと考えを巡らせながら言った。途端に、ディナルだけでなく他の隊員たちも、何をするつもりかと胡散臭げな顔になる。リーファは自分を取り巻くそれらの顔を見回し、肩を竦めて見せた。

「表で騒いでいる間に、裏から逃げられちゃ困りますからね。そつちに回ろつかと思うんですが」

「当然、裏口にも配備する。そのための人数だ」

ディナルが唸ったが、リーファはそれを受け流した。

「いや、私の言う『裏』つてのは、ちよつと別の方面でして」

そのとぼけた言い草に、何人かが失笑し、ディナルは顔を赤くして齒噛みした。束の間の逡巡。それから彼は、

「勝手にしろ！ どっちみち貴様は正規の隊員ではないからな！」

吐き捨てるように言つて、背を向けた。リーファは肩を竦め、他の隊員たちに苦笑を見せてから、誰にともなく言い足す。

「誰か、庭の方も見張っていて下さい。うまく捕まえられたらいい

けど、一足早く逃げ出しているかも知れないんで」

隊員の一人が了解のしるしにうなずくと、リーファは「お願いします」と言い置いて、隊列から離れた。

松明から遠ざかると、辺りはもうすっかり闇に吞まれていた。雨は止んでいたが、月の顔はまだ見えない。屋敷の白壁に並んだ窓のひとつふたつから漏れる明かりが、かろうじて物の輪郭を浮かび上がらせている。

やがてリーファの手が、先日の巡回で目をつけた場所を見付けた。蔓薔薇の絡まり具合で、そこだけ隙間ができて柵を掴めるようになっている。リーファは物音に耳を澄ませ、周囲に動く影がないことを確かめてから、素早く柵をよじ登った。

顔や手を所々棘にひっかかれつつ、内側に降り立つ。芝生が足音を消してくれた。見た目には美しいが、不用心な庭。

（さて、どこから逃げるかな）

ぐるりを見回し、リーファはふむと思索した。初めて屋敷を見た時に考えた侵入方法は、そのまま逃走にも使い得る。だが、相手は今、片腕を負傷しているし、リーファほどには身軽でないかもしれない。とすれば、別の方法を考えるだろう。

（まっとうな出入り口からは逃げられないだろうし……）

警備隊員がいなくても、胡散臭い男が血まみれでうろついているのを屋敷の者に見られたら、騒ぎになって悪事が露見してしまう。

恐らくあの男は、人目につく恐れのない出入り方法を使っているはずだ。

リーファはそこまで考え、ふと耳を澄ませた。真夜中でも絶えることのない水音が、ちよろちよると闇の中を流れていく。

（噴水か……水……待てよ）

はっと気付き、リーファは音の方へと走って行った。庭園の中央にはこれ見よがしに大きな噴水があったが、彼女の目当てはそれではなかった。改めて耳を澄まし、辺りを見回す。噴水の音とは別の、くぐもった水音が聞こえたのだ。

「あつた！」

リーファは口の中で小さくつぶやくと、噴水そばの地面を四角く切り取る細い線に駆け寄った。膝をつき、小さな窪みに手をかけて動かす。ズズツ、と石の板が横滑りし、ぱっくりと暗い穴が現れた。予想通りのものを見付け、リーファは笑みを浮かべた。地下へ続く短い階段の下に黒い闇がたゆたい、時折かぼそい光をチラチラと反射している。下から吹き上げる冷気は、眉をひそめなくなるような臭いを乗せていた。つまり下水道だ。

リーファは屋敷の位置を目測してから、階段を降りて行った。

上水道と違って下水道は異物が溜まりやすい上に、詰まって溢れようものなら大変なことになるので、定期的に人が入って浚渫できるように設計されている。中でもこの水路は、特に広々としていた。まさか、最初から抜け道としての利用を念頭に置いて工事したわけではあるまいが。

当然ながら、中は真つ暗だった。リーファはくるぶしまで水に浸かり、壁に片手を当てて、なるべく音を立てないように気を遣いながら上流へ向かった。

屋敷内にも、下水道への入口がどこかにあるはずだ。貴族なら、うっかり高価な指輪を流してしまつて、下男に取りに行かせる、などという場面もありそうなことだし。

あれこれ考えながら歩いている内に、ずっと先の方から物音が聞こえてきた。それでふと気付くと、薄ぼんやりと辺りが明るくなっている。水路が少し先で曲がっているのが分かり、光はその向こうから射していた。

金属の触れ合う音。何を言っているのかまでは分からないが、野太いかなり声。水面の揺れが微かな波紋となつてリーファの足を洗う。

（どうやら厨房みたいだな。遅くまでご苦労さんなこつた）

大量の洗い物进行处理する流し場は、排水口も大きいのだろう。上の物音までよく聞こえる。ということは、うっかりすればこちらの

足音も聞かれかねない。あれだけ鍋か何かをガタガタ言わせているのだから気付かれはすまいが、リーファは用心して一旦歩みを止め、様子を窺った。

話し声が少し遠のく。水面の揺れもおさまり、じきにシンとした静寂が戻って来た。それからさらに数呼吸の間を置き、リーファが動き出そうとしたまさにその時、同じように考えた誰かが水音を立てた。

リーファは息を飲み、素早く壁に張りついた。パシャパシャ、と小さいながらも間違えようのない足音が、束の間だけ反響を変え、移動してくる。厨房の洗い場を通して、誰かがこちらへ向かっているのだ。

誰が　とは、考えるまでもない。あの男だ。ほかに誰がいる？
(どうしよう)

その時になってリーファは、自分があの男と出くわしたらどうするか、ろくに考えていなかったことに気付いて青ざめた。

逃げられる前に捕まえばいい、とだけ思っていたが、ここで暴れて騒ぎを起こすのは得策でない。屋敷の者に聞かれて出口で待ち伏せされたら、許可なく侵入したリーファの方が立場は不利だ。しかも警備隊の制服を着ているとくれば、どんな結果になるか。リーファはぞつとなった。あの太った男爵が、自分の死体をディナルの前に投げ出して、警備隊はいつから泥棒集団になったのか、となる場面が目に見えかねない。

ピシャ、パシャ……しぶきを跳ね上げる音が近付き、さざ波がリーファの足を洗う。リーファは焦るあまり、喚きだしたい衝動に駆られた。落ち着け、よく考えろ。自分に言い聞かせて、早鐘を打つ心臓をなだめる。

(駄目だ、警備隊員だと見破られるわけにはいかない)

警備隊員として相手を逮捕することは、不可能だ。自分が危険だとか、警備隊にとって不都合だとかいうだけでなく、ほかにもまづい点がある。

この街の警備隊は、よほどの事がない限り人を殺さない。たとえ極悪人でも、裁きを受けさせる為には生かして捕えねばならないからだ。それゆえ、悪人にはなめられやすい。仮にうまく捕えられても、逆にこちらの不正を攻撃されてしまうだろう。

では、どうすればいい？ 一撃で失神させるか。だが失敗したら？

（一か八か、騙してみよう。悪党の真似ならお手の物だしな）

リーファは静かにゆっくりと剣を抜き、気配を殺して待ち受けた。相手は一度、洗い場から射す仄かな明かりに目を晒している。まだ暗闇に慣れていないだろう。

緊張が高まる。水音の反響が変わり、やがてついに、角を曲がって人影が現れた。

十一章 犯人逮捕（2）

暗がりに入って安心したらしく、男はほっと大きく息をついて立ち止まった。その油断を突き、リーファは素早く躍りかかって背後をとり、喉元に剣を滑り込ませた。片手は男の左腕を取り、先刻噛み付いてやった辺りを強く掴む。

「！」

男が押し殺した悲鳴を漏らす。抵抗しようとしたのも一瞬だけで、彼はすぐに右手を挙げた。

「ま……待て、落ち着け。話を……」

「振り向くな」

リーファは低くどすのきいた声を作って命じた。元からかすれ気味の低い声なので、あまり苦勞せずにすむのありがたい。

男の喉仏が、ごくりと上下した。リーファは後ろから男の耳元に口を寄せて囁く。

「貴様がディコンか」

分かっているが確認するだけ、という声音で問うと、男は一拍置いてうなずいた。ごまかしきれないと踏んだらしい。まずは成功。リーファは安堵を隠し、さらに続けた。

「随分と荒稼ぎをしてくれたな」

「な……何の事だ」

「ほかのブツにしときゃあ良かったんだよ。こつもシマを荒らされちゃ、うちも黙って見てるわけにやいかねえ」

刃をちよいと動かし、脅しをかける。ディコンは息を飲み、ガタ震えだした。どうやら、狙った通りの誤解をしてくれたようだ。リーファはほくそ笑んだ。

「悪く思ふなよ」

「ま、待ってくれ！ 頼む、俺は何も……、分かった、手を引く！手を引くよ！ だから勘弁してくれ、命だけは」

ディコンは早口でまくし立てた。リーファは「ふん」と気のない声を洩らしてから、ふと思いついたように装って交渉に入った。

「そうだな、ひとりひとり片付けるのも面倒くせえ。貴様が出るとこに出て、男爵を片付ける手間を省いてくれるってんなら、この場は見逃してやつてもいいが」

そこまで言い、ディコンの気配が露骨に安堵したので、リーファは「いや、やめた」と刃を喉に押し当てた。

「下っ端じゃ役に立たねえな。やっぱり……」

「やめろって！ 帳簿の在処も取引相手も知ってる、何でも吐くから助けてくれ！」

ディコンの上ずった叫びが、水道の壁に反響する。リーファは厨房の物音に耳を澄ませて、気付かれていないことを確かめてから、ゆっくり腕を離れた。刃はまだ当てたまま、すっと一歩下がる。

「よし……そのまま歩け。ゆっくりだぞ、切れちまったら困るだろう。振り向くなよ」

「わ、分かってるよ」

ディコンはうなずくと、そろそろと歩きだした。リーファも影のようにその後からついていく。庭の噴水下に着くと、リーファは「上げれ」と短く命令した。

「ちょうどいい具合に、外に警備隊がいる。とっとと行け」

ゆっくり喉元から刃を離してやると、ディコンは腰が抜けたのか、ふらっと前にのめって階段に両手をついた。リーファは暗がり身を隠したまま、用心深くそれを見守る。

「なあ、ひとつ、教えてくれ。あんた一体、どこの者なんだ」

ディコンは四つん這いのまま、つぶやくように問うた。リーファは思わず苦笑をこぼしかけ、慌てて口元を引き締めた。答えようのない質問は無視し、どうしても解釈できるように平坦な声音で応じた。

「忘れるなよ、貴様を見ているのは一人だけじゃない……」

ささやくような語尾が、不吉な響きを残して闇に消える。ディコ

ンは憔悴した顔で振り向いたが、もちろんその時には、リーファは暗い水路の奥へと姿を消していた。

公的には、リーファには何の手柄も認められなかった。

ディナル隊長率いる警備隊が放火犯を捜索中、たまたまその当人がふらふらしている所を発見。本部で取り調べたところ、出るわ出るわのホコリだらけ。

折よく『ミサゴ』とその乗組員を捕えられた事もあり、芋づる式に塩の密売から男爵のたくらみまでが明るみに出て、ディコンを含む十数人の関係者が王都からの終身追放となった。

トニスについては情状酌量され、更生の余地は充分あるというところで、救済をかねた軽い刑罰で済まされた。すなわち道路掃除である。

一連の裁判を経て、最終的に、総元締めであるファロス男爵家は取り潰しとなった。

男爵本人は絞首刑に処するところを、家族に免じて助命。財産をすべて没収した上で北方の小さな土地に移り住ませ、終生、その地を離れることを禁じた。

「まさか、あいつ一人からここまで引き出せるとはねえ」

リーファはワインのグラスを片手に、ご機嫌な声で言った。

すべての裁判が終わって数日後、シンハが約束通り御馳走を用意してくれたのだ。新鮮なチーズを使ったサラダや子羊の香草焼きなど、まるで祭日のような献立。同席しているのはシンハとロトだけで、気を遣わねばならない相手がいないのが嬉しかった。

シンハが向かいの席からワインのお代わりを注ぎ、にやりとした。「お前が使った魔法を、ぜひとも知りたいもんだな。ディナルが表面になつてたぞ。ディコンの奴、気の毒なほど怯えて、一日も早く裁判を終わらせてくれ、と泣きついたらしい。訊かぬはしからべらべらしゃべりまくって、調書を取るのが追いつかなかったとか」

「魔法なんてもんじゃねえよ。ちよっと脅かしてやっただけさ。王

都にはもーっと怖くて腹黒い大物がいるんだぞ、シマを荒らしたら命の保証はしないぞー、ってね」

リーファは鼻高々に答えて、料理を口に運ぶ。その様子に、ロトが苦笑した。

「よっぽど真に迫った演技をしたようだね？」

「まあね」

ぐふ、とリーファは堪え切れずにふきだした。ひとしきりくすくす笑ってから、下水道でのやりとりをかいつまんで説明し、それからとうとう、げらげら笑い出した。

「それでさ、やっぱりそれだけじゃ弱いだろ？ だから後で、駄目押ししてやったんだ。夜中に留置所に忍び込んで、あいつの枕元に意味深な合図を残してやったり、取り調べされてる部屋の窓から、あいつにだけ見えるようにちらつと人影を見せたり。いやあ、てきめんだね！ 面白えぐらい青くなつてやがんの」

あはは、と大笑いするリーファに、シンハとロトは複雑な顔を見合わせた。

「……おまえ、それは外では言うなよ」

釘を刺したシンハに、リーファは「わあかつてるよあ」と浮かれ口調で応じる。そろそろ頭にブドウ色の靄がかかってきたようだ。

「陛下、リーが本格的に酔っ払う前に、渡しておいた方がいいんじゃないませんか」

ロトが苦笑まじりに言い、シンハに目配せする。リーファがきよんとんとしている前で、シンハは一枚の紙をテーブルの上に置いた。

「ごたごたしていて遅くなったが、六番隊、新市街の試験官からの合格証だ。いち早く放火に気付いた功を認めて、ということだ」

リーファは曖昧な表情でグラスを置き、紙片を受け取って開いた。紙質もインクの色も、描かれている模様も同じ。間違いなく合格証だ。これで六枚。今までに手に入れたものを頭の中でつなぎ合わせてみると、なんとなくその正体が見えてきた。

「最後の一枚は、フィアナかセレムが持つてるんだろ。違つかい？」

「ご明察」シンハが笑った。「明日あたり、セレムのところに行つて来い。もう試験の必要もないだろうが、一応な」

「やっぱりな。三枚ぐらい手に入れた辺りで、どこをどうつなげても知ってる模様や文字になりそうにないって気が付いて、おかしいなと思ったんだ。魔術の……あれ、なんていうんだっけ？　なんかぐねぐね色々描く模様だろ、これ」

「魔法円だ。つなぎあわせてすぐ正体がばれるようじゃ、集める楽しみがないだろう？」

シンハがとぼけて言う。リーファは「まあね」と苦笑し、合格証を腰の袋にしまった。

「それで、『もう試験の必要もないだろうが』ってのは？　ディナルのおっさんが、何か言ってきたのかい」

その質問に答えたのは、ロトだった。

「実質的にディコンを捕えたのは、君だからね。トニスを見付けたのは偶然だったにしろ、試験とはかわりのない事柄までよく観察しているという事は、ディナル隊長も認めたよ。君ほど、あー……隠密行動の巧みな警備隊員もいないしね」

言い淀んだ箇所は、ディナルの口から出た時はもつと辛辣な表現だったに違いない。リーファは渋い顔をしたが、あえてそこは突っ込まずにおいた。ロトが苦笑し、肩を竦めて続ける。

「ただ、貴族の屋敷に侵入する、なんていうのは、君が警備隊員ではないからこそ出来たわけで、正式に採用したら君をどう位置付けるか、どのように使うか、頭を悩ますことになりそうだとも言っていたよ」

「へえ、あのおっさんにも一応、悩ますほどの頭があったんだ」

リーファは皮肉で応じ、口をへの字に曲げた。もちろん本気ではないが、こちらら散々けなしまくられているのだから、この程度の陰口は許されて然るべきだろう。

彼女の心情を察し、シンハが思いやるようにしみじみと言った。

「その熊才ヤジと、うまく折り合いをつける術を学ばないとな。長

い付き合いになるぞ」

「……………」

さしものリーファも言い返せず、沈黙する。深いため息をついてから、やおら顔を上げ、ぱくぱく食べ始めた。

「やめたやめた、あんなクソオヤジの話で、せっかくの料理を不味くしちゃ、もつたいたい。シンハ、それ食わねえんだったら貰うぞ」
フォークで指され、シンハは呆れ顔をしたものの、自分の皿をリーファに回してやった。元々彼は、自分が食べるよりも、他人が喜んで食べる姿を見るのが好きなのだ。

「よく食べるねえ」

ロトが感心する。リーファは厭味かと問うように眉を上げたが、彼の表情に羨ましげなものを見て取り、にやりとした。

「誰かさんと違って、胃が丈夫なんでね」

「僕にもその強さがあればと思うよ」

ふう、とため息。二人の会話に、シンハが落ち着かなくなって身じろぎした。そして、何か話題をそらせようとして口を開き……ふと、思いついたように微笑む。

「そうだな。リーならどこで、誰とでも、やっていけるだろう」

「だからって追い出されちゃ困るよ」

リーファは複雑な顔をする。シンハは「そうじゃない」と首を振ったが、それ以上の説明はしなかった。そのまなざしの優しさに、リーファは照れ臭くなってうつむく。

どこで、誰とでも。

ここで、彼らとでも。

そう、本来リーファにとってここは故郷でなく、彼らは見知らぬ異邦人だった。それでも、ちゃんとやって来られた。これからも、やって行けるだろう。

そうした信頼が伝わってきて、リーファは無意味に皿の料理をつつき回した。

長い穏やかな静寂の後、ようやく彼女が口に出せたのは、「うん」

という小さなつぶやきだけだった。

十二章 最後の試験（１）

十二章

「よく来ましたね。待っていましたよ」

銀髪の魔法学院院长は、女生徒たちの憧れのまなざしを集める優雅な微笑で、リーファを出迎えた。と言ってもリーファの目にはこの場合、胡散臭い笑みとしか映らなかったが。

「……なんか、面倒くせえ試験を用意してくれてそうだなあ。本当にやんのかい？ もう必要ないようなもんだって聞いたけど」

「もちろん、やりますよ。こんな機会はめったにありませんからね」
セレムは楽しげに言ってから、真面目な口調になって続けた。

「西方出身のあなたにとって、この街区にある魔法学院や神殿は、あまり身近とは言えない存在でしょう。あちらでは魔術はご法度、宗教は一神教で、教会の活動もこちらの神殿とはかなり違っているそうですからね」

「似たところもあるけどね。違いと言えば、あっちの教会は何かと人に押し付けるのが好きだったし、言うことときかない奴には容赦なくて、なんて言うか……厳しくて口やかましい親みたいだったな」

「そうですか。こちらの人々にとっては、神殿はもつとおおらかな存在ですし、何より魔術も神々も、ともに生活に結び付いています。あなたも警備隊員として街の人々を守るのであれば、その重要性を認識して頂かなくてはね」

「そりゃあ、まあ」

リーファはもぐもぐと口ごもり、頭を掻いた。確かにごもつともし、魔術が便利なものだということも、よく分かっている。理屈では、そうなのだが。

「でも、なんかオレにはさ、神々つてのが……しっくり来ねえんだ。よそ者だからかな。まあ、あっちにいた頃も別に信心深いなんてこ

とはなかったけど」

それでも何となくね、と曖昧に語尾を濁したリーファに、セレムは興味深げな表情を見せたものの、意外にあっさり「なるほど」とうなずいた。

「分かりました、信仰の問題については無理強いも出来ませんしね。神殿を見学して聖十神の像を拝んでらっしゃい、と言うのはやめにしましょう。美術品としても素晴らしいものなんですが」

本気なのか冗談なのか判然としない口調だったが、セレムはやや残念そうに言い、「またの機会に」と付け足した。

「今日のところはまず、あなたの知識を確かめさせて貰います。聖十神の名前ぐらいは、もう覚えているでしょうね？」

「う……た、たぶん」

リーファは自信なさげに答えた。まさかこんなに試験らしい試験をされるとは思わなかったので、事前に予習をして来なかったのだ。失敗した。

「ええっと……まず、太陽神リージアだよな」

レズリア王国の名の由来でもあり、シンハをはじめ国王を守護するといわれる神だ。これだけは、リーファも最初に覚えた。が、あとはかなり怪しげである。十の月にそれぞれの神が対応しているの、暦を思い出せばなんとかなるか、と指折りながら数えて行く。

「生命神サーラスから始まって、次が……あれ？」

二月でもう詰まってしまったので、セレムが失笑した。リーファは赤くなり、他の月から順に埋めていこうと、ぶつぶつぶやく。

「月の女神……は、何月だっけ。今月は確かミュティアつつて春の女神だったよな。先月は……」

しばらくかかって、結局リーファは両手を挙げ、降参した。

「ごめん。まだ全部覚えてねえや。ほら、海とか月とかそういう覚え方はしてるんだけど、名前まではちょっと……」

もごもご言い、上目遣いに顔色を窺う。セレムは「困りましたね」と渋い表情を見せた。こちらを脅かそうとしているばかりでもない

らしい。リーファは縮こまってしまった。

「何もあなたに、信者になれと言っているわけではありませんよ。ただ、私たちの神々について、ちゃんと知識と理解をもって貰いたいのです。でなければ、警備隊員としてやって行くのにも、支障が出ますからね」

「そうかなあ？」

「そうですね。あなたが思う以上に、この国の人々は神々と近い生活を送っているんです。単に事務的な面だけ言っても、暦の祭日を把握していなければ何かと不便でしょう」

「ああ、そういうことが」

リーファは納得してうなずいた。確かに、市民の中にはきっちり何月何日と言わず、何とかの祭日、としか言わない者もいる。それに、大きな祭の時には人出があり、揉め事も生じやすい。警備隊の仕事をしていくのなら、そういった暦の把握は重要だろう。

だが、セレムの言葉にはまだ続きがあった。

「それだけではありません。たとえ警備隊員という肩書があっても、神々に対して不敬な人間が正義を振りかざすことなど、誰も善しとはしませんよ」

「……了解」

返す言葉もなく、リーファは暗い声で応じた。

萎れてしまった彼女を励ますように、セレムは口調を明るいつもりに変えた。

「まあ、暦ぐらいはあなたのことですから、じきに覚えられますよう。神々に対する敬意は……言っただけでどうできるものはありませんしね。この国で暮らしていれば、いずれ感覚として自然に身につくでしょう。神々の名を覚えることは宿題にしておくとして、本題に入りましょうか」

「え？　今のが試験じゃなかったのかよ」

リーファが気抜けすると、セレムは悪戯っぽく微笑んだ。

「試験の一部、ということです。ちょうど今日は神殿でちょっとし

た催しがありますので、見物がてら、参拝者の誘導をして貰おうと思ひまして」

「今日つて、何かお祭りとかあったっけ？」

「いいえ、特別な儀式祭礼というわけではなくて、月に一度の大礼拝です。今月は、あなたも先ほど言ったように、春と美と芸術の女神ミューティアの月ですから、本殿の前の広場で、歌が奉納されるんです。警備隊のお世話になるほどの人出ではないのですが、まあ練習だと思って神官の方々を手伝って下さい」

「ん、分かった。今から？」

「はい、今から私も参りますので」

セラムはにこりとして外出用の上着を羽織る。リーファはおどけて大仰な礼をした。

「お供つかまつります、学院長様」

というわけで、リーファはセラムの後について学院を出ると、神殿へと向かった。王都には街区ごとに小さな神殿があるが、広場に面した大神殿は、国内のすべての神殿を統括するものだけあって、相当な規模である。

聖十神の像がおさめられ、人々が礼拝に訪れる本殿。神官たちが研鑽につとめる講堂、彼らの宿舍。加えて、広大な墓地。

今は、本殿前の広場目指して大勢の人が集まり、神官の誘導に従ってぞろぞろと動いていた。広場の四辺には香炉を持った神官が立ち、煙をくゆらせている。

「話は通してありますから、行つてらっしゃい」

適当なところでセラムに背中を押され、リーファはうなずいて人の波をかきわけ、神官の方へ向かった。臙脂色の制服を見て、向こうはすぐに誰かと気付いたらしい。ほっとしたように笑顔を見せた。「ああ、助かります。あの階段の辺り……見えますか、今、一人だけ立っているんですが、あそこに行つて手伝つて下さい。一人が転ぶと大変ですから、特にお年寄りに気をつけて下さいね」

本殿に続く参道の階段を示され、リーファは「了解」と敬礼すると走りだした。

指定された場所に着くと、既に神官がいるのと反対側の脇に立ち、向かいのやり方を見ながら誘導を始めた。

人波からこぼれて階段の裏に回ろうとする者を元の流れに戻し、手摺りにつかまって一段一段上る年寄りを後続者から守る。幼い子供の場合は、押し潰されたり、はぐれたりしないかとハラハラしながら見守った。

「押さないで！　ここから階段です、足元に気をつけて下さい！」

何度も同じ注意を繰り返し叫び、参拝者の立てる砂埃を吸い込んで咳き込む。臙脂色の制服も、いつの間にか白っぽくなっていった。

（毎月これやってんのか。神官も思ったより大変だな）

喉がいがらくなり、口の中がざらつく。リーファは咳をしながら、向かい側の神官を見やった。まだ若い。こうした仕事は下っ端の受け持ちなのだろう。目が合うと、彼は同情的な顔になり、大丈夫かと問う仕草を見せた。

なんとかね、とリーファが苦笑を返した時、人込みの中から「あれっ」と聞き覚えのある声が飛び出した。驚いてそちらを見ると、トニスが同じく目を丸くして立っていた。

「なんであんたがここに」

二人は同時にそう言い、決まり悪くなつて立ち尽くす。後続の参拝者に押され、トニスは慌てて人波から抜け出し、道の脇にやって来た。赤毛の女はいないが、トニスは幼い娘の手を引いていた。

「元気そうだな。良かった」

リーファが言うと、トニスは皮肉かと疑うように眉を上げたが、すぐに微笑してうなずいた。彼は娘の頭を撫でてから、リーファの目をまっすぐに見た。

「あんたには色々、世話になったね」

「オレは別に何もしてないよ。礼ならシンハに言ってくれ」

深く考えずにリーファが言った途端、トニスはぎよっとなって周

困を見回した。慌ててリーファは言い足す。

「あ、いや、ここには来てないけどさ」

「脅かすなよ……あの人はおっかねえからなあ。あんたから伝えといてくれよ」

心底ほつとした様子のトニスを眺め、リーファは苦笑した。シンハが聞いたらさぞや落胆するだろう。部屋の隅で壁に向かっていじけるかもしれない。

「大丈夫だよ」リーファは拳でトニスの肩を小突いた。「今のあんたなら、シンハの奴もそんなに怖く見えないさ」

「あつしはあんたとは違うよ」

トニスは首を振ったが、その面には微かながらも同感の笑みが浮かんでいた。足元で娘が手を引き、小さな声で、早く行こうと催促する。

「おつと、そうだな、行かねえと場所がなくなっちまうな。それじゃ……」

「うん。あ、ここから階段だぞ。その子、気をつけてやりなよ」

リーファは仕事を思い出して、いまさらながら注意する。トニスは苦笑した。

「ここには何回も来てるよ」

そう言えばそうか、とリーファは納得し、それからふと不思議になつて、問うでもなく独りごちた。

「この国の神殿は、罪人も受け入れてくれるんだな」

自分の生まれ育った国では、貧しい者や罪を犯した者、端から人間扱いされていない者たちは、決して教会に入れなかった。盗人を教会に匿った咎により、首を斬られた司祭もいるほどだ。

昔を思い出してやや茫然としたリーファに、トニスが振り返って言った。

「神様が許してくれなきゃ、ほかの誰が許してくれるって言うんだい？」

疑念の欠片もない、わざわざ信念をこめて強調することもない、

ごくごく当たり前の口調だった。驚きに打たれてリーファが立ち尽くす間に、トニスはもう背を向け、娘の手を引いて段を上って行く。「……そう、か」

トニスの背中が見えなくなってから、リーファは小さくつぶやいた。そういうもののなのだ、この国の人々にとっては。改めて、遠くに来たんだなあ、などと実感する。だがそれはもう、居心地の悪い疎外感ではなかった。

それならば、自分のような元盗人も、信仰の薄いよそ者でも、神々は大目に見てくれるだろう。

はつきり言葉にしてそう考えたわけではなかったが、なんとなくリーファは安心して、また参拝者の誘導を始めた。

やがて群衆がまばらになり、最後尾が見えて来た頃、本殿の前で香炉をくゆらせていた神官が扉を開け、中に消えた。いよいよ始まるらしく、誘導に当たっていた神官たちも、広場の方へ移動し始める。

リーファも向かいの神官にならって階段を上り、広場の後ろに立って人々の様子を見守った。皆、何年も、何十年も、この礼拝に参加してきたのだろう。慣れた様子で、誰が号令をかけるでもなく、しずしずと行儀よく整列しては、石畳の上に座っていく。

やがて人々が落ち着くと、不意に静けさが降りて来た。直前までの足音やざわめきが、透明な刷毛にすうっと拭い去られる。

どくん。

鼓動がひとつ大きく打つのを感じ、リーファは自分自身に驚いた。自分はこの国に生まれた者ではなく、この場で崇められる神々の名も知らない。にもかかわらず、何かが始まるうとしているのを感じた。

十二章 最後の試験（2）

本殿の扉は、開け放たれたままだ。その奥の暗がり、どこかの世ならぬ場所へと続いているように思われる。

やがて、中から高く澄んだ鐘の音が響いた。

リー……ン……

それに呼応し、外の神官が鈴を鳴らす。そしてまた、鐘の音。扉の中から、神官たちがゆつくりと一列になって現れる。あるいは鐘を持ち、あるいは歌を歌いながら。

響き合う鐘と鈴の音色に、人の声が薄絹を重ねるように唱和する。徐々にその声が大きくなり、音楽へと移ろってゆく。流れるようにゆつたりと、風のように優しく、陽射しのように穏やかに。

旋律が体の芯まで沁みてくる。リーファは茫然と立ち尽くしていた。広場に座する人々の上に、目には見えないが、何かがいることを確信した。神の気配、とでも言うのだろうか。それとも、人々の祈りが生み出すまぼろしのだろうか。

甘い花の香りが、どこからともなく漂ってくる。リーファは我知らずに仰向き、空を見上げていた。

すうつと不思議な感覚が引いて行き、リーファは我に返って辺りを見回した。歌は終わり、鐘と鈴が再び呼び合っている。それもじきに止み、空気はしんと静まった。始まる前のそれとは違う、夢から醒めたような静寂。

やがて人々がざわめきながら立ち上がり、そろそろと移動を始めた。広場の周囲にいる神官たちに祝福を授けてもらい、順序よく帰路につく。

ぽかんとしているリーファの前を、人波が通り過ぎて行く。そこへ、一緒に誘導をしていた若い神官がやって来た。

「お疲れさまでした。あとはもう大丈夫ですよ。帰りは皆、ゆつくりですから」

「あ……、うん、分かった」

リーファはまだぼうつとしたままだったので、敬語も忘れてぞんざいな受け答えをする。神官はちよつと目をしばたいたが、それについては何も言わなかった。礼儀もしっかり教え込まれているものと見える。

リーファは軽く頭を振り、もう一度、首を巡らせて周囲を確かめた。何も特別なところはない。何も変わっていない。

「礼拝に来たのは初めてだったけど……」

リーファは相手に話しかけ、言葉遣いをどうするか迷ってから、結局いつもの通りで行くことにした。歳もそんなに違わないし、いまさら取り繕うのも妙だ。

「毎回こんな風なのかい？」

「何を指して『こんな風』とおっしゃっているのかにもよりますが、ええ、今日の礼拝もいつもと変わったところはありませんよ」

神官は心持ち面白そうに答えた。異邦人の目にどう映ったのか、好奇心を刺激されたのだろう。リーファはちよつと頭を掻くと、ふうん、と曖昧につばやいた。

あの不思議な感覚や、花の香りがしたように思ったことなど、誰もがそうなのかと確かめてみたくはあった。が、もしあれが自分だけのことであり……つまり雰囲気の影響されて錯覚しただけなのであれば、かなりばつの悪い思いをすることになる。

リーファは質問を飲み込み、黙ってセレムを待つことにした。

神官はもの問いたげな顔をしたものの、詮索はせず、それでは失礼します、と頭を下げて立ち去った。背筋がぴんと伸びた、清々しい後ろ姿だった。

ややあつて、人の流れの中にセレムの銀髪も現れた。頭ひとつ抜きん出ているので、よく目立つ。彼はリーファの姿を認めると、手振りで外に出るように示した。

リーファが神殿から出てセレムに追いつくと、彼は学院へと歩きだしながら、早速「どうでした」と訊いてきた。

「毎回行きたいってほどじゃないけど、悪くなかったね」

「それは良かった」

セラムはにこりとして、満足げにうなずいた。何となくリーファは妙な反抗心を抱き、わざと渋面を作って続ける。

「皆が示し合わせたみたいに無言でぞろぞろ動いてるのは、ちよつと不気味だけだね。蟻の行列とか、蜂の巣でも覗いてるみたいだったよ」

失敬な言い草にも、セラムは気を悪くした様子はなく、朗らかに笑った。

「それはお互い様でしょう。どんな集団でも、部外者からは異様に見えるものですよ」

「……まあね」

リーファも苦笑し、故郷の教会での礼拝を外から見ていたことを思い出した。リーファは貧民街の生まれ育ちだから、礼拝に参加するどころか入信もしていない。そんな彼女の目には、決まった日の決まった時間に集まる人々が、随分と怪しげに映ったものだ。

リーファは頭を振って過去のまぼろしを追い払い、「それで」とセラムを見上げた。

「試験結果は合格かい？」

「そうですねえ」

セラムはわざと明後日の方を向いて、おどけた笑みを見せた。そして、焦れつたくなるほど間を置いてから、唐突な質問をする。

「試験内容は気に入りましたか？」

「は？ 内容って……つまりあの礼拝が、ってことかい？」

魔法学院の門をくぐりながら、セラムが「ええ」とうなずく。リーファは歩きながら変な顔をした。

「だから……悪くなかった、って」

「『悪くない』ですか。困りましたねえ」

白々しくうーんと唸るセラム。リーファは困惑してしまった。「気に入らなきゃ駄目なのかよ」

「駄目というわけでは、ないんですが」セレムは尚もとぼける。「この試験には、あなたの能力を評価するという事とは別の目的もありますから、気に入って貰わないと困るんですよ」

「はア？」

リーファは思わず頓狂な声で聞き返した。セレムは自室の扉を開け、リーファを中に招じ入れると、机の抽斗から一枚の紙片を取り出して見せる。

「さて、これが最後の合格证です。これまでの分は今、持っていますか」

「あ、うん。一、二、三……これで全部だよ」

リーファが合格证を数えて渡そうとすると、セレムはそれを止めた。

「最初から順番に、試験で何をして、何を見たのかを答えてから、渡してください。正規の試験をしなかった三番街と新市街については、除外して構いません」

「……？」

リーファは目をしばたたき、セレムを見つめる。紺碧のまなざしは穏やかながらも真剣そのもので、ふざけた気配はない。仕方なくリーファは言われた通りに、まず一枚目を差し出した。

「これは一番街。リユード伯のお屋敷に入って、ミナの失くし物を見付けるのに、屋根に登ったよ。猫がひなたぼっこしてたっけ。それと、眺めがすごく良かった」

セレムが無言でうなずく。リーファは合格证を机に置き、二枚目を取り上げた。

「二番街。船着き場だね。近くの酒場で酔っ払いの喧嘩を止めた」記憶が呼び覚まされ、思わずリーファは笑みを浮かべた。

「後でその二人が、本当に喧嘩する予定じゃなかったのに、つい本気になった、とか言って、いきなり歌い出してさ。結局宴会になっちまったっけ。それで二日酔いに……」

言葉尻で苦笑し、二枚目を差し出す。セレムの手がそれを受け取

り、一枚目の横に並べた。インクの筋がつながる。「三枚目も」と催促され、リーファはちよつとそれを眺めてから渡した。態度に出しはしなかったが、胸がざわつくのは抑えられなかった。

「職人街には配属されたかねえなあ。ラヴアスの奴とは顔を合わせたくないよ。工房がいっぱいあるのは面白かったけど、臭かったしね。ああ、でも」

ラヴアスの冷笑に代わり、元気な少年の顔が脳裏に浮かんだ。そうだ、あの子に事件の顛末を聞かせてやらなければ。面白おかしく脚色して、あの明けっ広げな笑顔と大きな声で「姉ちゃん、すっげえ」と言わせてやろう。

リーファはそこまで想像して、セレムの興味深げなまなざしに付き、慌てて咳払いして表情をごまかした。

「さて……四枚目、劇場街。ここは楽しかったな。座長のじいさんが耄碌したふりをして、家を探しながらそこらじゅう歩き回ったっけ。川の土手で茶を飲んだりしてさ」

思い出すと笑いが込み上げる。最後にひよいと杖を担いでスタスタ歩いて行った、あの老人のとぼけっぷりときたら。

「機会があつたら、また話をしたいね。それから、ええと、五枚目は……そうそう、司法学院だった。謎解きをやらされて、走り回らされたよ。警備隊の本部と、図書館と、食堂と……木登りもさせられたっけ」

そこでリーファはセレムに目配せした。転落して治療を受けたのは、つい最近のことだ。五枚目を渡し、六枚目も続けて差し出す。放火事件の夜を思い出し、リーファは改めて、大規模な家事にならなくて良かった、と小さな吐息をもらした。

「で、あとはあんたの持つてるその七枚目でおしまいだよ。今さっき終わったところなんだし、これはもう説明しなくていいだろ」

「そうですね。では……」

セレムは机の上に七枚の合格証を広げ、並べてつなげた。複雑に絡み合う蔦のような模様と、びっしり書き込まれた細かい文字が、

ひとつの図形を作り出す。

（あれ？）

それを眺め、リーファはふと、何かを思い出した。

（この形……何かに似てる？）

なんだっけ、と訝ったところへ、セレムが言った。

「あなたのことだから、もう気付いているかと思ったんですがね。今答えたことから、この試験に隠されていたもうひとつの目的を、考えてもらなさい」

「え？」

リーファが聞き返そうとした時には、セレムは小声で呪文を唱えだしていた。長く複雑な呪文の合間に、リーファの名前が挟まる。

やがて図形が輝きだし、七つの紙片そのものもぼんやりと光を帯びて、まるで一枚の紙のように

（違う、本当につながってる！）

リーファが息を飲むと同時に、パシンと光が白く弾けた。

「さあ、これで合格証が完成しました」

セレムの得意げな声に、リーファは恐る恐る机に近寄る。そこにあったのは、一枚の大きな地図。

「……シエナだ」

リーファは呆然とつぶやいた。何かに似ていると思ったのは、王都シエナの形だったのだ。いびつな円形をした街。放射状に走る街路、ひしめく家々。

ひとつひとつの街区を順に見ていくと、最前セレムに説明した、これまでの試験で目にした光景が、それぞれの場所に応じて鮮やかに見える気がした。実際に映像が浮かび上がっているのではない。だが、脳裏に広がるのだ。伯爵家の屋根からの眺望が、酒場のテーブルやランプが、劇場街の小川が。

（もしかして）

痺れたような頭の隅で、ひとつの考えがぼんやりと形を取り始めていた。

「おめでとう、リーファ。あなた専用の市街地図です」

セレムの声で我に返り、顔を上げる。穏やかな微笑が、もう分かりましたか、と問うていた。リーファは息を飲み、もう一度、地図に目を移す。

やはりそうだ、やっと分かった。

「シンハの奴……」

つぶやいた声がかすれた。

間違いない。試験官たちは、それぞれが自分の暮らす街区での『とっておき』を、リーファに見せてくれたのだ。

気持ちのいい景色、居心地の良い酒場。味わいのある街角、治安を守る法と正義と平等精神の象徴。人々の心を支える信仰の場。

そしてそれはもちろん、この追試を計画したシンハからの頼みだったのだろう。

まだこの街をよく知らない、愛着を持つに至らない新参者のために。この街を、好きになれるようにと。

言葉を失って立ち尽くすリーファに、セレムが優しく言った。

「予想外のことが起こって、すべての街区でちゃんとした『試験』を行えなかったのは残念ですが、その地図はあなたが見て回った場所について、特に詳しい情報を与えてくれるものです。これからあなたが自分の足で歩き、その目で見て、地図をより良いものにして行けることを、私も、シンハ様も、願っていますよ」

「……………」

リーファは答えられず、何度も瞬きして、涙がこぼれそうになるのを堪えた。数回深呼吸してから、思い切って手を伸ばし、地図を取る。

「ありがとう」

なんとかその言葉を押し出すと、リーファは顔を上げ、にっこりした。

「これ、見せてくる」

誰に、とは、言うまでもない。

セラムがうなずくのを待たず、リーファは身を翻していた。
学院の外に飛び出し、まぶしさに目を細める。家々の白壁や石畳
の道が輝いて見えるのは、春の陽射しのせいだけだろうか。
若葉の香りに乗せた風を胸いっぱい吸い込むと、リーファは城
を指して走りだした。青空の下、弾むような靴音を響かせて。

（完）

EX・i 優しい処方箋（前書き）

リーファが19歳の頃の話。 激甘注意。

EX・1 優しい処方箋

古い城によくあるもの 抜け道、怪談、開かずの間。

というわけでリーファもその日、城内のある場所で開かずの間を発見した。

「あれ？ ここ、なんだい？」

嚴重に施錠された扉の前に立ち、リーファは首を傾げた。近くで掃除をしていた召使が、なんですか、と顔を上げる。リーファは扉を叩き、その音の奇妙な響き方に眉を寄せる。もしやと思って七つ道具に手を伸ばしかけたところで、召使が慌ててそれを止めた。

「駄目ですよ。そこは開けても壁になっっているんです」

「やっぱり。音が変だと思ったよ。でも、なんでだい？」

元々部屋があつたところをふさいだのか。それとも、最初から部屋などなく、泥棒を惑わすための偽の扉なのか。

（まあ、あのシンハのご先祖が作ったんなら、単なる冗談つても大いにあり得るけどな）

そんな風に軽く考えていたリーファは、召使の暗い表情に、あれっ、と嫌な予感をおぼえた。しまった、と本能的に察して後悔したが、その時にはもう陰鬱な調子の語りが始まっていた。

「そこは昔、悪霊から身を守ろうとして、城の者たちが立てこもった部屋なんです。災いと疫病が町を襲い、城の者は悪霊を迷わせるために複雑な迷路やこつした偽の部屋をいくつも作って、最後には、自ら入った部屋の扉を内側から塗り潰してしまったとか……。悪霊は町を去りましたが、部屋の中に隠れていた人達も……」

「わわわわ分かった、結構、もういいよ！」

大急ぎでリーファは手を振り、話を遮った。締めくくりは大体想像がつく。今でも夜な夜な、壁の向こうからうめき声やすすり泣きが聞こえる、といったところだろう。

幽霊と死人が大の苦手であるリーファは、そそくさとその場を逃

げ出し、もつと明るい場所へと走り去ったのだった。

が、しかし。

えてして怪談とは、聞いたその時よりも、夜になって明かりを落とした後で、威力を発揮するものである。

「……寝られねえ……」

ベッドの上に座って枕を抱えたまま、リーファはびくびくと室内を見回していた。

ちょっとした物音が気になって、眠れない。衝立の向こうで眠る父の寝息さえもが、まるで嘆きさまよう幽霊の吐息に思われる。

しばらく悩んだ末、リーファは思い切ってベッドから降りると、こっそり隠し通路のひとつへ向かった。何度も夜中に通っている通路だが、今は地獄に続く洞窟に思われてならない。用心もそこそこに、せかせかと先を急ぐ。

出て来た部屋はもちろん、こんな時には何よりよく効く、人間魔除けこと国王シンハの寝室である。並外れて強い太陽神の加護があるため、大半の幽霊は近寄れないのだ。通路から出ただけで、リーファは安全圏に入った確信から、ほっと安堵した。

そして、気が緩んだ途端に肌寒さを感じて身震いする。季節は初夏であつたが、深夜ともなれば冷える。そうでなくとも石造りの城なのだ。ぬかつた、とは思えど、もう一度あの通路を引き返す気にはなれない。仕方なく、リーファは国王陛下の寝台にそろそろと歩み寄った。毛布の一枚でも貸して貰えたら、そこらで丸まって寝られるだろう。

と、リーファが声をかけるより早く、シンハは不審げに目を開けた。そして、なんだまたか、と言わんばかりの顔をする。今までにも何度か、夜中に叩き起こされていいように使われた経験があるので、それも無理はない。

「今度は何だ……？」

いささか閉口したように、それでも律義にシンハは身を起こす。リーファは申し訳なくて縮こまった。うつむいて少しもじもじした

後、

「……寝られねえんだ」

小声でそう白状すると、案の定、シンハは胡散臭げな半眼になった。リーファは訊かれる前から言い訳を始める。

「だ……だって、昼間、見付けちまったんだよ、あの『開かずの間』！　それで……」

「幽霊が怖くて、か？」

「シーツ！」

幽霊、と口にしただけで、ご本人が現れるとでも言うかのように、リーファは慌ててじたばたした。あの扉を思い浮かべただけで寒気がして、否応なく涙ぐんでしまう。

シンハは呆れ顔をしたものの、小さなため息をひとつついて、仕方ない、と体をずらしてベッドを半分空けた。さすがにリーファも、これには赤面した。

「ちょ、ちよつと待てよ、いくら何でもそりやまずいだろ。犬猫じやあるまいし」

「似たようなもんだろう」

シンハの声は、もう八割方眠りかけだ。お疲れだからか、相手がリーファなので警戒も緊張もしないせいか。こちらに背を向けた姿勢のまま、すう、と深い寝息を立てる。

リーファはしばらく迷っていたが、足が冷たくなってきたので、えい、と思い切ってベッドに潜り込んだ。

「うお、あつたけえ」

身も心も一度に温まり、思わず笑みがこぼれる。安堵とくつろぎが眠気を誘い、瞬く間に眠りに落ち……。かけたところで、コホン、と小さく咳き込む声が出た。肩に接しているシンハの背中が、微かに揺れる。

「……？」

あれ、まさか、と眠い目をこすって様子を窺うと、コンコン、と続けて咳き込むのが分かった。

「シンハ？ おまえ、どつか具合悪いのか」

「いや」

大丈夫、というようにシンハは無造作な返事をよこす。だが、しばらくするとまた、こほこほと小さな咳を繰り返した。リーファはもはや悠長に寝てなどおられず、むくりと起き上がってシンハの肩を揺すった。

「おい、本当に具合悪そうだぞ。神官に診てもらったのか？」

城付きの神官は医者もかねており、リーファも何度か世話になったことがある。

「自分が丈夫だからって、病気を甘く見ると後が怖いんだぞ。聞いてんのか、こら」

「心配ないさ」シンハは億劫げに答えた。「夜に少し咳が出るだけだ」

「馬鹿、それが甘く見てるってんだろ！ 朝になったらちゃんと神官のとこ行けよ、絶対だぞ。行かないやオレが引きずってくからな」リーファがあまりに真剣なので、シンハは不思議そうな顔で振り返った。もの問いたげなその表情に、リーファは目を逸らし、独り言を装ってつぶやいた。

「……昔、オレにもちっこい妹がいたんだ。本当の妹かどうかは知らないけど、可愛かったよ。まだ三つか四つだった。寝る時はいつもこんな風に、背中合わせにくっついてたんだ。それが、いつ頃かな、夜になると咳き込むようになってね。うるさいってよく殴られて、だからいつも咳を押し殺してた。でもオレには背中越しに分かってさ……正直、鬱陶しいなあと思ってたんだ。どうする事もできなかったしね。そしたらある晩、静かになって。ああやっとおさまったんだな、と思ったら……朝には、冷たくなってた」

堪え切れず、言葉の終わりで涙が一滴、転がり落ちた。

暴力と病の両方に、ただじっと耐えていた小さな背中。弱り、痩せかけて、とうとう最後まで一度も、つらいとも苦しいとも言わずじまいだった。

リーファは何度も瞬きし、それ以上泣くまいと気を紛らせた。その頭を、大きな手がふわりと撫でる。

「分かった。ちゃんと診てもらうから、心配するな」

「……うん」

ぐす、と鼻をすすると、リーファは照れ臭いのをごまかすように、背を向けてごろんと横になった。乱暴に毛布を引つ張り上げ、顔を隠す。眠りに落ちる前、つむじの辺りに軽くキスされたような気がしたが、夢だったのかも知れない。

翌日の午後。

「うー……ごほ。シンハ、いるかー」

元からかすれ気味の声をさらにガラガラにして、リーファは国王の部屋を訪った。もちろん、ちゃんとした扉から、である。

返事を待たずに中へ入ると、シンハは窓際で、何やらガラス壘を光に透かして、ためつすがめつ眺めていた。

「何やってんだ？」

リーファが問うと、シンハは驚いたように振り返り、苦笑した。

「なんだ、すごい声だな」

「おまえのせいだろが」

それだけ言い返し、リーファはげほごほと咳き込む。しばらくして呼吸が落ち着くと、彼女は恨めしげに国王を睨みつけた。

「よく考えたら、おまえが咳き込むような風邪、うつされたらただじゃすまねえつてぐらい、気つくべきだった……げほ、げっほ！

畜生、油断したぜ」

「そこはかとなく失敬な発言だな」

「事実だろ、この体力馬鹿、普通の人間の身になれってんだ！ おかげで仕事にならねえって、詰所から追い出され、げほげほっへ！」

苦しむリーファを見下ろし、シンハは苦笑した。

「まあ、ただの風邪で良かったじゃないか」

「たりめーだ、でなきや今頃くたばつてらあ。あー、くそ。おまえの方は、ちゃんと神官に診てもらったんだろっな？」

リーファが念を押すと、シンハはうなずいて、先ほどから手にしていた壺を見せた。

「ちようどいい、おまえにも分けてやるよ。咳止めだ」

言いながらもう栓を抜き、中の液体を匙に注ぐ。そら、と差し出され、リーファは憚然とした。

「オレは子供か？」

「似たようなもんだろっ」

ゆつぶと同じ台詞を聞かされ、リーファはしかめっ面をしたが、それでもおとなしく口を開けた。よくある水薬だろっと思っただけだ。

「……っ！？ な、なんだこれ！」

ごくんと飲み下した直後に、うるたえて素っ頓狂な声を上げる。シンハが愉快げに声を立てて笑ったが、リーファは彼をなじるところでなく、眉間を押さえてうめいた。

「あ……甘……っ、脳天に染みる……」

確かに咳止めには違いなかるうが、ただの水薬ではなく、シロツブだったのだ。しかも、薬の苦みを紛らすために強烈な甘さにしてあるので始末が悪い。奥歯が浮き、鼻孔の奥まで甘ったるい匂いが逆流する。

「一番効くやつ、と言ったらこれを処方してくれたんだ」

シンハがにやにやしながら説明する。リーファは絶望的な顔になった。

「ちよつと待て。うつされたのがおまえの風邪だってことは、オレにも同じ薬が……」

「出るだろっな」

「……勘弁してくれ」

ああもう、泣きたい。そんな声音でうめいたリーファに、シンハは形ばかり、詫びるような表情を取り繕った。

「『開かずの間』の呪いかもな」

「病人に追い打ちかける奴があるかよ」

リーファはげんなりしながらも、少し喉が楽になって息をついた。さすがは『一番よく効くやつ』なだけはある。とはいえ、決して進んで飲みたい代物ではないが。

リーファは壘を視界の外に追いやろうと、シンハの顔を見上げた。
「あの部屋、本当に言い伝え通りのもんなのか？」

「どんな怪談を聞いたんだか知らんが、あの壁の奥で誰かが死んだとかいう事実はないから、安心しろよ。ずっと昔に疫病が蔓延したのは記録にもあるし、その際に病人を隔離しようとかかなり極端な事が行われたのも確かだ。だがあの扉はそれとは関係ない」

「んじゃ、何なんだ？」

「感傷だ」シンハは肩を竦めた。「先祖の誰かが、妻を病で亡くした時に、遺品をひとつの部屋にまとめて壁を塗り潰させた。多分それが、疫病の話とまじったんだろう」

「ふーん……そうか」

少し気抜けした様子のリーファを見やり、シンハが意地の悪い笑みを浮かべた。

「これで、一人で眠れるな？」

「ばッ、い、言われなくてもっ！」

リーファは赤くなつて怒鳴り、次いでまた咳き込む。シンハが気の毒そうに、薬の壘を差し出した。

「もう一口どうだ」

「要るか！ おまえの薬だろ、自分で飲めよ！」

「おまえの方が重症だろう」

「要らねえつつってんだろ、やめろこの……」

互いに壘を押し付けあっていると、呆れ声が割り込んだ。

「何をやってるんですか、まったく、子供みたいに」

言つまでもなく、胃痛病みの側近である。二人は慌ててあらぬ方を向き、白々しくとぼける。口トはそんな様子を眺めてやれやれと

ため息をつき……

こほん、と咳をした。

リーファは目を丸くし、ちらりとシンハを見る。夏草色の目が、同じ気配を浮かべてこちらを見返して。

二人は揃って口トに向き直ると、不審な顔の彼に向かって、おもむろに提案した。

「あー、えへん。あのさ、口ト」

「ここにたまたま、咳止めの薬があるんだが……」

（終）

EX・2 予期せぬ事態（前書き）

リーファが王都に来てあまり経っていない頃の話。

『』はウエスレ語（大陸中部の公用語。リーの第二言語で、レズリアでも使える人が少しはいる）の台詞です。

EX・2 予期せぬ事態

カンカン、カンカン……

一定の拍子で繰り返される警鐘に、リーファは本から顔を上げて養父を見た。

『父さん、あれは？ 火事かな』

既に気付いて耳を澄ませていたアラクセスは、ちよつと考えてから、ああ、と微笑んだ。

『あれは、「侵入者あり」の警鐘だね。なに、兵士が対処するから心配は要らないよ』

アラクセスの説明は端的だった。ウェスレ語が使えろとは言つても、堪能という域ではないからだ。リーファは不安げに眉を寄せた。

『侵入者、つて……盗賊とか？』

『じきに片付くだろう。ここでじつとしていれば、大丈夫』

よしよし、とアラクセスが頭を撫でる。リーファは聞きたいことの答えが得られず、もどかしい顔になった。落ち着きをなくしたり

リーファに、アラクセスはもう一度ゆつくり繰り返し言い聞かせる。

『いいかい、ここにいるんだよ。慌てて出て行ったら、逆に危ないからね』

『……分かった』

リーファはこくと小さくうなずいた。

この国の内情はまだほとんど知らないが、国王と言ってもカリィアの教皇のごとく絶対的な存在ではない事ぐらひは、肌身にしてみている。王を敵視する貴族がいることも、それゆえ王と言えどもただふんぞり返ってはおれないことも。

むろんリーファは、政治的なごたごたに首を突っ込むつもりは毛頭ない。だが、今まさに自分の身近に害意を抱いた何者かが忍び寄り、せつかく手に入れた生活を脅かそうとしている、となれば、話は別だ。

（分かったよ、父さん。でも、従うとは言わなかったろ？）

アラクセスがほっとして席を離れた僅かな隙に、リーファは音もなく図書館を出て行った。

城内が騒がしい。

普段は各所に分散して警備に当たっている近衛兵が、どこからともなく集まって数人ずつの組になり、右へ左へ走ってゆく。物陰からその様子を窺っていたリーファは、これほど兵士がいたのかと驚きに目を丸くした。

遠くから剣戟の音が響く。知らない言葉の怒鳴り声が飛び交っている。それも一箇所だけでなく、城門や裏庭、あちこちで。

（おいおいおい、ちょっと待てよこれ、本格的にやばいんじゃないかねえのか？）

リーファは青ざめ、無意識に胸元でぎゅっと手を握り締めた。侵入者、などという生温いものではない。襲撃、あるいは暴動か反乱の域ではないのか。

脳裏を国王の姿がよぎった。彼女に手を差し伸べ、路傍のゴミ溜めから引つ張り上げて、ここまで連れて来てくれた庇護者の姿が。

（くっそお、冗談じゃねえぞ！）

怒りと焦燥に駆られて走り出す。

分かっている、彼は強い。下手に加勢しようなどとすれば、逆に足を引つ張るかもしれない。だが彼とて万能ではないし、どんなに強くとも一人で出来ることには限りがある。もし城内の使用人を人質に取られてもしたら、お手上げだ。

リーファは居館に駆け込むと、素早く国王の執務室を目指した。

廊下のそこかしこに置かれている大きな花瓶や彫刻が、瘦せて小柄なリーファの姿を隠してくれた。途中で慌しく廊下を走る使用人や兵士を見かけたが、向こうは誰も彼女に気付かなかった。

階段を駆け上がる複数の足音が響く。荒々しい音は、逃げる側ではなく攻める側が立てているに違いない。リーファは急いで後を追

った。

（こいつらも兵士か？）

視界の隅に、一団の後姿がちらと入った。制服こそ着ていないが、統制の取れた動きだ。揃って身元の知れない黒っぽい服をまとい、顔を覆面で隠している。抜き身の刃がきらりと光った。

（シンハ！）

心の中で悲鳴を上げ、リーファは必死で走った。もちろん、見付からないよう足音を忍ばせ、物陰に隠れながら。

やがて行く手に執務室が見えたと同時に、賊の一団が扉を蹴破つてなだれ込んだ。内側で待ち構えていた国王付秘書官のロトが、先頭の一人二人と斬り結ぶ。だが多勢に無勢で結果は見えていた。

「下がれロト！」

シンハの声が飛ぶ。リーファは安堵のあまり膝が抜けそうになった。そつと様子を窺うと、黒い集団の隙間から、並んで剣を構えるシンハとロトの姿がかるうじて見えた。

「申し訳ありません、陛下」

「構わん。ここまで踏み込んで来たということは、誰も人質に取れなかったんだろうさ。それなら俺も、気兼ねなく戦える」

シンハの声には余裕があった。賊の一人がチツと舌打ちする。リーファは会話の内容までは分からないものの、なんとなく成り行きを察して納得した。

（部屋の前に誰もいなかったのは、わざとだったんだな）

普通なら賊が侵入したとなったら、一番に国王を警護し、逃がすものだ。しかしこの王は違う。単身戦うとなったらまず無敵である一方で、守るべき民を盾にされたら見捨てる事が出来ない。だからあえて、近衛兵らを使用人の避難と保護に行かせたのだろう。

とは言え。

「この人数を相手に、どこまでもちますかな。足手まといの秘書官もいる」

賊がくぐもった声で挑発する。ロトが顔をこわばらせるのが、リ

リーファの位置からでも見えた。そのこめかみを一筋、つつ、と血が伝い落ちる。扉が破られた時にでも怪我をしたのだろう。

「足手まといかどうか、やってみてから判断するんだな。言っておくが、こいつは俺をとっ捕まえるのが仕事だ。相当鍛えられているから覚悟しておけ」

「陛下。気が抜けるから、情けないことを言わないで下さい」

ロトがぼやいた直後、賊が動いた。

どつと黒い集団が二人めがけて襲いかかる。刃と刃が火花を散らし、息つく間もなく鋭い音を響かせる。

リーファはぐくりと固唾を飲んだ。このまま見ていることも出来る。きつと二人は勝つだろう。襲撃者は何人か死ぬかもしれない、ロトが怪我をするかもしれない、だが最後まで立っているのは間違いないシンハだ。確実に。しかし、

（それじゃダメだ）

リーファは決意を固め、隠れていた壁際から離れた。人を殺せばシンハは傷つく。ロトが負傷すれば責任を感じる。それらにいちいち足を取られるほど、彼はやわではないが、それでも、何も感じないほど図太くはないのだ。

（オレだって……！）

手助けぐらい出来る。重荷をほんの少しでも、自分の肩に載せることが出来る。やってみせる！

「シンハ……！」

大声で名前を呼び、襲撃者の注意を引いた。何人ががぎよつとして振り返り、呼ばれた当人もハッと顔を上げた。そして、夏草色の目を限界まで見開く。なぜなら、

『てりやあああああ……！！』

小柄な少女が、体の半分ほどもありそうな壺を高々と振り上げていたから。

「止せ、リー！ それは……っつ……！！」

「わああああ！？」

「いかん！！」

阿鼻叫喚、種々の悲鳴が入り乱れ、賊が慌てふためく。その反応に、何かおかしいと気付く間もなく、リーファは思いっきり壺を投げつけていた。

「ぎゃあああああ！！」

「ああああ　！！！！」

標的にされた賊が咄嗟に身を屈めて避ける。そこへ、どどつ、と他の賊が押し寄せた。なぜか、壺を受け止めようとして。

複数の足が絡まり、三人ばかりが倒れ、その上に両手を差し伸べた男が飛び込み、投げ出された剣が床でチインと音を立てた。そして、

「……つつ、はああああ……」

「よ、良かった……」

崩れた人間座布団の山のでっぺんに、壺がぼすつと軟着陸すると、いつせいに安堵のため息が吐き出された。小山の向こうではロトがへなへなと座り込み、シンハが床についた剣に寄りかかってうなだれる。

窮地を救ったはずのリーファはきよとなり、あれ、と目をしばたいた。

数拍の沈黙。

そして、

「……っ、は、ははははは！！」

堪えきれなくなったシンハが、弾けるように笑い出した。横でロトも半笑いになり、頭を振って、ばたりと床にひっくり返る。

壺を受け止めた賊がそろそろと用心深く体勢を立て直し、どこも割れたり取れたりしていないか、怖々確認し始めた。

『あ……あれ？』

なんなんだ、この展開は。もしかして、もしかすると??

リーファは混乱しつつも、嫌な予感に顔をしかめる。案の定、賊の一人がものすごい形相で詰め寄ってきた。

「小僧ツツ！！　なんということをするか、これは先々代より伝わる貴重な宝であるぞ！　万一ヒビひとつでも入るうものなら、貴様の首をもつてしても贖うことは出来ぬというのに、よくも！！」
がなりたてられても、リーファには意味が分からない。首を傾げ、困り顔でシンハに助けを求める。

『えーと……ごめんシンハ。このおっさん、何て？　だいたい見当はついたけど』

『お察しの通りだ、多分な。まあ、壺が無事で良かった』

シンハは笑いながらやってきて、リーファの頭をぐしゃぐしゃかき回した。

「陛下ッ！！　なんですか、この小童は！　使用人の分際でこんな場にしゃしゃり出るなど、教育がなつとりませんぞ！！」

賊（？）が覆面をひっぺがし、噛み付かんばかりの勢いで怒鳴る。シンハは意地悪くにんまりして、相手の肩を拳で小突いた。

「潔く負けを認める。こいつがすぐ後ろまで迫っているのに、最後まで気付かなかったおまえの落ち度だ。もし壺が割れていたら、それこそおまえの首が飛んでいたかもな」

「くっ……！！　こ、このような……」

怒りに歯噛みしながら、彼は部下をねめ回した。

「何をしておったかッ！！　やすやすと背後を取られおつて……！！」

「おいおい、部下を責めるのは酷だぞ、おまえだって俺にばかり気を取られていただろうが。それに、こいつは元盗人だ。忍び寄ることにかけては、おまえ達など足元にも及ばんよ」

シンハはにやにやしながら、リーファの肩を抱き寄せる。賊（？）は渋い顔になった。

「盗人ですと？……では、噂はまことでしたか。西方で拾ってきたという……」

そうだ、とシンハは答えてから、リーファに向かってやっと説明してくれた。

『リー、紹介しよう。この短気なおっさんは王室近衛隊・隊長、ベ

シエードーズ。普段はラウロで先王陛下やほかの王族を警護しているんだ」

『へえー……宜しく、って感じじゃねーから挨拶はいいかな?』

曖昧に応じて、リーファは軽くぺこりと会釈する。ベシエは本意そうに、ちよつと顎を引く程度の礼を返した。シンハは面白そうに二人を見比べつつ、ベシエには理解できないのをいいことに、内情をぶつちやけていく。

『本来は近衛隊は国王を優先するものだが、何せ俺はこの通りだからな。シエナの警護は副隊長のマチアスが担当してる。だがそうは言っても、警護が適当でいいってことにはならん。で、たまにこうして隊長が襲撃してくるわけだ。前の時は使用人を人質に取られてな、救い出すのに手間取った』

『だから今回は、わざとおまえの身边を手薄にして、皆の方を逃がした、と』

『おかげで一網打尽、というわけだ』

得意げなシンハを、リーファは胡乱な目で睨んだ。そして、

『この、ど阿呆!!!』

怒号一喝、渾身の力で脛を蹴飛ばしてやる。さすがにシンハが怯んだところへ、リーファは羞恥と憤激を一拳に浴びせかけた。

『だったらそうと、なんでオレにも知らせとかねえんだよ!!! 騙しやがって、むちゃくちゃ焦ったんだぞ! 壺が値打ちもんだとか考える暇もなくて、本当にこれで誰かの頭かち割ってたらどうすんだボケツツ!!! そんなに自分が強いって自信があんなら、口トもどつかに避難させとけ、見ろよ怪我してんじゃねーか!』

馬鹿、間抜け、考えなしの頓馬、南瓜頭!!!

ありとあらゆる罵声を投げつけられて、シンハは少々悲しそうに小首を傾げる。リーファは真っ赤になって地団駄を踏んだ。

『そんな顔しても駄目だからな! 本当に、心配して損した、大恥かいた!!! 二度と助けねーからな!!!』

喚くリーファとは対照的に、襲撃部隊の近衛兵らの表情が緩んで

いく。言葉は分らずとも、二人の表情と態度から関係はおおよそ知れるというものだ。やがて誰かがプツとふきだし、くすくす笑いが広がった。シンハは情けない顔で彼らを見やり、ため息をついてリーファに向き直った。

『すまん、俺が悪かった。騙すつもりはなかったが、知らせ忘れていたんだ。次からはちゃんとする。……加勢してくれて、助かった』
宥めるのでも取り繕うのでもなく、真摯な感謝を込めた微笑。
リーファは耳まで赤くなって、ぷいとそっぽを向き、

『ひとつ貸しだからな!』

ぶつきらばうに言い捨てて、逃げるようにその場を離れた。

微笑ましげにその背中を見送っていた近衛兵らが、和やかな雰囲気で作戦終了のしるしに覆面を取る。壺を元の位置に戻し、各自乱れた衣服を整え、負傷者に手当ての必要を確認して。

ベシエはそんな部下の様子を眺め、ふうつとため息をついた。

「まあ、盗人というのは感心しませんが、危険を顧みず助けに来る辺り、見上げた忠誠心ではありますな。相変わらず陛下は、目下の者を味方に引き込んでしまわれる。あの少年も、いずれ陛下のお役に立つことでしょう」

しみじみとしたベシエの言葉に、シンハは失笑を堪えて妙な顔をする。それには気付かず、ベシエは真剣にひとつの助言をした。

「その為には、もつとしっかり食べさせてやらねばなりませんぞ。

あんなに細くて小柄では、壺は投げられても、剣と盾は装備できません
すまい」

「ちゃんと食わせてやれというのは同感だが」

シンハはぐふつと妙な声を漏らした。そして、意地悪く間を置いて一言。

「あの元盗人は、小僧でも小童でもなく、小娘なんだよ、ベシエ」

「……私をからかっておいでですね、陛下」

「俺が嘘をついていると?」

とぼけたシンハに、ベシエはしかめっ面を見せ、黙ってやれやれ

と首を振ったのだった。

その彼が真実を知って驚愕するのは、また後日の話。

（終）

EX・2 予期せぬ事態（後書き）

元はサイトの四月馬鹿企画として書いたSSでした。騙し騙されネタ。

EX・3・1 見る人のなくとも花の咲く（前）（前書き）

本編の後、あまり経っていない頃の話。昔懐かしベタ展開。

EX・3・1 見る人のなくとも花の咲く(前)

「えええー、いらねーよドレスなんかー」

心底嫌そうな口調は、まるで恨みでもあるかのようだ。

「そんなもんにかネ使う余裕があんなら、早いとこオレの部屋に新しい机入れてくれよ。いや、新しいのは別の部屋に回して、そのお下がりでもいいからさ。とにかく不便なんだよ」

「そっちは手配済みだ、もうしばらく待て。まったくおまえは……分からんな、女は新しい服を作れるとなったら大概喜ぶものだと思うていたが」

呆れ顔のシンハに、リーファはむっと口を曲げて応じた。

「オレだって新しい服はありがたいけど、ドレスは欲しくないだけだよ。おまえが礼装を鬱陶しいって言ってるのと同じ！ 動きにくいし、大体、そういう服を着なきゃいけない場、つてのが嫌いなんだ」

「それなら気持ちは分かる。だが、そうとばかり言ってもおれんだろう。一着ぐらいいはまともなドレスがないと、普段着と制服しかないのでは困るぞ。現に、今作っておかないとじきに体に合うのを借りられないかと駆けずり回るはめになる」

「はあ？ なんだよ、まさか貴族の宴会に出席しろとか言うんじゃないかねえだろうな」

「そのまさかだ」

「はあああああ！？」

頓狂かつ不快この上ない声音に、傍^{はた}で聞いていたロトがふきだす。リーファはぎろりとそちらを睨みつけたが、ロトは怯まず温かい苦笑を浮かべ、慰め口調で説明した。

「今度、城で催される晩餐会に、辺境伯が出席されることになったんだ。一緒にミナ嬢も王都に出てくるんだけど、彼女が君に会いたがって駄々をこねているそうなんだよ」

「……だからオレにも出ろってか。別の時にすりゃいいじゃねーか、なんでわざわざかったるい場に……」

「生憎だけど、今回は伯の予定が押していてね。ミナ嬢が君と接触できるのは晩餐会の時だけなんだ」

ロトは気の毒そうに言ったが、リーファはまだ納得できずに膨れっ面である。シンハがやれやれと言い添えた。

「いい機会だから、おまえも主だった貴族の顔を覚えておけよ。城や城下で出くわしたり、何かの事件で絡むはめになった時、後手に回らなくて済むだろう」

「そんな事はねえと思うけどなあ……どうしても礼服が必要だってんなら喪服にしてくれたら、一番実用的だと思うけど」

「おまえはフィアナの結婚式にもそれで出る気か」

「少なくともあいつは当分結婚しねーから大丈夫だって」

「……いいから、たまには大人しく言うことを聞け」

「ええ！？　いつだってオレは素直な良い子だろ！　人の言うこと聞かないってんじゃ、おまえの方こそよっぽど人後に落ちねえくせに」

「今は俺の事はいい！　素直な良い子だと主張するなら、すぐにそっちの控え室に行け。さっきから仕立屋が採寸しようと待っているんだ」

そろそろ国王陛下も我慢の限界のようである。リーファはまだ不満な顔をしていたが、さすがに引き際を悟って渋々と指差された扉に向かったのだった。

それから何かと忙しい毎日の合間を縫って、生地を選び、デザインを打ち合わせ、何度かの仮縫いをこなし。同時進行で、ドレスに合わせる靴まで新調して。

「既に疲れたよオレは……」

最終調整を済ませた仕立屋が、明後日には完成品をお届けに参ります、と退出した後、リーファは国王の私室でぐったりしていた。

むろん、諸悪の根源にばやきを聞かせるためである。

「無理を押してすまん」

シンハは苦笑し、ソファに沈み込んでいる彼女のために、茶を淹れてやる。

「いずれ用意せねばならんと思っていたんだが、先延ばしにしている内に、ばたばたするはめになった。もっと早く取り掛かっておけば良かったんだが」

「だから、そもそもオレを公の場に引きずり出すのが間違ってるんだよ。ミナには悪いけど、別に絶対に会わなきゃなんねー用事があるわけじゃねえんだろ？」

「まあ、子供のわがままだからな」

「だろ？ 諦めさせたらいいのに、伯爵は甘すぎるんだよなあ」

あーあ、とため息をつきながらも、実際のところ、リーファの口元には優しい微笑が浮かんでいる。あの小さなお姫様に会うのが楽しみなのだろう。シンハはそれを見て取ったが、指摘はせず、お茶請けの焼き菓子テーブルに置いた。

「いずれにせよ、今回の件がなくとも、まともなドレスを一着は作らせるつもりだったんだ。警備隊の制服はあくまで仕事着で、礼服にはならん。もののたとえでフィアナの結婚式と言ったが、ほかにもどんな場が必要になるか分からんからな。おまえもそろそろ一人前の大人として、体裁を整えられるように……」

そこまで言い、リーファが苦りきっているのに気付いて同情のまなざしを向ける。

「あまり嫌だ嫌だと考えて、ますます苦痛になるぞ。大したことじゃないと思え、その内に慣れる。好きにはなれなくともな」

ほん、と大きな手で優しくリーファの頭を撫でる。リーファは恨めしげに夏草色の瞳を見上げた。

「……経験談か？」

「そんなところだ」

シンハは彼女の頭に置いた手で、くしゃりと髪をかき回した。リ

「リーファはそれを払いのけ、紅茶に手を伸ばす。

「一人前の大人らしくしろってんなら、まずおまえがそれを止めるよな」

「ああ、すまん」

悪びれずに詫び、またぼんぼんと頭を撫でるシンハ。人の話を聞けよ、とリーファはぼやいたが、もう払いのけはしなかった。大きく温かな手の感触は、実際のところ心地良かったし、遠くなった記憶の中で唯一の優しいものを思い出させてくれるから。

「……シンハ」

「ん？」

「ドレス、似合わなくても笑うなよ」

拗ねたようなつぶやきに、シンハは小さく苦笑しただけだった。

似合わない、どころではなかった。

背が高く細身のリーファが映えるよう、ドレスは身体に沿って流れる水を思わせる形に作られていた。色は柘榴石のような真紅。日数不足のために刺繍はほとんどないが、袖口や胸元など、効果的な場所を金糸の蔓薔薇で飾ってある。葉の上には、露に見立てた小粒の真珠。

いつもは一本に編んでいる髪をほどいて緩く波打つに任せ、両脇は邪魔にならないよう、すんなりした首がよく見えるよう編み上げ、頭の後ろで留めて。編んだところに白い花を挿せば、貴婦人の一丁上がり、である。

普段からは想像もつかない華やかな立ち姿に、迎えに来たロトは目を丸くして絶句した。まじまじと凝視されて、リーファは照れ隠しにしかめっ面をする。

「なんだよ、笑いたきゃ笑えよ」

ぶすつとしてそんなことを言ったものだから、ロトは別の意味で失笑してしまった。

「せっかく似合ってるのに、そんな言葉遣いしたら台無しだよ。

そろそろ大広間の準備が整うから、迎えに来たんだ。……おっと、歩き方も気をつけて」

「お淑やかに歩け、って？ 言われなくても分かってるよ」

紅を刷いた唇を尖らせ、リーファは静かに進み出る。ロトはその手を取って先導しながら、穏やかに注意を促した。

「それもあるけど、いつもとは違う靴だろう？ うっかり勢い良く歩いたら、足を挫くかもしれない。気をつけて」

「……本当だ、歩きにくい。うう……今更だけどなんでオレがこんなこと……」

ぶつくさぶつくさ、時々よろよろ。

なんとか転ばず裾を踏まず、足も挫かず、大広間に到着する。上で寸劇でも演じられそうなほど広いテーブルには、既にずらりと人数分の食器が用意されていた。蝋燭の代わりに魔術の明かりが灯してあるのは、国王の威信とやらを見せ付けるためでもあるのだろう。席に案内され、リーファは少し不安げにロトを振り返った。

「なあ、オレが先に座っちまっていいのかい？」

「いいんだよ。こういう形の晩餐会だと、貴賓ほど後から入ってくる。位の低い人間が長く待たされるわけさ。一通り食事が終わったら、ホールに移動して自由に歓談するくらいだけど、君はその時にはもう退室して構わないよ。ミナ嬢が解放してくれていたら、ただね」

「ううう。せつかく美味しいメシにありつけるのに、まともに食える気がしない……」

「料理長なら、君の立場を理解して同情してくれるさ。大丈夫」

ロトはぼんと励ますように肩を叩くと、他の客人を案内するために去っていった。

じきに次々と賓客が現れ、それぞれの席についてゆく。リーファの聞いたこともない名の貴族達が大勢いた。

八割がた席が埋まったところで、ようやく東方边境伯が娘を伴って現れた。ミナは威厳を損なわない程度に急いで、自分の席　　リ

リーファの隣に、駆けつける。

「久しぶりね、リーファ！ 見違えたわ、今夜のあなた、とっても素敵よ！」

「ありがとうございます。お嬢様も、また一段とお美しくなられましたね」

リーファはドレスの上から見えない礼服をさらに一枚被り、につきり微笑んだ。ミナはお世辞など聞き慣れている様子で、リーファの言葉をあっさり受け流して椅子に座った。

「ねえねえ、警備隊の仕事はどう？ もう隊員になれたのでしょうか、どんなことをしてるの？」

身乗り出して興味津々と話しかけてくる。「ミナ」と重々しくたしなめたリード伯の声も、まるで効果がない。リーファは伯爵を見上げ、優雅に小首を傾げて会釈した。先客達の見よう見真似だが、なかなか上手く出来た。伯爵もおもむろに会釈を返し、一通りの挨拶に加えて「よくお似合いだ」と褒めてから、召使が引いた席につく。その間も、ミナはとめどなく喋り続けていた。

「あなたが屋根に登った時は驚いたわ、だってあんなに身が軽いなんて！ 今もああいうことをするの？ 警備隊の仕事は危なくない？」

大事に育てられた貴族令嬢だけに、外の世界をあまり知らないのだろう。そこへたまたま飛び込んできたリーファという存在は、あまりにも刺激的で好奇心をそそらずにおかなかったようだ。

リーファは教育上悪い影響を与えないように配慮しながら 何せ父親がすぐそこで一言一句逃さず聞いているのだから ミナの好奇心を満たすことに腐心した。

EX・3・1 見る人のなくとも花の咲く（前）（後書き）

ちよつと長いので前後2分割。

EX・3・2 見る人のなくとも花の咲く(後)

いつの間にかシンハが最後に着席し、晚餐が始まっていたが、リーファは完全にミナの虜にされており、まわりに気を配る余裕もほとんどなかった。もちろん、料理を楽しむどころではない。

みつともない失敗をしないように気をつけながら、急流のごとく続く会話の合間を縫って、小鳥のように料理をついばむのが精一杯。どのみち味もろくく分らないので、料理が残っていても、次の皿を召使が運んで来たら、どんどん下げて貰った。決して進行は速くなかったが、それでも、そうしなければ食べかけの皿がたまる一方なのだ。

(あああ勿体ねえ)

食べ残しをするなど、リーファにとっては許しがたい罪悪だ。が、しかし、今この状況では他に選択肢はない。リーファは涙を飲んで、ひたすらミナの相手続けた。

ええ、実際はそんなに危険なことはありませんよ。退屈な仕事の方が多いんです……落とし物の管理だとか、酔っ払いを家まで連れて行ったりとか……はい、立ち回りを演じることなど滅多にありませんね。そうです……

にこにこにこ。愛想笑いで頬が痛くなってくる。

食事が終わる頃には、リーファの忍耐力はほぼ払底しかけていた。どうかこれで解放してくれますように、と願いながら、伯爵が席を立つのを待つ。

国王が席を立ったのを皮切りに、賓客たちが三々五々、小さな集団に分かれて大広間を出て行く。やがて伯爵もそれにならった。小さな令嬢も、父親の差し出した手に手を添えて、軽やかに椅子から降りる。

ホッとしてリーファも腰を上げ、それでは、と暇を告げようとした。が、素早くミナが袖を掴んだ。

「さあリーファ、あちらにはお茶と砂糖菓子も用意してあるのよ。行きましよう」

しまった。

とは思えど、それを顔に出すことも出来ない。リーファは苦笑し、ちよつと身を屈めた。

「お嬢様、お誘いは大変ありがたいのですが、私ごとき卑しい身がこれ以上皆様とご一緒するのは憚られます。名残は尽きませんが、今宵はこれで……」

「駄目よ！」

ミナは強い口調で言ってから、はつと何かに気付いたように息を飲み、それからもしもじと上目遣いになって言い直した。

「ごめんなさい。でも、もうちよつとだけ一緒にいて？」

狙ってしおらしく装っているのではないらしい。本当に別れがたく、また一人にされるのを不安に感じているのが、その目の頼りなさから察せられる。

これではとても敵わない。リーファはやれやれと小さなため息をつき、愛想でない、本物の微笑を浮かべた。

「……承知しました。少しだけ、ですよ」

途端にミナはぱつと笑顔になって、リーファを早く早くと急ぎ立てた。

ホールにはミナが言った通り、紅茶や甘いワイン、砂糖菓子や練り粉菓子などが、軽いデザートとして用意されていた。貴人達はそれぞれ手持ち無沙汰をごまかすために何がしか飲み物などを取り、情報交換と根回しに精を出している。

まあ、こういう状況ならミナと二人で隅っこにしけこんでも構うまい。そう考えて、リーファは少し肩の力を抜いた。リユード伯も同じく考えたようで、リーファに会釈して娘の手を離し、ひとつの集団に足を向けた。

「それじゃ、どのテーブルから襲撃しましょうか」

リーファがおどけてミナにささやいた、その時。

「こちらにおいででしたか」

不意に人の近づく気配がしたと思った途端、ねちっこく甘ったるい声が、耳に生温い息を吹きかけた。リーファはぎよっとなって、弾かれたように背を伸ばし、咄嗟にミナを庇うようにして振り返る。大袈裟な反応に驚いた顔をして、どこぞの貴族のお坊ちゃんが立っていた。

（えーと誰だっけコイツは）

なんとか思い出そうとしたものの、一度に大勢の顔を見、名前を聞いたもので、どうにもこんがらかって答えが見付からない。

リーファが困っている隙に、青年はすつと一歩近寄り、彼女の背に腕を回して抱き寄せた。

「貴方ほどの方が、何を恐れてこのような隅に息を潜めておいでです。美しい花は人々に愛でられてこそ価値があるというもの。さあ、こちらへ」

「勿体無いお言葉、恐れ入ります」

ぞわぞわ悪寒が走るのを堪えながら、どうにかリーファは表情を取り繕った。既にミナ相手に忍耐力を使い果たしかけているのだ、これ以上は勘弁してもらいたい。

「ですが、みすばらしい野辺の花が皆様の間に割り込んで、場を汚すことになります。ご容赦を」

精一杯遠回しの拒絶を、しかし青年はまるで取り合わなかった。くすくす笑ってさらにリーファを身近に抱き寄せると、わざと耳元に口を寄せ、触れんばかりにしてささやく。

「知らないようだから教えてあげよう。国王の愛人というのは、決して卑しいものではないよ。むしろ胸を張って誇るべきことだ。じきに君も、名家の跡取りを夫にすることが出来るよ……私のようなね」

「……………」
びき。

リーファの中で何かにひびが入った。微笑を凍りつかせ、素早く

青年の小手を取って自分の腰から引き剥がす。あくまでさりげなく、痛めつけないように注意しながら。警備隊員の身のこなしをなめて貰っては困るのである。

「何か、勘違いをなさっておいでのようなですね」

につこりと、あくまで笑みを崩さずに、しかし声には怒気を滲ませてリーファが言う。様子が変だと気付いたリユード伯がこちらを振り向き、人の海の向こうからシンハその人も視線を寄越してきた。が、青年貴族はリーファの反応に驚くばかりで、密かな警戒の視線に気付いてもいない。きょんととして、つかまれたまま何故かふりほどけない自分の手に困惑し、それでも体面を保とうと平静を装っている。

「私は親切で教えてあげているんだよ。君はいずれ陛下の寵愛を失う。陛下もそれを承知で君を一時の慰めに行っているだけだ」

小声でささやきながら、なおもしつこくリーファににじり寄る。

相手の顔が、いまやはつきりと嫌悪に歪んでいるのも構わずに。

「あんな男よりも私の方が、君を幸せにしてあげられる……」

「っざけんな！！」

直後、ホールに怒声が響き渡った。ざわめきが一瞬でぴたりと止み、すべての視線がリーファに集まる。だがむろん、今更リーファも引けるわけがなかった。青年の手をねじ上げて痛めつけながら、その半泣き顔に言葉を叩きつける。

「あいつよりいい男がいてたまるか！！　おととい来やがれ色ボケ小僧！！」

言葉尻で、ねじ上げた手をぐるんと回し、素早く足を払って、青年を床に叩き伏せる。ドダン、と鈍い音を立てて青年がひっくり返ると、リーファはフンと鼻を鳴らして肩にかかった髪を払った。

そのまま彼女は挑むようにその場の面々を見回すと、

「お騒がせしました。失礼！」

背筋をぴんと伸ばしたまま、ずかずかと大股にホールを出て行ったのだった。

そんなわけで、後刻。

「おいリーファ」

「……ほつといってくれ……今すつげえ落ち込んでんだからよ……」
なぜか国王の私室でソファに突っ伏すリーファに、部屋の主は苦笑するしかなかった。

「落ち込む必要はないさ。あの『色ボケ小僧』の手の早さは有名だからな、誰もが事情を正確に察しただろう。おまえが代わりに怒鳴ってくれたおかげで、俺が口を出して問題を大きくすることにもならなかった。あの小僧は恥をかかされたが、それだけだ。大して影響はない。だから、いい加減に顔を上げろよ」

「うー……」

諭されて、リーファはもそりと起き上がる。くしゃくしゃになったドレスを手で伸ばし、情けない顔でシンハを見上げた。

「ごめんな。本当に、最後まで我慢しなきゃいけなかったのに」

「それはもういい。実際、おまえの振る舞いに溜飲を下げたご婦人も多かるうさ。ミナがすっかり感動していたぞ」

「うあ、やべえ。変な言葉、覚えてなきゃいいけど」

「たまには伯爵も困ればいい。それより、怒鳴って落ち込んで喉が渴いたろう」

シンハは軽く笑ってリーファの心配をいなし、冷たい水をコップに注いで差し出す。リーファは礼を言って受け取ると、半分ばかり一息に飲み乾した。

そこでふと彼女は自分のドレスに目を落とし、おや、と気付いて、改めてシンハを見上げた。

「そう言えばおまえ、オレのこの格好のこと、何にも言わねえのな」
「うん？ ああ、よく似合ってるぞ」

今更ながら、シンハがおざなりに褒める。
「すげえ気のない褒め方だな」

リーファは眉を上げ、立ち上がってドレスの形を整えた。しげし

げと、袖口の刺繍や、たつぷりした襷の作る艶やかな陰影を眺める。いかにも高貴さの漂う一着だ。着ている人間を一段も二段も上等に見せてくれること請け合いの。

「こんなの着たことねーから、変な感じだけど……ロトはぽかんとしてたし、ミナにはえらく感激されたし、伯爵まで そりやお世辞だらうけど 褒めてくれたんだぜ。おかげで、変な奴まで寄つてきちまったけど。おまえは特に何とも思わねーのか？」

そう言ってからリーファは己の発言の示唆する内容に気付き、赤くなつて慌てて言い足す。いやあの、別に変な意味じゃねーぞつ。そんな彼女に、シンハはやや驚いた様子で数回瞬きし、それから小さくふきだした。温かくて優しい、深い情のこもった笑いだつた。おどけた仕草で手を伸ばし、こつんとリーファの額を小突く。そうして彼は、にやりともにこりともつかない、微妙な笑みを浮かべて言つた。

「おまえほどいい女はいない。……と、知っているからな、俺は。衣装ぐらいで今さら認識は変わらんさ」

「っ！」

不意打ちをくらつてリーファは首まで真っ赤になつた。両手でドレスの裾を握り締め、わなわな震えつつ口をぱくさせる。ようやくのこと飛び出した声は、あまりのことに裏返つていた。

「ばっつ、馬鹿野郎ッッ！！ 滅多なこと言うんじゃねえッ！！」

あまりの動転ぶりに、シンハが声を立てて笑い出す。リーファは赤い顔のまま、拳を振り上げて殴りかかった。

「笑い事じゃねーだろつ、この馬鹿！ おまつ、そーゆーことは、未来の嫁さんにとつとけ！ 分かつてんのかっ！」

「おまえこそ、ああいう台詞は未来の夫のために取っておけ。俺を見込んでくれるのは嬉しいがな」

シンハはリーファの拳を片手で受け止めて下ろさせ、空いた片手でいつものようにくしゃりと頭を撫でる。リーファは口をへの字に曲げ、うるせえ、と唸つて、下ろされた拳を腹にお見舞いしてやつ

た。

「おまえ以上の奴がこの世にいるわけねーだろ。おまえ、自分が本当に只者じゃねえって自覚してないだろ。そうでなくとも、オレにとっちゃおまえよりいい男なんて、この先よっぽどのことがなきゃ出て来やしねーよ」

「……微妙に意味が分かってないだろう、おまえ……」

「?? なんだよ。本気で言ってるんだぞ」

「ああ、それは分かってる。……まあいいか」

シンハは諦めたように苦笑し、くしゃくしゃとリーファの頭を撫で回した。やめろよ馬鹿、いつもの抗議を聞きながら、彼は少しだけ、本当にほんの少しだけ 寂しそうな目をしていた。そのことに、リーファが気付くことは決してなかったが。

なお、余談であるが。

「お父様の馬鹿っ！ おととい来やがれよっ！！」

「ミナ……そういう言葉遣いは、彼女だけが下品にならずに済むのであって、おまえが使っても見苦しいだけだからやめなさい」

「ごまかさないでっ！ お父様のイロイロコゾウっっ！」

「やめなさいと言っのに」

辺境伯の家庭ではしばらく、親子喧嘩が絶えなかったそうである……。

(終)

EX・4 幸せな雪（前書き）

リーファが城に来て最初の冬。『予期せぬ事態』より少し後の話です。

本編未読の方にもわかるように書いた短編。

EX・4 幸せな雪

今朝は一段と静かで、空気が凍りついている。

リーファはベッドの中で往生際悪くもぞもぞ動き、白い息を吐いた。レズリアの王城に居候することになって、初めての冬だった。

彼女が生まれたのは、遙か西方のある町。その貧民街でならず者一族の使い走りをして育った。やがて逃げ出して、東へ東へと旅してきたが、生きる術と云えばやはり同じく、他人の懐から失敬することしか知らなかった。

それが、ふとした縁から一人の男に拾われ、こうして城の館に住まっている。図書館司書の養女として。

言葉もいくらか覚え、緑豊かな土地にもなじんだ。誰にも殴られず騙されず、衣食の心配をしなくて良い暮らしにも、ようやく居心地の悪さを感じずにすむ程度には慣れた。

それでもまだリーファは、時々これは夢ではないかと疑う。とりわけ、冷たく湿った空気が生まれ育ったあばら屋を思い出させる、こんな朝は。

しばらくぼうつとしていたが、居候に過ぎない彼女を起こしに来る者も、呼びつけて仕事を命ずる者もない。リーファは鳥肌の立つ腕をこすり、急いで服を着た。

養父はもうとつくに朝食もすませ、図書館に向かっている。リーファは室内に残されたパンをかじり、水を飲んだ。その冷たさに、身がすくむ。

ため息をひとつこぼしてから、リーファはうんと伸びをして体に活を入れ、歩きだした。

図書館に行けば、いつものように養父がこの国の言葉を教えてくれるだろう。そのぐらいしかする事がないのも侘しいが、言葉が不自由なのでは下働きも満足にできない。

とぼとぼと裏口から外に出た途端、リーファは目をみはった。

「うわ……」

こぼれた声が、その場で凍って砕けそうだ。雪、雪、雪。どこを見回しても真っ白で、戸口から出入りする使用人たちの足跡だけが、ひとすじの轍を残している。

「こんなに積もるのか」

生まれた土地では、積もってもくるぶしまでがせいぜいだった。だがここでは、迂闊に処女地に踏み込めば膝まですっぽり埋まりそうだ。

呆然と立ち尽くすリーファの脳裏に、嫌な記憶がよみがえった。板壁の隙間から吹き込むみぞれの冷たさ。

半分溶けて泥のまじった汚い雪を踏み、擦り切れた靴底から刃のような氷水がしみこんだ時の不快感。しもやけが悪化してぼろぼろになった指。

小屋から追い出され、腰を下ろすだけの乾いた場所も見付けられず、路地裏でしゃがみこんだ時の惨めさ。

図書館はすぐそこに見えているのに、間に横たわる雪を踏みしめて歩くことを考えるだけで、足がその場に根を生やした。

雪は嫌いだ。

雪は飢えと寒さと病気を、死を運んでくる。

リーファは不意に泣きたくなり、それが悔しくて回れ右をした。

雪なんか見たくもない。部屋に戻って、頭から布団をかぶってしまった。おう。

だが扉を開けかけたところで、不意に明るい声が耳に届いた。何やら数人の男たちがわあわあ騒いでいるが、まるで子供のはしゃぎ声のようだ。その中にまじる、聞き間違えようのないひとつの声。

「何やってんだ、あいつ？」

リーファは眉を寄せて独りごち、声に引き寄せられるように踏み出した。足の下で雪がキュツと鳴り、一瞬びくりとしたものの、頭を振って先へ進む。今はもう、ぼろぼろで水のしみる靴を履いてはいないのだ。

館の横手を少し歩くと、じきに前庭を見渡せる場所に出た。

ちょうどその時、薄雲を割って太陽の光が射し、一面の雪が雲母のように輝いた。リーファは目を細め、慌てて手をかざす。わいわいと楽しい声が大きくなり、いくつか知っている単語が聞き取れた。

「いい加減に……て下さいよ！」

「……から、手伝え。ほら、そっち」

「せえの、おととと……よし！」

ぱちぱちとまばらな拍手が起こる。まぶしさに慣れたリーファがそちらを見ると、なんと、巨大な雪だるまが庭の真ん中にでんと鎮座していた。それも、一体だけではない。儀仗兵の行列よろしく、城門から館の玄関までずらりと大小の雪だるまが並んでいる。

呆気にとられつつ辺りを見回すと、雪玉を転がした跡が、広い庭を縦横に走っていた。今も一人の男がころころと雪玉を大きくしている。確かあれは鍛冶屋ではなかったか。

リーファは口をぽかんと半開きにしたまま、たった今完成したばかりの雪だるまに目を戻した。傍らで、鼻や頬を赤くして、何人かの男が嬉しそうに談笑している。その中の一人、黒髪と夏草色の目をした青年が、ふとこちらを振り返った。

「リー！」

機嫌よく名を呼び、手を挙げる。リーファはまだ混乱気味のまま、そちらに歩み寄った。彼こそが、リーファを拾った責任者にして、この城の責任者でもある男なのだ。

「お早う、シンハ。何やってるんだ？」

リーファは雪だるまの列をちらちらと見ながら、おぼつかない言葉で問う。彼、シンハはにっこりして答えた。

「見ての通り、雪かきだ」

「違います」

すかさず不機嫌な声が割り込む。リーファとシンハが揃って振り向くと、雪だるまの背後から金髪の青年が現れた。彼だけは一人仏

頂面で、他の者と違って大きなシャベルを持っている。

「違う？」

リーファが聞き返すと、青年はむっつりと答えた。

「陛下のは『雪遊び』。僕のが『雪かき』」

「おいロト、変なことを吹き込むなよ」慌ててシンハが抗議する。

「それは陛下の方でしょう。張り切って出てきたかと思ったら、館の階段を掘り出ただけで、後は遊んでばかりじゃありませんか！やるならきちんとやって下さい、でなきゃ館に引っ込んでいて貰えませんか。ほかの皆まで遊んでしまつて、進みませんから」

ぴしゃりと言いつ返されてシンハがぐつと言葉に詰まる。リーファは二人を見比べ、おもむろに繰り返した。

「『雪遊び』と、『雪かき』」

「そうそう。覚えが早いね」

ロトがにつこりし、横でシンハが無然と空を仰いだ。リーファはちよつと笑うと、シンハと同じぐらい背丈のある雪だるまに駆け寄り、指で顔を彫つてやった。

「へへっ。シンハ、これは何？」

リーファの質問は、慣れていないと意味がわからない。が、シンハはああとうなずいてゆっくり発音した。

ゆ・き・だ・る・ま。

リーファもそれを繰り返し、それから居並ぶ雪だるまに次々顔や模様を描きはじめた。

「ほら、リーまで遊びだした。どうしてくれるんですか、陛下」

ロトがやれやれとため息をつく。シンハは肩を竦めた。

「仕方がないだろう、あいつは子供だぞ」

「……へえ、じゃあ私より年長の国王陛下はどうなるんでしょうねえ」

ロトはしらつと言い、わざとらしくトントンと腰を叩いた。

「私なんかもう腰に来てるみたいですけど、陛下の方が若いんですかね。不思議だなあ」

「分かった分かった、真面目に働くからそう恨みがましい顔をするなよ」

「早くそう言えばいいんですよ。ほら、シャベル」

途端に口トはしゃんとして、シンハに自分のシャベルを押し付けた。シンハは苦笑し、まだ雪だるまの列を盛装させているリーファを呼び戻した。

「リー！ 手伝ってくれ」

「わかった！」

すぐに気持ち良く答え、リーファが駆けてくる。口トが嬉しそうに「素直だね」と褒めたが、もちろん当てこすりだ。むつつりしたシンハを尻目に、口トはリーファを連れて、倉庫へ余分のシャベルを取りに行く。

「いつも、雪……ええと、どのくらい？」

「そうしょっちゅうじゃないけどね。ひと冬に五、六回はこのくらい積もるかな」

「『このくらい積もる』……少ない時もある？」

「もちろん。うっすら積もるのはしょっちゅうだよ。年によったら冬中ずっと雪が消えないままってこともある」

そんなおしゃべりをしながらも、二人は道具を取り、早速仕事にかかる。リーファは自分にも手伝いが出来るのが嬉しくて、張り切っていた。そもそもが、じっとしているよりも体を動かす方が好きなのだ。

そうしてしばらくせつせと雪をかいて道を作っていると、いきなり頭にはふんと雪玉がぶつけられた。びっくりして顔を上げると、さっと誰かが雪だるまの陰に隠れた。

が、何しろ大のおとなである。どうしたって姿が見える。

「シンハ……何やってんだ」

呆れ口調に、仕事しろよ、とにじませる。シンハはひょこつと悪びれない顔を見せ、またひとつ雪玉を投げてきた。リーファが難なく避けると、今度は口トの背中に命中した。

「……陛下」

ゆらりと不吉な気配を漂わせてロトが振り返る。シンハはわざとらしくたじろぎ、それからリーファに向かってニヤツとした。

「もうひとつ、『雪合戦』って言葉もあるんだぞ」

「雪がつせん？」

リーファが聞き返すと同時に、シンハの顔面で雪玉が炸裂した。さしものシンハもうつぶと息を詰まらせ、大慌てで雪を払う。

「ロト！　いくらなんでも、顔はない」

だろう、と言いかけたところへ、さらにもう一発。頭を雪まみれにされ、シンハはとうとう雪だるまの陰から躍り出て、ロトに飛びかかった。もちろんロトは一足早く逃げ出している。

走ったり隠れたりしながら雪玉をぶつけあう二人の姿に、他の者も気が付いてわつと参戦した。

ぽかんとしながら見ていたリーファも、すぐににんまりして雪玉を作りにかかる。

「なるほど、『雪合戦』ね。よし、行くぞー！」

わあつと声を上げ、両腕に雪玉を抱えて走り出す。

「そあれ！」

「うわ、ちよつと待てリー！　わっぷ！」

「いいぞ、そこだ！……っ痛！　この野郎！」

もはや真面目に雪かきしている者など一人もない。リーファは誰彼構わず大量にぶつけてやったが、雪遊びに不慣れなもので、ぶつけられた量も半端ではなかった。

結局、集中砲火を浴びた国王がヤケを起こして雪だるまを投げようとしたところで停戦が成立し、息を切らせた一同はてんでにそこから座り込んでしまった。

リーファも雪の上にひっくり返って、息を弾ませながら笑っていた。見上げる空が、いつの間にかすっかり晴れている。風は冷たいが、体が火照って寒さを感じなかった。

背中を柔らかく包み込む雪の感触が心地良い。リーファは目を瞑

り、その優しさにしばし身を委ねた。

この雪は、故郷の雪とは違うのかもしれない。だからこんなに……
「寝るな。埋めるぞ」

言われて慌てて跳び起きると、案の定、シンハが笑っていた。彼は大きな手でリーファの頭についた雪を払うと、そら、と湯気の立つマグカップを差し出した。

リーファは驚きながらそれを受け取り、首を伸ばしてシンハの背後を覗き込んだ。女中が二人、大きなポットと幾つものカップを持つて、呆れ半分、慈愛半分の苦笑を浮かべている。

「毎年、最初の雪が積もる度にこれだもの。後でちゃんと乾いた服に着替えて下さいませよ、陛下」

「リーファも、そのままでいちゃ駄目よ。汗が冷える前に着替えなさいね」

二人は口々に言つて、次の『大きな子供』のところへ歩きだす。

リーファはその背中に向かって礼を言い、マグカップに口をつけた。果汁とスパイス入りの熱いワインだ。

一口すすると、体中にほっと温もりが広がった。

「うわ、うまい」

「美味しい、と言えよ」

「『うまい』って感じなんだよ」

生意気に言い返し、リーファはもう一口すする。横でシンハも雪の上に座り、ワインを飲んでいる。リーファはふと思いつき、ごそごそ動いてシンハの足に尻を乗せた。

「おいこら」

「だって濡れるから」

「俺の足は濡れてもいいのか？ こら、どけ」

文句を言いながらも、シンハは足を動かすでもなく、苦笑しているだけだ。リーファも笑みを返し、それからぐるりを見回した。

庭の雪はさんざん遊んだせいでもうだいぶ汚れており、日の当たる場所では溶け始めていた。また積もらないかな、とごく自然に考

え、リーファは不意に悟った。

「あ、そうか」

いきなりそれだけ呟いたリーファに、頭の上からシンハが怪訝そうな目を向ける。

しばしの沈黙。

「どうした？」

問うた言葉は、リーファの母国語だった。何か、不慣れな言葉では説明しづらい事ではないかと思ったのだろう。そのさりげない優しさが胸に沁みて、リーファは危うく涙ぐみそうになった。慌てて顔を伏せ、なんでもないと首を振る。

雪が違うのではない。

着ている服が厚い毛織りだからでも、靴が丈夫だからでも、隙間風の入らない家に住んでいるからでもない。もちろん、それも大事なことなのだろうけれど。

（人が違うからなんだ）

雪が楽しいと思えるのは、今、この人たちと一緒にいるから。いい年をして子供のようにはしゃぐ国王と、文句を言いつつも一緒に遊んでしまう人と、そんな彼らに熱い飲み物を用意してくれる人と。

それはきっと、とても幸せなことなのだ。

じんわりと胸に広がる実感、どこまでも温かくて。

「リー、いい加減にどいてくれ」

そうは言われても素直には離れ難く、結局リーファは、カップが空になるまでそのままシンハにくっついていたのだった。

（終）

EX・5 壊れ物につき（前書き）

リーファが19歳の時の話。

警備隊でいくつか事件を解決したことが城でも知られるようになり、たまに便利屋的に使われることもあったり、という話。

EX・5 壊れ物につき

「あつ、リーファ！ こつちこつち、ちよつと来て！」

早番の勤務を終えた昼下がりに、リーファが城に帰ってくると、自室へ着替えに戻る間もなく女中の一人に呼び止められた。

はてなと訝りつつ、後についてゆく。大股なリーファの歩みでも早足になるほどに、女中はしきりと急かしながら使用人食堂へ向かった。

「何かあつたのかい？」

「ちよつとね、厄介なことになってるの。あなたなら何とかしてくれると思って」

あなたなら、と言われてリーファは小首を傾げた。使用人の内輪の問題は、女中頭テアと家令ヘインの受け持ちだ。

外部の者が絡む事態であれば、問題をそこで止めておくことは出ず、ロトやシンハの耳にまで届くことになる。つまり何にしる、リーファが関る部分はなさそうなのだが。

とりあえず事情を聞いてみるか、と部屋に入ったリーファは、思わず「うわっ」と呻いてしまった。

食堂にいたのは家令と女中頭、女中が二人。そして彼らを窒息させてしまいそうな、重く緊張した険悪さだった。

「……何事だあ？」

リーファは呆気にとられてつぶやいた。

召使達の間では普段、目立った争いは起こらない。ひとつには国王と側近の配慮で仕事の環境がよく整えられているからだし、その国王が姿を現せば、それだけで大抵の揉め事は自然消滅してしまうからだ。

が、幸か不幸か現在、国王陛下は不在。公務で街に下りて貴族の館を訪問しているのである。脱走して行方をくらましていなければ、

だが。

それはさておき、リーファは剣呑な雰囲気困惑しながら、女中頭と家令のどちらにともなく問いかけた。

「えーっと……一体、何をそんなに睨み合ってるんだい？」

質問されても、しばらく二人はお互いから視線を外さなかった。

まるで、目をそらせば相手の視線で刺し殺されるとばかりに。だが女中頭のテアが、先にリーファを説得してしまえと決めたらしい。

やおら振り向くや、憤然としてまくし立てた。

「この耄碌山羊が、自分の粗忽を棚に上げて人に罪を着せようとしてるんだよ。貰った釣銭を自分のポケットに入れたのか、その辺に落つことしたのかも忘れてしまったくせに、この子達が盗んだと決め付けて、出せの返せのって」

「下品な中傷は城の品位を損なう。内輪の場であっても控えたまえ」

山羊呼ばわりされた家令は、その所以である髭に手を当てながら、いつものむつつりした顔のまま言い返した。

「私は間違いなく、小銭を裏口の棚に置いた。束の間とは言えそのまま場を離れたのは迂闊だったが、戻ってみれば消えているなどとは予想しなかったのですね」

詳しく聞いてみると、話は単純だった。ヘインが出入りの業者に代金を支払った際、小銭がなくて釣りを受け取ったのだが、それをそこらに置いたまま業者と少し外へ出ている間に、失くなったというのである。

そして、ちょうどその間、ここにいる二人の女中がそれぞれ近くで仕事をしていたらしい。もちろん二人とも、見てもいないし盗んでなどいない、と主張している。

本当にそこに置いたのか、と記憶を疑うテアの言い分も、もっともだ。リーファも頭を掻いて、言いにくそうに念を押した。

「ヘインさん、ポケット全部ひっくり返してみたかい？」

「むろんだ」家令は渋面で答えた。「紛失に気付いた時、真っ先に調べた。周辺の、無意識に何かを置きそうな場所もすべて。しかし

見付からなかった以上、誰かが盗んだと考えるほかあるまい」

「……親切心で、どつかにしまつちまつたとか」

「それにしても、この二人以外に近付けた者はいない」

断言されてリーファが唸ると、ヘインもわずかに態度を和らげて続けた。

「私とて、わずか銅貨数枚のことで騒ぎ立てたくはない。支払額の端数を切り上げて帳簿に記すか、なくなった分を私の財布から出してしまえば、誰に知られることもなかっただろう。だが、どうしても盗まれたとしか考えられないのにそれを見逃せば、次はもっと多額の金が消えてなくなりかねないのでね」

「だからって、悪いことは全部女中のせいにするのはどうかしらね」
テアは鼻を鳴らした。ヘインが睨んだが、むろん彼女は歯牙にもかけない。

「まったく、みみつちい男だこと。自分がなくしたのを認めたくないのなら、それでもいいけど。光物が好きな烏に取られたとでもしておけば済むじゃないの。はした金でしょうが」

そういう問題ではない、じゃあどういう問題なのさ、と二人がやりあつのを他所に、リーファは疑いをかけられている女中をじつくりと観察していた。

一人はずっと以前から城にいるフェイミアだ。きつい物言いと愛想のなさゆえに冷淡な印象を与えるが、リーファも特段親しくはないので、本当のところ彼女がどういう人間なのかは知らない。

もう一人は名前を知らない新顔だった。小心らしく、今もすっかり顔色を失くして、うつむきがちにそわそわと視線をさまよわせている。

と、フェイミアが不機嫌に「あのう」とうんざり顔で声を上げた。家令と女中頭が振り向くと、彼女は腕組みしてじろりともう一人の女中を睨んでから言った。

「実際、盗られたのは『はした金』なんでしょう？　だったらもう、いいじゃないですか。来月のイレエネの給金から差っ引いとけば」

「なっ　！」

イレネと呼ばれたもう一人の女中は抗議の声を上げかけたが、フェイミアが舌打ちしたもので、言葉を飲み込んだ。その沈黙に、フェイミアが言葉をかぶせる。

「早く仕事に戻らないと、今日の分が終わりませんよ、テア。あたしは夜中に蠟燭の明かりで階段の手摺を磨くなんて嫌ですからね」

「遅れた分は無理に取り戻さなくてもいいよ。今日だけはね。フェイミア、イレネだってやったとは言ってないんだから、決め付けるもんじゃないよ。それに、差っ引くなら、最初にへまをしたこの山羊の方こそが妥当じゃないの。高給取りなんだから」

話がまた元に戻ってしまった。リーファはやれやれと眉を上げ、ため息をつく。

「なんでこんな時に限ってシンハの奴はいないのかねえ」

独りごちたつもりだったが、途端に全員がぎよっとなって振り返った。

「止してくれたまえ！」ヘインが叫ぶ。「たかが銅貨数枚で陛下を煩わせるなど！」

「そうだよ、リー、そんな大袈裟な！　あたしの監督が行き届かないみたいじゃないか」

テアも身震いして言う。リーファは困惑気味に二人を見つめた。

「城仕えて長いのに、あんたでもシンハが怖いのかい？」

「怖いのではない。しかし、このような些事で煩わせたとなれば、私は己の無能を深く恥じ入らずにはおれんだ。それはこの場の誰もが同じだろう。それほどの罰に値することではあるまい。むしろ陛下がお尋ねになればこの女中らも嘘はつけまいが……」

ヘインが言い、すべての元凶はおまえ達だ、とばかり非難の視線を送る。フェイミアは顔をこわばらせ、イレネは悲鳴に近い声を上げた。

「お許し下さい、どうかそのような恐ろしいこと！　どうかどうか、そればかりは」

まだ国王の前に引き出すと決まったわけでもないのに、ずぶ濡れの子犬さながらぶるぶる震えている。目には涙が溜まり、うつむいたはずみにぼとりと雫が落ちた。

フェイミアもやや臆したような表情だったが、しかしこちらは強気に主張した。

「そうですよ、あたしはこの仕事も長いんだし、陛下のお力も存じ上げてます。今更、さもしい真似をするわけがないじゃありませんか。あたしじゃないんなら、イレエネに決まってます。もういいでしょう、こんな話」

リーファは各人各様の反応を眺めてから、ふむ、とうなずき、「じゃ、あいつは抜きで」と軽い口調で言って皆の緊張を和らげた。「代わりに思いついた事があるんだ。さっさと終わらせたいのはオレも同感だけど、ちょっと待っていてくれるかな」

言い置いて、厨房へ走って行く。じきに戻ってきた彼女は、手にウズラの卵をいくつか持っていた。テアが不審げに眉を寄せる。

「卵？ 何を始めるつもりだい」

「実験だよ。さて、と……そうだな、とりあえず一番分かりやすそうな、イレエネ」

名前を呼ばれ、女中はびくりと身を竦ませる。リーファはウズラ卵をひとつ、そっと差し出した。

「二本指だけで持つてくれるかな。そう、落とさないようにね。大丈夫？ よし、それじゃ、今から質問するから答えてくれるかい」

イレエネが親指と人差し指で卵を挟んだのを確かめ、リーファは安心させるように笑みを見せた。

「とりあえず最初に……あんたの名前は、イレエネ、で正しいのかい」

「……？ は、はい」

思いがけない問いに、イレエネは目をしばたいてからおずおずとうなずいた。うん、とリーファもうなずき返し、質問を続ける。

「いつからこの城に勤めてる？」

「え、ええと……三月前から……です」

「仕事はきついかい？」

「いいえ、ちつとも！ あ、いえその……楽をしているわけじゃありません、けど、でもあの、こんなに恵まれているのは初めてで。辛くはありません、決して！」

慌ててイレエネは補足した。さぼっているとか仕事に不満があるとか思われたくない、と焦ったのだろう。はずみで、卵がミシッと微かな音を立てた。

リーファはそれに気付かなかったふりで、それなら良かった、とにつこりする。そして、一呼吸置いてから言った。

「小銭を盗んだのは、あんたかい」

「違います！ そんな、そんな事しません！ 信じて下さい、あたしは……」

ビシッ。

弁明に夢中になるあまり、手に力が入った。小さく脆い卵の殻が、指に押されて割れる。イレエネはぬるつとした感触で我に返り、気持ち悪そうに自分の手を見下ろした。次いでその意味に気がついたらしく、さあつと青ざめる。

全員の注視の中、彼女は半泣きで首を振った。

「ちつ、違います、本当に違います！ あたしじゃありません！！ お願いです、ようやっと巡り合えた仕事なんです、辞めさせないで下さい！」

「嘘をついたから、卵が割れたんじゃないの？」

フェイミアが素っ気なく突き放す。ヘインは無表情に、テアは戸惑い顔で、イレエネを見つめていた。誰にも庇ってもらえず、イレエネは言葉に詰まって涙を流した。リーファ一人だけが、不釣り合いに明るい口調で言う。

「まあとりあえず、こんな感じで、皆にも分かったよな？ オレが昔いた中部でよく使われてた、嘘を見破る方法なんだ。イレエネ、ほら、手を拭いて」

用意しておいた濡れ布巾を無造作に差し出し、続けてもうひとつ卵を取った。

「じゃあ今度はフェイミア、あんたが持つて」

「あたし？ もう犯人は分かっただからいいじゃないの」

「いやまあ、一応。あんただったら割れないってことを見せといった方が、はつきりするだろ」

「……そりゃ、そうだけど」

渋々とフェイミアは卵を受け取る。彼女がこれ見よがしに卵を捧げ持つと、リーファは気楽な口調で言った。

「じゃ、フェイミア。あんたはヘインさんが小銭を置くところを見たかい？」

「……………」

無言で口を尖らせ、首を振る。

「面倒臭いだろうけど、ちゃんと返事してくれないかな。はい？
いいえ？」

「いーえ」

フェイミアは投げやりに答えた。卵は無事だ。

「じゃあ、あんたは小銭を取ってない？」

「取ってません！……ほら、これでもういいでしょ」

馬鹿馬鹿しい、とばかりにフェイミアは卵をテーブルに戻そうとする。リーファはあえてそれを止めず、しかし彼女が卵を手放すのに先んじて言った。

「最近、付き合う男を変えた？」

グシャ！

まともに卵を握り潰してしまい、フェイミアは顔を歪めて憎々しげにリーファを振り返った。

「いきなり何なのよ、関係ないでしょう！」

牙を剥いて噛み付かんばかりの剣幕だ。リーファはわざとらしく驚いて見せたが、怯みも詫びもせず、肩を竦めた。

「別に。ただ、あんまり性質の良くない奴なんじゃないかと思って

さ」

「そんな事、今……」

「袖口と襟元。痣が見えてる」

「……！！」

リーファに指差され、フェイミアは息を飲んで我が身を庇うように腕を引き寄せた。

成り行きに面食らったテアとヘインは、言葉もなく、フェイミアとリーファを見比べている。すっかり蚊帳の外に置かれたイレエネも、何が進行中なのかと涙目のまま見守っていた。

「フェイミア、あんた相当、貢がされてるんじゃないのかい」

「……あ、あんたに、何の……」

「銅貨数枚ぐらい、なくなっても分かりやしない。誰も困らない。でも、あたしには必要だ。……そんな誘惑には駆られなかったと、もう一度卵を持って、はつきり言えるかい？」

「………つつ」

フェイミアの唇がわなわなと震えた。怒りの形相がぼろぼろと崩れ落ち、情けなく弱々しい顔が現れる。驚きに目をみはるテアとヘインの前で、フェイミアは泣き崩れてしまった。

テアが急いで傍らにしゃがみ、その背を撫でて慰める。ヘインはかるうじて平静を保った顔にわずかばかり畏れを交えて、リーファを見つめたのだった。

ややあつてフェイミアが泣き泣き盗みを告白し、テアに付き添われて食堂の隅の席に落ち着くと、リーファは卵を片付けにかかった。「イレエネ、嫌な思いさせてごめんな。あんたじゃないだろうとは思っただけだよ」

「い……いいえ、そんな……」

イレエネは首を振り、心配そうにフェイミアを見やってから、すっかり曇りの取れた顔でリーファを見つめた。

「あなたはとても賢いんですね。お城に来てから、噂は聞いていま

したけど」

「え、いや、賢いとか言うほどのもんじゃねえけど」

照れ臭くなつてリーファは変な顔をする。イレーネは微笑んでから、ふと小声になつておずおずと言った。

「あの……この事、陛下のお耳には入りませんよね？」

「私からも頼むよ、リーファ」

ヘインがしかつめらしく、口を封をして見せる。リーファは呆れてしまった。

「そりゃ、わざわざ告げ口するようなことじゃねえけどさ。何もそこまで怖がらなくてもいいだろ？ イレーネあんた、シンハの事神様かなんかと思つてないかい？ そんなに凄いい奴じゃないよ」

厨房に籠もりに来た国王陛下と鉢合わせしたら、どうするんだ。

そんな心配もあつて、リーファは少しシンハの心証を良くしてやろうと試みた。三月前から出くわしてないからには、彼女の受け持ちはシンハの出没範囲から外れているのだから、何しろあの国王はいつどこに現れるか知れたものではない。だが思いやり空しくイレーネは途端にまたびくついた表情に戻ってしまった。

「そんな、それはあなただから……。だって、国王陛下はとても厳しい方だと聞いてます。前のお屋敷でも……」

「前の？」

「あつ、い、いいえ、すみません！」

「謝らなくていいよ。誰のところで、どんな噂を聞いたんだい？」

リーファが穏やかにしかし断固として促すと、イレーネはためらいに目を伏せながら、ぼつりと告白した。

「実は……私、元々は、ファロス男爵のお屋敷にお勤めしていたんです」

「！」

ぱか、とリーファの顎が落ちた。咄嗟にヘインを見ると、こちらも知らなかったらしく、無言ながら目を丸くしている。

二人は絶句し、しばし言葉もなくイレーネを見つめた。

塩の密売がばれて男爵家に取り潰しになったのは、一年ばかり前のことだ。街にある館は使用人の継続雇用を条件に競売にかけられ、今は別の貴族が所有しているが、領地の館では事情が違ったのである。

男爵領はすべて国有になり、館に住むのは管財人だけ。貴族の華やかな生活が営まれなくなったら、使用人も必要なくなる。大勢が解雇された。

「……それじゃあ、びびっちまうのも無理ねえなあ」

そもそも悪いのは男爵の方で、しかもその当人はシンハの温情によつて命を永らえているのだが、使用人に見れば、国王の鉄槌に生活を叩き潰されたわけであるからして。

でもなあ、と、本人を身近に知るリーファは複雑な気分になる。

するとその時、まるで見計らったように、厨房の方から足音が近付いてきた。そして、

「リー！ おまえ、卵をどうする気だ？ 俺が料理長に……」

明らかに自分の予定で頭がいっぱいの国王陛下が、ずかずか食堂にお出ましあそばしたのである。

もちろんシンハもすぐに、まずい所に飛び込んだと気付いた。おっと、という顔をして室内に視線を走らせ、かすかに眉をひそめる。内密に、と頼んでいたヘインもテアも、今しがた盗みを告白したばかりのフェイミアも、揃って死を目前にしたかのごとく、青ざめて凍りつく。

ただならぬ空気についてシンハが詰問する前に、リーファはわざと大声を出して呆れた。

「おまえこそ、卵をどうするつもりだよ？ 今日仕事でお出かけじゃなかったのか」

ふっ、と呪縛が解けた。空気が軽くなり、シンハも怯えた使用人達から視線を外してリーファを振り向く。

「いや、それはもう終わったんだ。だから今の内に、準備をしておこうとだな……」

「何に使うんだ？」

「出来てからのお楽しみ。いいから卵を返せ」

「ちえーっ、なんだよ、ケチ。あ、ふたつほど割っちまったけど」

「それじゃあ、卵の入ってない『外れ』がふたつほど出来るな」

「ハズレえ？ 本当に何をする気だよ」

いつもと同じ、気の置けない無害な会話。凍てついていた場の空気が少しずつ緩み、常温に戻ってゆく。

と、その時。

「あ……の、あの、まさか」

イレネがかすれ声を漏らした。リーファは振り返り、まさに卵をふたつ割ったような目をしているイレネを見てふきだした。

「その、まさか、だよ。こいつが噂の国王陛下。そんなに怖くないだろ？」

茶化す口調でリーファは言ったが、イレネは絶句したままシンハを凝視している。当の国王陛下は、作るべき顔を決めかねているような風情だ。

あれ、なんだか様子が変わだな。リーファが訝って首を傾げた、直後。

イレネが震える両手を口元に当てて、悲鳴を押し殺すかのようにな、か細い声を絞り出した。

「でも……でも、私、あなたを知ってます。だって、その目と声……、あの時、確かに」

信じられない、とつぶやいて後退りする。じりじり、一步、二歩。そのままどこまでも逃げて行ってしまいそうだったので、シンハが微苦笑をこぼした。

「確かに、俺だったな」

そう応じてから、彼はヘインに視線を転じた。

「ヘイン。何か彼女のことで問題が起きたのか」

「いいえ」忠実な家令は即答した。「お尋ねの理由がイレネの経歴にあるのでしたら、何の問題も起きておりません。現在のこの状

況は、私どもの間の瑣末事でございます」

頭を下げたヘインに、シンハは胡散臭げな目をくれたが、詮索はしなかった。

「そうか。なら良い、任せたぞ」

簡単にそれだけ言つて、彼はリーファの肩を叩いた。

「卵の使い道を知りたければ、おまえも手伝え。ほら来い」

「はいはい、仰せのままに」

リーファは厭味つたらしく応じて、残った卵を抱えると、イレエネに苦笑を見せてから食堂を後にした。彼女の視線が自分達をシンハをずっと追っていることは、背を向けていても分かった。

厨房に着いてから、リーファは「それで」とおもむろに切り出した。

「何やつたんだよ、おまえ」

「ここは取り調べ室か？」

シンハは苦笑しながら、鍋に水を張る。手振りで指示してリーファに卵を入れさせると、彼はそれを火にかけた。ゆで卵にするらしい。リーファは一瞬そちらに気を取られたが、シンハがその場を離れたので慌てて顔を上げた。逃げられるかと思つたのだが、杓子を取つて来ただけだった。

シンハは卵を割らないように、そつと静かに湯の中で転がしながら、ごく簡単に答えた。

「男爵家の処分が済んでしばらくしてから、後始末を確かめに行つたんだ。解雇された使用人の何人かは状況が酷かったから、改善されるように少し手を打った。それだけだ」

「そついや、半月近く留守にした事があつたよな。あん時の話か」
ふむ、とリーファは記憶を辿つて納得し、次いで大きなため息をついた。

「本っ当、マメだなあ、おまえ。何もそこまで自分でやる事ないだろうに。で、その時イレエネに姿を見られて、救いの君になつちま

「たつてわけかい？」

「俺が手を回した事は知らない筈だし、今も確証は持っていないだろう。いくらなんでも、一国の王がこんな細かい事に首を突っ込むなんて、非常識だからな」

自分で言つて、シンハはにやりとする。リーファは半眼になって皮肉をお見舞いした。

「ゆで卵作ってるのは非常識じゃねえってか？」

「……………」

沈黙は金。

特に、墓穴を掘るのが特技の誰かさんにとっては。

リーファは慈悲深く相手の黙秘を尊重し、しばらくただ卵を転がすのに専念させてやった。そうしておいて、不意を突く。

「あ、口トだ」

「……！」

ぎくつ、とシンハの背中がこわばる。咄嗟に振り返ってから、彼は参った様子で軽くリーファを睨んだ。

「あのな……本当に今日は、予定より早く用事が終わったんだ。口トがまだ戻っていないのは、街で私用を片付けているからで、俺が後を押し付けて逃げ出したからじゃない」

「だったら、びくつくことはねえだろ」

「おまえのせいで、最近は無条件に反応してしまっただ。あまり俺をオモチャにするな」

「本当かなあ？ 卵、ひとつ生のままとつとけば良かったな」

にやにやしながらリーファが言う。怪訝な顔をしたシンハに、リーファは先刻の出来事をかいつまんで話した。むろん銅貨のことは一切伏せて、ただ卵の果たした役割だけを。

「嘘を見破る方法、か。俺もいくつか聞いた事がある。水を一杯に張った器を持たせるとか、手のひらを銅板に当てさせて曇り方を見るとか。しかしおまえは上手くやったな」

「そうかい？」

「ああ。単純に、嘘つきなら卵を割ってしまう、と決め付けなかった。圧力がかかれば壊れるのは、卵も真実も同じだ。取り扱いには慎重を期さないとな」

「……うん。人の言うことなんて、いくらでも変わるもんな。本当言つと、ちょっと仕事に使えないかと思っただけど、よっぽど他に方法がない時以外は、やめといった方が良さそうだ」

リーファは残念そうに苦笑する。シンハは微笑むと、軽く彼女の頭をくしゃりと撫でたのだった。

ちなみに、ウズラ卵の最終的な行き先は、夕食のロールキャベツだった。

ちようど断面に卵が覗くよう、上手く切つてある。リーファは部屋で養父と一緒にそれを食べながら、今頃きつとフェイミアとイレネのところにも、特別に届けられているんだろうな、と考えていた。

「つとに、あいつは……」

「? なんだつて?」

「いや、独り言」

卵の黄身が丸い太陽のようだ。ころりと外れたそれを、リーファはそつと口に運んだ。ほんのり甘くて優しい、元気の出てくる味をしていた。

(終)

EX・5 壊れ物につき（後書き）

これで一旦、番外の投稿も終了して完結とします。

続編は何本か自サイトにありますので、気になる方は目次頁下部のリンクからお越し下さい。

「小説家になろう」でないと読みづらいから投稿して欲しい、という声があれば、長・中編各1本ぐらいは出しますが、なければこのまま終了で。

（総分量が多いため、全部転載するのはどうにも心苦しいのです）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5846v/>

王都警備隊

2011年10月14日22時40分発行